

WYCLIFFE COLLEGE LIBRARY



3 1761 02869 2192



The Development of Old
Testament Prophecy
by

Rev. Mrs. Maria Butler

Presented to Wycliffe College
Library by the author

(See back of book.)

！未の海外を知れ
... 全てを懇切なる本に書ける... 聴け

● 最新版 ●

海外旅行者の頭痛の種となる事柄に關し懇切に各地の地理・歴史・人情・習慣等の實情を最も正確綿密に示してある本書は、處女旅行者の不安を一掃し極めてコンファタブルな旅を続けしめる事が出来ると共に、趣味豊かな内容により車窓船室の旅情を慰め得る事疑ひなし。海外に旅せんとする者には勿論歐米地史探究の資料として將又海外に雄飛せんと欲する者に取つて唯一の好伴侶である。

米國旅行案内

歐洲旅行案内

北米三都案内

クニン
ーント
ーント
ユシス
ニワホ

寫眞・地圖六十二種
定價三圓九十錢
送料二十八錢

地圖・寫眞七種
定價三圓二十錢
送料二十六錢

寫眞・地圖二十五種

定價二圓八十錢

送料二十一錢

海外旅行の順序及方法。日程。旅賃調査。旅券下附の手續。渡航者の資格認定外國領事館に於ける査證の手續。各國入國法。旅行一般心得。其の他各國著名都市風物の紹介を正確に詳述し地圖と寫眞とにより各國の實況を遺憾なく描寫してある。本書公刊するや海外旅行者より唯一の秘書として賞讃されたる事を感謝する

發行所

東京市麹町區元園町一の二九
振替東京二六二一七番
電話九段三五一六番

海外旅行案内社

六四
判製
ク入
一美
ス本

文部省專門
學務局長

西山政猪序
門田重雄編

(昭和參年版)

論文
總覽

日本の博士研究

四六判上製
函入美本
定價一圓八十錢
送料十五錢

世上、博士濫造の非を叫ぶものがあるが吾人はこの叫びをあげる前に先づ博士の研究業績を知らねばなるまい。然るに現在までこの學者の研究を知るに一の文献だになかつた。固より幾多の學術雜誌に貴重な論文は幾多發表せられるのであるが、之等發表雜誌の整理全く無く幾つて學者が自己の研究に重要な文献を索むるに不尠困難したのである。本書の出現によつて之等の苦痛は除かれ學術の寶庫は永遠に開かれた。本書は我國に於ける最初の學位論文集にして學者は勿論一般家庭にても生命を托する醫師の選擇上その權威を知る要があらう。醫學博士かならずしも萬能たるものではない。其他學校會社等に於て本書の活用至大なるを想ひ敢て江湖に薦む。

內容概略

▲本書は明治廿一年五月から昭和二年八月までの法・醫・藥・工・文・理・農・林・獸・經濟・商・政治の各博士一切を收録す。▲各博士、學位授與年月日、學位請求論文題目、論文發表の雜誌名年月等を明示す。▲新舊學位令並細則、各大學の學位に關する規定及手續等を詳記す。▲本書は論文題目其他歐文で發表せられたものは全部邦譯し専門外の人にも充分判るやうになつてゐる。▲博士種別一覽表、各大學學位授與一覽表索引等を附す。▲本書は毎年新博士追録に便なるやうにしてあり一本で永久に利用出来る。

振替
東京
一六三
番

社

明

啓

東京市麴町二區
元町一丁目九

法學士 吉岡永美先生譯

定價二圓・送料十五錢

フロイトとタブー

四六判クロース上製函入

紙數三百十二頁

本書はフロイトの著トーテムとタブーの全譯にして、フロイトがその犀利なメスを振ひ民族心理學上の諸問題に興味深い解釋を與へたものである。道德・宗教・哲學・法律等の原始的形態を論じ、且つ社會組織の起原的形式とも云ふべきトーテムイズムから、犠牲の社會的意義、動物の神格化、國家的權威の發展等を論じ、人間心裡の秘奥に潜む衝動の葛藤と、それから發出するいろいろな社會現象に劃切なる分析展開を試みたものである。

神も魔も人間の衝動の具象化せられたものであるが、愛するものが死後何故に魔となつて生けるものを追及するのであるか——を精神分析的に究明し、或は國家の形成、王權確立の心理的基礎を探究して王を愛慕し忠順を誓ふものにも、必ずこれに反噬復讐せんとする無意識的衝動が潜み、意外なる形式に於て表現を求めつゝあるといふが如き驚くべき心理の秘密を曝露して居る。尙原始人の心理は精神病患者の心理と一致照應することを詳説し、而もそれは吾人の意識せざる衝動の現はれだと説く。かくてヒステリーは藝術創造の、強迫神経病は宗教の、偏執狂は哲學體系の颯意的戲畫である、といつて居る。フロイトの勞作が民族心理學上劃時代的のものであることは既に定評のあるところである。

發行所

東京市麹町元園町一の二九
振替東京七四三六一番

(電話九段
三五一六)

啓明

社

文學士

近藤宗男先生譯

(四六判上製國入美本)

キウツ 基督教の起源

上卷・下卷・各

定價一圓五十錢

送料十五錢

カウツキーが其「無產者の階級闘争に深く關與せる結果神教及び宗教史の教授が研究せざりし原始基督教の本質を瞥見するを得」て之を其唯物史觀の鋭き眼光で描き出したのが本書である。「基督の人物に關しては何等確實な事を言ひ得ない事及び此人物に言及することなくしても基督教は説明し得る事」——之が著者の到達した見解であり「歴史を測量の綱として其航せる航路を研究し其れと其内の自らの位置とを理解する手段として用ふる事、現代社會の種々相を理解する爲に絶對的必然物たる歴史の正しき科學的理解に寄與せん事、之が著者の意圖である。基督教國民に於る程には基督教は我々現在の重大なる關心事とはなり得ないかもしれない。然し等しく「宗教」の名の下に總括し得べきものを我々も亦種々有するのである。讀者諸氏は必ずや單なる興味以上のものを本書の内に見出さるゝ事と信ずる。所謂「基督教」に對する興味の有無を問はず、敢て一般に薦むる所以である。

東京市麹町區
元園一丁目二九

啓明社

振替東京七四三六一番
電話九段一五六一番

立教大學教授
文學士

菅圓吉先生譯

ムー比較宗教史概論

定價 一圓五十錢
送料 十三錢
四六判クロース製
函入・二六〇頁

本書は世界的宗教史家ハーブード大學教授ジ・エフ・ムーアが過去二十五年の講義の結果を簡單明瞭に而も通俗的に叙したものの、比較宗教史と云ふ大問題を斯の如く短く斯の如く手際よく纏めたものは本書の他に其の類を見ざる處、譯者は親しく同教授の指導を受け、未來を囑望される宗教學の新人、其の流暢なる譯文は翻譯の臭味を絶えてなからしむ、宗教の研究に志す人は勿論苟も宗教に興味ある人の必讀必携の書、特に宗教學概論の絶好の教科書として推賞する。

西谷勢之介詩集

虛無を行く

四六判上製函入
定價 一圓五十錢
送料 十三錢

啓明社

振替東京七段九
番一六三六
電話番

東京麹町一ノ
區九二

昭和三年四月五日印刷

豫言の進展

昭和三年四月十日發行

定價金貳圓



著者

村尾昇一

發行者

磯貝錦一

印刷者

待臥臥士

發兌

東京・麴町・元園町一の元
振替東京七四三六一番
電話九段三五一六番

啓明社

東京大倉印刷所行

『この聖書は今日なんぢらの耳に成就したり』と（ルカ傳四章二十一節）喝破したイエス。

そのイエスこそはまことに神のキリスト（キリストとはメシヤのギリシヤ語）であるとするものが基督教徒である。

まことに舊約の豫言はキリストに至つて眞實なる體現を見、彼に於て眞實の價値を與へられたといふべきである。故に往昔の註解者等が、豫言を以て、たゞキリストの降臨を豫告する使命を有するに過ぎずとしたことは、その形に於ては素より誤謬であるけれども、その精神に於ては眞實のものを把んでゐたと爲すべきである。

舊約に
於ける

豫言の進展——（終）——

これがメシヤ待望の意義であつた。ヤーエの熱信家であり、デモクラシーの擁護者であり、純清道德の主張者であつた豫言者達は、さうした最後の日が來らなために、先づ己が置かれたる立場に於て、己が國と己が時代とに叫びかけたのである。

そして、さうしたメシヤは既に世に來れりとするものをクリスチャンといふ。

『我律法と豫言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず反つて成就せん爲なり』（マタイ傳五章十七節）といつたイエス、

ナザレの會堂に、イザヤの書（六十一章——二節）を聞いて

『ヤーエの靈我に在す。これ我に油を注ぎて（メシヤとして）

貧しき者に福音を宣べしめ

我を遣はして囚人に赦を得ることゝ、盲人に見ゆる事とを告げしめ

壓へらゝ者を放ちて自由を與へしめ

主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり』

との句に至り、

かうして、我等の究めたるところに由つて、我等は舊約の豫言が、人生々命の源に觸れたる、永遠的な宗教運動の流れであることを見た。それが有する特殊なる形はたゞそれが國民的な、又時代的な制限を受けたりしことの結果に過ぎないのであつて生命そのものは永遠的であり又世界的である。

そして、この豫言運動は、我等の研究が示して呉れたやうに、神の國と、その統治者たるメシヤを中心として動いてゐた。

豫言運動は世界の人々に向つてかう呼びかける。

『宇宙は死物でない。生きてゐるのである。宇宙は無心ではない。自然法則は器械的のものでない。人格に由つて統一さるゝものである。理想的なる人格を生むために動いて行つてゐるのである。だから世界歴史の進展は、メシヤの出現に向つて動いてゐるのだ。しかしこのメシヤは獨立的な優越を誇りとするものではない。彼の主義は奉仕にある。そしてそのために彼は自らを犠牲とすることを厭はないのである。彼の目的は愛に由れる團體生活にある。神の國を出現せしめることにある』と。

ヤ教の律法主義と、默示文學の熱情主義とに轉化したものゝ中には、時代に先ちて時代を警醒し、しかも絶えずリアリズムに即する實際家であつた豫言者の姿を見出し得ないかに思はれないではない。しかし、更に立ち入つて之を考察する時、既に説いたやうな連關的進展の跡を見逃し得ないのである。國民的團結の中に豫言的生命を防護し又善藏することは、ユダヤ人の接觸する範圍が次第に廣汎となり、又多種多様のものとなるに従つて、極めて緊喫のことゝなつて來た。さればこの國民的生命を他の異教的感化より救ふためには、律法主義のやうな嚴格なる排他主義も必要であつたのである。しかし、律法主義が餘りにも形式的のものと墮し、恰も硬い外皮のみより成れる果實の觀を呈しやうとした時、その核心にある生命を支持したるものが默示文學であつた。默示文學の異様なのは、之を胎兒の怪異なるゴナスグに比べることができやう。胎兒の價值がその外形にあらずして、將來に於ける生命の源を有することにゐるが如く、默示文學の價值も、それがやがてキリスト教運動として伸び來るべき生命の所有者たることにあつたといへやう。

の鈴にまでヤーエ聖しと記さるゝに至る』（十四章——二十六節）のである。

この外、特に著しい豫言文學と見るべきものはイザヤ書二十四章——二十七章にあるものであるが、他の黙示文學と凡そその軌を一にしてゐるものである故にこゝにはそれを詳説しない。

第五章 キリストに於ける豫言の完成

以上我等は、イスラエルに於ける豫言を、その原始的にして低級なる姿に於て見出したる後、それが神の指導に由つて、目ざましき迄の進展を遂げたる經路を跡づけて來た。

永き國民史の間に培はれてゐた豫言の生命は、アツシリヤに由つて開かれたる世界歴史の春に遇つて、アモス、ホセア以下、萬花咲き競ふ燎亂の姿を現はした。それはやがてエレミヤ、エゼキエル等に由つて成熟し、俘囚の秋を通じて漸く結實の期に近づいて行つた。實れる果の中に、咲き誇る花を見出すことが困難であるやうに、ユダ

第十四章に至つて、默示文書としての眞面目は愈々發揮されることとなる。エルサレムが他國人の爲めに攻撃され、その住民の半は捕虜として他へ移される。しかしヤーエは自ら進軍し給ひ、エルサレム東方なる橄欖山に陣を構へ給ふ。そして橄欖山は二つに裂かれ。その一は北へその一は南へと動き、その中に谷々を造り出す。晝夜といふが如き區別は全く失せて、不思議なる光が打ち續く。そしてエルサレムより二つの河流れ出で、一つは死海に、他は地中海に入るのである。從來小山に圍まれてゐたエルサレムが平地の中に立つ、そして四方に擴展し行くのである。

從來エルサレムを苦しめた敵國民は恐ろしい惡疫のために潰滅するのみならず、各自の中に内亂の起ることあり、遂に收拾すべからざるに至る。かくしてエルサレムは永遠に安固なる地とされ、聖き中心となりて、諸國の民がその祭のために上り來る處となるであらう。そして若しその順禮を怠るものがあれば、それは雨降らざることの災を以て罰せられる。エヂプトの如く雨を知らざる國がこのことを怠れば、それはナイル河に水無きことを以て罰せられる。ヤーエの神殿は内外ともに聖きものとなり『馬

つた。

この牧者とは乃ちエヂプトなるプトレーミー家を諷したものであり、プトレーミー家の諸王がユダヤ人の中に税吏を立て、税金取り立ての請負を爲さしめ、これ等の税吏どもは民の中より多大の搾取を爲しつゝ、王達には僅かのことを献するに過ぎなかつたことをいつたものゝやうである。

十二章一節——十三章六節に於ては、默示文學の多くに見らるゝやうな、終りの日の叙寫があり、他の國々がエルサレムを攻め圍むのであるが、しかもエルサレムは遂に最後の勝利者となるといつた記事がある。そして十二章十節以下に於て、ある殉教者に對して、民が悔悟の結果として悲み嘆くであらうとの記事がある。しかし、それが何人であり、その殉教の理由が何にあつたのかは明瞭でない。

次で豫言者一般に對する攻撃が記されてゐる。豫言者なるものゝ眞性がやがて民の人々に由つて見破られ、そして人々は豫言者なりとして己を知らるゝことを嫌惡するに至るであらうとの記事がある。

れる者が象徴するところに由つても明らかなやうに、その性格に於ても、その使命に於ても『平和』が中心的位置をなすものである。

『シオンの女ヤサメよ大に喜べエルサレムの女よ呼ばれ、視よ汝の王汝に來る。彼は正義して極救すくひを賜り、柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり……彼國々の民に平和をさずさん、其政治は海より海に及び、河より地の極におよぶべし』(九章——十節)。

嘗て、アツシリヤのために全く散遣せしめられてゐた、イスラエル(エフライム)の人々も又國運恢復の幸福に遇ひ、ユダと、もにヤーエの用ひ給ふところとなり、

『我汝の人々を振起してギリシヤの人々を攻しめ、汝をして大丈夫まさちをの劍の如くならしむべし。』

(九章十三節)

そして他の國々も皆滅ぼされ、ヤーエの民なるユダのみが、その故國に於て安穩なるを得る。(十章)

十一章に至つて一人の牧羊者のことが記されてある。彼は己れに托せられたる羊を忠實に守ることを爲さず。しかも彼の怠惰によりて利益を得たる人々に、その利益の配分を乞ふたが、彼に與へられたものは僅に銀三十即ち奴隸に對する價格に過ぎなか

れるのである。

そして從來ユダを苦しめ來つた諸國が審判の庭に呼び出され、こゝにユダが榮光を表せられることゝなるのである。

(ロ) ゼカリヤ書の添加

ゼカリヤ書九章——十一章、及び十二章——十四章に含まれてゐる二つの豫言も又、その性質よりして、默示文學として取扱はるべきものに屬する。その書かれた年代は之を充分明らかにすることを得ないのであるが、アレキサンダー東征後に於ける世態を背景としたものであると見るのが凡そ眞に近いやうである。

地中海沿岸にある諸國が凡て滅亡するであらうとの豫言があり、しかもその中に於てエルサレムを有するユダだけが安全である。何故ならば

『我わが家のために陣を張りて敵軍に當り、之をして往來すること無らしめん』
とヤーエ自ら宣言し給ふからである。(九章——八章)

神の遣はし給ふ王なるメシヤが君臨する。彼は勝利者ではあるが、しかし、その乗

たのであり、この災害を免かるゝためには、如何なることも敢てしようと覺悟を定めてゐた。されば、彼等の斷食も、心からなる熱心を以て行はれた譯であつた。やがて時來つて蝗害は取り去られることゝなり、自然は新しい力を以て復興の勢を示して來た。こゝに神に對するヨエルの感謝と、讚美とが發せられる。(二章十八——二十七節) 次でヨエル書に於ける最も默示的な言葉が發せられる。畏ろしいヤーエの日が來るその時前古未曾有の變化が起るといふのである。

(一) 先づ人々の心に全く新しい經驗が與へられる。

『その後われ吾靈^{わがたま}を一切^{すべて}の人に注がん、汝らの男子、女子は豫言せん、汝らの老たる人は夢を見、汝らの少き人は異象を見ん』(二章二八)

(二) それとゝもに、宇宙の萬物にも、驚くべき變化が起る。

また天と地に徴證を顯はさん。即ち血あり、火あり、煙の柱あるべし。ヤーエの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん (二章二九——三一節)

そしてこの恐ろしい變化の中にあつて『ヤーエの名をよび求むるもの』のみが救は

穀物は荒れはて新しき酒つき、油たえんとすればなり。

こむぎ大むぎの故をもて農夫羞はぢよ

葡萄ぶどうづくり哭なげよ

田の禾稼かろうせはてたればなり

祭司よ、汝ら麻布を腰にまとひてなきかなしめ

祭壇に事ふる者よ、汝ら泣き叫べ

神に事ふる者よ、汝等來り麻布をまとひて夜をすごせ

そは素祭も灌祭も汝らの神の家に入ることあらざればなり

汝ら斷食を定め、集會を設け

長老達を集め

國の居民を悉く汝らの神ヤーエの家に集め

ヤーエに向ひて呼ばれよ（一章二——十四節）。

かうしたヨエルの警告によつて、民は祭司の指導の下に集會を開き、こゝに全國的なる斷食を布告した。餘りにも甚だしい災害のために、民は殆んど失望の極に達してゐる

すべてこの地に住む者、汝ら耳を傾けよ。

汝らの世、あるひは汝らの先祖の世にも是の如きことありしや

汝ら之を子に語り

また之をその子に語り

その子之を後の世に語り傳へよ

嗟くらふ蝗虫あははむしの遺せる者は、群ゐる蝗虫の喰ふところとなり

その遺せる者はなめつくす蝗虫の喰ふ所となり

その遺せる者は喫くほろぼす蝗虫の喰ふ所となれり

.....

汝ら哀哭なげきかなしめ、貞女その若かりしときの夫のゆえに

麻布を腰にまとひて哀哭かなしむごとくせよ

素祭灌祭ともにヤーエの家に絶え、ヤーエに事ふる祭司等哀傷かなしみをなす

田は荒れ地は哀傷む

章であらう。その年代よりいへば、兩者ともにダニエル書以前に屬すべきものであるが、默示文學の性質を説明する上からいつて、先づダニエル書を提示するを便としたので、これ等の二書を附録的に取り扱ふ次第である。

ヨエル書が書かれたのは、ギリシヤ帝國亡滅後間も無い頃であつたやうである。支配者の轉換が自然に齊らし來る不安に加へて、當時恐ろしい蝗群の襲來があつたものゝやうである。蝗の大群が天をも蔽ふばかりの黒雲となつて襲ひ來り、その爲めに農作物は全く荒廢に歸し、恰も侵略の敵軍が通過したる跡の如き觀を呈することは、今猶この地方に見らるゝ現象である故に、ヨエル書に描かれてゐる蝗軍襲來の狀況は決して誇張的なものでもなく、或は又單なる想像の結果といふべきものでも無い。それは實際にあつた自然現象であつたと思はれる。

しかし、ヨエルに取つて、それはヤーエの與へ給ふ一つの警告であつた。斷食と祈禱とを以て、その罪の懺悔をせよとの命令であつた。

老たる人よ汝ら是を聽け

一節）といふのであつた。それは乃ち前一六四年六月六日に當る譯であるが、しかし更に四十五日の後に眞實に幸福の日が來るといふのである。前一六四年はアンテオカス戦死の年である。かうした確乎とした日附の豫言は（よし事實としては實現しなかつたとしても）艱苦の底にある人々に多大の勇氣を與へ、遂にマカビウス家に由るユダヤの獨立を達成したのであつた。かうした目的を達したことのみに於ても、この書は既に多大の貢獻を爲したるものといはなくてはならない。しかも前章に於て論じたやうに、默示文學の一つとして本書が世界の思想史に貢獻することは更に重大なるものがあるのである。

第四章　ヨエル書その他の默示文學

（イ）　ヨエル書の使命

ダニエル書以外、豫言諸書の中にも默示文學に屬すると見るべきものが、いくつが含まれてゐる。その中に就て、最も重要なものはヨエル書とゼカリヤ書九——十四

べきことをいふ。そして遂に最後の日、審判の時が来る。死者も甦り、義者と悪人の運命が定まる。

『その時汝の民は救はれん、即ち書に記されたる者は皆救はれん、また地の下に睡りをる者の中多くの者目を醒さん、その中永生を得る者あり、恥辱を蒙りて限なく羞る者あるべし、さとぎの顯悟者は空の光輝のごとくに輝かん、また多くの人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん』(十二章一——三節)

かうした永生の希望は、迫害の渦中にあるものに取つて、唯一無二なる力であつたのに相違ない。そして、さうした運命が、神の智慧に由つて既に定められてゐるのであり、そのことが既に往昔の人ダニエルに秘したる封として與へられてゐたといふ本書の主張は、多大の慰藉を與へずしては措かぬものであつた。しかも、ユダヤ人の心に直ちに來る疑問は、然らばその最後の日は果して何時來るのであらうかといふのであつた。それに對してそれは

『常供の者を除き殘暴可惡者を立てん時よりして一千二百九十日あらん』(十二章十

して仆れん』(十一章三十一——三十三節)

そしてユダ・マカビースの徒が之に反抗したることに關しては、

『その仆るゝ時にあたりて彼らは少く扶助^{たすけ}を獲ん』(三十四節)とある。しかもこの迫害は神が許容し給ふ一定の時期以上には及ぶことを得ざるものであることを力説してゐる(三十五節)。次でアンテオカスが又もエチプトへの侵入を試みたることを記し、そしてその中途に於てペルシヤ地方反亂の輩を得、急にこれが鎮定に向ひ、しかも遂に陣歿する前後のことに關しては

『彼は遂にエチプトの金銀、財寶を手に入れん、リブエ人とエテオビヤ人は彼の後に従はん、彼東と北より報知を得て周章てふためき、許多の人を滅ぼし絶んと大に怒りて出でゆかん……然れど彼つひにその終にいたらん。之を助くる者なかるべし』(十一章四十三——四十五節)

といつてゐる。

そして、默示は更に進んで、アンテオカス歿後に於て前古未曾有の艱難が襲ひ来る

が、それは我等に直接なる興味あるもので無い故にこゝには省略することとする。

しかし、十一章二十一節以下に記されたることは、我等の知るアンテオカスのことであつて、彼は『賤まるゝ者』と呼ばれ『巧言を以て國を得る』のである。そして彼の軍の押し寄するに由つて『契約の君（オニアスのこと）も敗れん』と曰はれてゐる。次でアンテオカス再度のエチプト遠征、そして其處にローマ兵によつて前進を阻まれ、飯還の止むなきに至つたこと、そして彼の怒がエルサレムの上に及ぼされたことなどが次の如くに記されてゐる。

『即ちキツテム（ローマ）の船彼に到るべければ、彼力をおとして還り、聖約（ユダヤ人の宗教）にむかひて忿怒をもらして事をなさん。而して彼歸りゆき聖約を棄つる者と相謀らん。彼より腕起りて聖所すなはち聖城を汚し、常供の物を撤除（そののぞ）かせ、かつ殘暴可惡物を立ん。彼は又契約につきて罪を獲る者等を巧言をもて引誘（そののぞ）して背かせん然れどその神を知る人々は力ありて事をなさん。民の中の穎悟者等、多くの人を教ふるあらん。然しながら彼等は暫時の間刃にかゝり火に焼かれ、擄はれ、掠められなど

拜禁止の布告が出でたりしことを意味するものと思はれる。

(四) 第四の異象はクロス王の第二年に見られたものとされて居り、第十章より第十二章に至るまでに記されてゐる。そしてこゝに記されあることは、可成り詳細に歴史の進展を跡づけてゐることが見出される。ダニエルは三週目に亘る斷食と祈禱との後、榮光輝くものゝ前に出づることゝなり、彼はその崇嚴さに打たれて地にひれ伏してしまふ。それに對して『人の子』が現はれ、仲保の役をして呉れるために、彼は敢てこの畏怖すべきものゝ語る豫言を聞き得たのだとされてゐる。

その豫言に由れば、クロスの後にはペルシヤには更に三人の王が現はれるのであり、この第四の王はギリシヤに對して戰ふのだとされて居り、それは乃ちダリヨス王であることが分る。次でアレキサンダー大王の出現と、その國が四將軍の間に分割されることとがいはれ、そして北の王乃ちシリヤのセルシッドと南の王ブトレミーのことが語られ、兩家の間に於ける婚姻政策などが極めて詳細に語られてゐる。これ等歴史上の詳細なる事蹟は、表象的な語を用ひつゝ如何にも興味ありげに語られてゐるのである。

次で六十二週の長き時期が來り、この間に於て神殿は再建されてゐるのではあるが、しかも民は苦難困厄より脱することができないのだとされてゐる。この時期が餘りに長いのは前述したやうな理由からだと思はれるのであり、この時期の終りに於て『メシヤ絶たれん』(九章二十六節)とあるこのメシヤは、前一七一年かのメネラウス一派の爲めに殺された大祭司オニアスのことをいつたのだと思はれる。

遂に最後の一週が來る。そして『一人の君の民來たりて、邑まちと聖所とを毀たん……彼一週の間衆多おほくの者と固く契約を結ばん。而して彼その週の半に犠牲と供物を廢せんまた『殘暴可惡者』羽翼つばさの上に立たん、斯てつひにその定まれる災害、殘暴あらさるゝ者の上に斟さかぎくだらん』(九章二十六——二十七節)といはれてゐる。これは確かにアンテオカスのことを言つたのであり、彼がギリシヤ化派の人々を應援したことは『固き契約』に由るものであり『殘暴可惡者』とはかのヤーエの壇上に築き上げられたるゼウス神の祭壇に外ならぬ。前一七一年より、かの宮潔めの時乃ち前一六五年までは恰度一週乃ち七年であり、『週の半に犠牲と供物を廢せん』とあるは、前一六八年ヤーエ禮

エレミヤの言に由れば、ユダがその罪の結果として與へらるゝ苦難の期間は七十年なりとされてゐるのであるが、俘囚始まつて以來七十年を経ても、未だ外國人よりの束縛を脱することができない。そこでこの異象に於ては、この苦難の時期が七十週なりとされてゐるのである。この數へ方は一日を一年とするものであることは推測するに難からず、又凡てある種の數をいふに七の倍數を以てするは、ユダヤ人の間に一般に行はれる風であつたのである。しかしさうすれば七十週の終りといふは前九七年となるのであつて少し長過ぎるのであるが、さうした誤算は歴史上の記録が充分でなかつた古代であつたことゝ、本書著作の主要目的とを考察に入れるとき、許容し得らるべき缺點であるとせねばならない。

さて、この七十週は三つの時期に分たれる。第一の時期は七週乃ち四十九年であつて、前五八七年より、前五三八年に於けるクロスの出現までに至る。クロスは乃ちメシヤたる君である。彼が受膏者（乃ちメシヤ）と呼ばれたことは、既に第二イザヤに於て見らるゝ思想である。

これは前一六八年、アンテオカスがヤーエに捧げらるゝ犠牲を禁じたことを言つたものである。そしてダニエルはある聲を聞く、それはかうした忌むべきことは果して何時まで繼續さるべきであらうかといふのである。そしてそれに對する答は『二千三百の朝夕をかきぬるまで斯であらん、而して聖所は潔めらるべし』(八章十四節)といふのであつた。これは乃ち三年二ヶ月であつて略史實の期間と一致する。そしてこの小さき角に當る王は『機巧をもて詭譎をその手に行なひ遂げ、心みづから高ぶり、平和の時に衆多の人を打滅ぼし、また君の君たる者に敵せん、然ど終には、人手によらずして滅ぼされん』(八章二十五節)といふのであるが、眞にその如くアンテオカスは前一六四年ペルシャ出陣中、不思議な熱病の爲めに斃れたのであつた。

(二) 第三の異象はダリヨス王の治世に於けるものであつて、その前にダニエルの祈禱がある。苦難の中にあるユダヤ人に特別なるヤーエの恩寵を祈求する祈禱であつて聖書に記されたる最も偉大なる祈禱の一つである。次で来る異象は『ガブリエル』に由つて與へられるのであるが、その全部が苦難の時期に關するものである。豫言者

この三ヶ年半とは乃ちアンテオカスのヤーエ禮拜禁令が出でた前一六八年の夏から遂に宮潔めが行はれた前一六五年十二月迄の間を言つたものと思はれる。

(二) 第二の異象はベルシヤザルの第三年に見たといふのであるが、此處にも又獸が現はれて来る。始めのものは牡羊であつて、その頭に二つの角ありその一つは他のものよりも高くなつた。これは乃ちメデヤとペルシヤを代表するものである。次で一匹の牡山羊が表はれる。彼の頭には著しい角があるのである。彼はかの牡羊を破り又その他のものをも征服するといふのである。いふまでも無くこれはアレキサンダー大王を意味してゐる。そしてこの角折れて四つの著しき角が出でたといふのであるが、それはアレキサンダーの死後、國が四將軍の間に分たれたことをいつてゐるのに外ならない。

次でこの一つの角より一つの小さい角出できたり、南に向ひ東にむかひ美地つるはしなに向ひて甚だ大きくなり天軍におよぶまで高くなり、また自ら高ぶりてその軍の主しゅに敵し、その常供の物を取除き、かつその聖所を毀てり(八章九——十一節)といふのであるが、

より上り来る四つの獸のそれである。この始めの三つに就ては何等の説明をも與へられてゐないが、しかしそれがバビロンとその王ネブカドレザル、メデヤとその王ダリヨス、ペルシャとその王クロスを意味したりしものであることは推想するに難く無い。

第四の獸は『他の獸と異なりて至畏ろしくその齒は鐵、その爪は銅にして食ひかつ咬碎きてその殘餘を足にて踏つけたり』(七章十九節)といふのである。これはギリシヤを代表せるアレキサンダー大王を意味したものであることは疑ふべくも無い。その頭に十の角あり、その他にまた一つの角出で來りし爲め三つの角抜け落ちたといふのである。そしてこの一つの角には『目ありまた大なる事をいふ口あり』といふのであつてこれはアンテオカス・エビファネースに外ならない。他の十角といふはアレキサンダー以後アンテオカス迄に出でたギリシヤの諸王である。こゝにこの一人のもの乃ちアンテオカスは『至高者に敵して言を出し、かつ至高者の聖徒を惱まさん』そして『時と法とを變んことを望まん』といふのであるが、聖徒が彼の手に付されてあるは『一時と二時と半時』(七章二十五章)といふのであつて、それは三ヶ年半に該當する

に由つて何の害をも受け居らなかつた。こゝに王はダニエルを譏奏したる者共を、その家族とともに獅子の檻に投じて之を殺すとともに、全國に命じて、ダニエルの神を禮拜せしめた。これはダニエルが『おのれの神を頼みたること』(六章二十三節)と、その神が『活神いづるにして永遠に立つ者またその國は亡びず、その權は終極おはりまで續く』のであり、又『救を施たすけこし拯たすけをなし、天においても、地においても休徵しるしを施たすけこし、奇蹟を行ふ者』(六章二十六、二十七節)であるに由るといふのである。

かうした記事に獎勵された敬虔派の人々が、飽までも信仰の戦を押し進めて行つたことは自然の勢であつた。

(ロ) ダニエル書に於ける異象

ダニエル書の後部を爲す異象まぼろしはその數四つである。その述ぶるところの事柄は大抵同じいものであつて、俘囚以後の歴史を根據としたものである。たゞ最後の異象に於てはその叙説が他のものに比して遙かに詳しい點が異なつてゐる。

(一) 第一のものは、ダニエルがバルシヤザル王の第一年に見たる異象であつて、海

(六) 次に今度はダリヨス王のことが物語られる。本書に由れば彼はメデヤ人だといふのであるけれども(五章三十一節)、バビロンに次で世界に覇を唱へたものはペルシヤであつたのであれば、このダリヨスはペルシア王ダリヨスのことであつたと思はれる。ダリヨス王の下にあつてもダニエルは矢張り寵遇を受けることとなつたので、著しく他の人々の嫉妬を買ふこととなつた。しかし彼の敵達はダニエルに何の缺點をも見出し得ないので、窮餘の一策として、王に上申し、今後三十日の間は、何人も王以外のものに祈願を捧げること無からしむべき勅令を出さしめ、叛くものは獅子の檻に入れらるることとした。

しかしダニエルは王命ありともその信仰を棄てず、毎日三回づゝ、エルサレムに對する東の窓を開いてヤーエを禮拜した。彼の敵は得たり賢しとこのことを王に告げダニエルの所刑を迫つた。王は如何にかしてダニエルの命を助けやうとしたが、既に布告された勅令を破る譯に行かない。詮方なくダニエルは獅子の檻に投げ入れられる。王は不安の中に夜明を待ちて檻に至り、ダニエルを呼べば、ダニエルは神の使の守護

レザルの子とされてゐるけれども、それは史實と合はないのであつて、バビロン最後の王ナボニダスの子がベルシヤザルであり、彼はベルシヤ軍と戦つて死んだのであつた。王（本書では彼は王となつてゐる）は盛んなる宴會を開き、ネブカドレザルの世にエルサレムの神殿より奪ひ來つた大盃その他のもの、即ち神聖なる器具を酒宴の用具とし之を冒瀆する。すると宴酣なるに及んで不思議なる手が宮殿の壁に現はれ、奇怪なる文字を書いて行く、王は大いに惱んだが、大后の忠告に基づきダニエルを召してその解釋を請ふた。ダニエルの答はかうである。曰く、文字は三個のアラメイク語であつてメネ、メネ、テケル、ウバルシンといふのであり、その意味は、メネ（數へたり）乃ち王の治世は數へ終られ今その末が來たのであり、テケル（秤られたり）乃ち神は王を量り、その足らざるを見出し給ふたといふことで、ウバルシン（分たれたり）乃ち王の國は分たれてメデヤとベルシヤとのものとなるべし、といふのである。

アンテオカスの暴行の一つは、神殿に在る聖器を穢すことであつた。彼の宮中に呻吟しつゝあつた民に取つて、ベルシヤザルの物語は多大の慰めを與へずには置かない。

そして『假令たとへしからずとも』といった三人の勇氣は、苦しめる人々に取つて、信仰のよき模範と獎勵を與ふるものであつたことは、之を信するに難くない。

(四) ここにネブカドレザルは又も夢見ることがあつた。しかし、バビロン王の臣下達は矢張り之を解明することができない。ダニエルが又も召される。そして釋いて曰く王はその榮光の絶頂に達したる時、天の神に由つて撃たれ、七年の間、獸とともに野に居る狂人となるであらうと。然るにそのことは事實となつたが、やがてその時期終つて再び本心に立ち還つた後、王は心から天の王なるヤーエを崇拜するものとなつたといふのである。

既に記したやうに、アンテオカスは狂人だと言はれてゐた。その狂人の下に在つて迫害を受けつとあつたユダヤの人々に取つて、この物語は一縷の光明を與へるものであつたのに相違ない。アンテオカスも又その狂氣より己れに歸り、遂にヤーエの禮拜者となるやも計られないからである。

(五) 次でベルシヤザルの世に於ける事蹟が物語られる(ベルシヤザルはネブカド

『もし善からんには王よ、我らの事ふる我らの神、我らを救ふの能あり、彼その火の燃る爐の中と汝の手の中より我らを救ひ出さん、假令然らざるも、王よ知り給へ、我らは汝の神々に事へず、また汝の立たる金像を拜せじ』

と答へて平然たるものがあつた。

そこで彼等は着衣の儘に縛り上げられ、通常に比して七倍に熱せられたる爐の中へ投げ込まれた。然るに、彼等を投げ込んだ王の侍臣達が、その熱度の爲めに死ぬ程の熱さであるにも拘らず、三人のものは少しも害はれずして火中を歩いてゐる。しかもその後から『神の子』の如きものが従つて行く様子である。驚愕措くところを知らない王は、卽座に三人のものを爐より取り出すことを命じたが、三人には火の香ひさへも附いてゐない有様であつた。ここに於て王は彼等の神を崇めるとともに、彼等の位をも進めたといふのである。

ユダヤ人の神が、火爐の中にある三人の熱信者を救ひ給ふたとの物語りは、アンテオカスの筈下にあるユダヤ人にとつて、如何ばかり嬉しい回想であつたであらうか。

捧ぐるとともに、ダニエルを擧げて全バビロン帝國の王となし、彼の友人三人をその補佐としたといふのである。

いふまでもなく金はバビロン、銀はペルシャ、銅はメデヤであり、鐵はアレキサンダー大王のこと、そして脚はセルシッドとブトレミー兩家を意味せしめることが著者の意圖であつたのである。そしてこの最後の時代にユダヤ人を中心とした國が建てられるのであるとし、又ユダヤ人の神は、他の神々よりも勝れてゐ給ふことを示すこの記事は、迫害の中にある人々に希望を與へるものであつたのに相違無い。

(二) ネブカドレザルは一の金像を造り、之をドラの野に立て、全國に命じて、喇叭その他の樂器に由る合圖あるときは、直ちに之を禮拜せしめることとした。然るに、王に訴ふる者の言葉に由れば、かのダニエルの三人の友人は、この王命に従はないでゐるといふのである。そこで王は直ちにこの三人を召喚し、王命に服すべきことを強要した。そして猶もそれを拒むならば、彼等は燃ゆる爐の中に投せらるるであらうと感赫した。それに對して三人は

ニエルを助け給ひし神は、彼等をも助け給はぬ筈はない。かく教へられて、彼等の勇氣百倍せざるを得なかつたのである。

(二)　次でネブカドレザル王は夢を見、その意義が不明である爲めに甚だしく悩み、學者法術士等と呼ば寄せ、その夢が何であつたか、又その意味如何を説き明せと命じた。しかし素よりこれは難題であるために、彼等は答を爲し能はずといつた。そこで彼等の凡てが王よりの罰を蒙ることとなつたのであるが、ダニエル及びその友人達も又その卷添へを食はうとしたので、ダニエルは直接王に謁見し、暫くの猶豫を請ひたる後、神に祈り、遂に王の夢とその意味とを發見し、之を王に復命した。

王の夢といふのは一つの像であつた。その頭は純金、胸と兩腕とは銀、腹と腿とは銅、脛は鐵、脚は一部が鐵、一部が泥より成るものであつたが、一箇の石の爲めに打ち碎かれてしまつたといふのである。そしてそれは、バビロン以後に起り來る國々であり、石とは天の神が自ら建て給ふ國であつて、永遠に續くべきものである、といふのである。これを聞いたネブカドレザル王は大いにダニエルの神を崇め、之に禮拜を

うことを豫言するのである。そして信仰あるものを鼓舞し、苦難の中にあるものに前途の光明を與へることに努めてゐるのである。

(一) 話は、第一俘囚に於てネブカドレザルに囚はれ行いた、信仰あるユダヤの青年ダニエルとその三人の友人達のことには始まる。彼等は特に王の知遇を受け、國中にある美食を饗されやうとしたのであるが、それを食することは彼等の宗教上の規定を破ることとなるので、特に大膽職に交渉し、その許可を得て、只青菜と水のみを用ひること十日に及んだが、彼等の顔色美はしきことは、他の肉食に由れる青年達よりも勝るところがあつたために、その後にもその儘菜食を續けることを許された。そして三年を経て後、他の青年達とともに王の前に連れ出されたのであつたが、彼等は其の體力に於てのみならず、その智慧に於ても『その全國の博士と法術士に愈ること十倍』であつたために、遂に王の待臣として用ひられることとなつたといふのである。

アンテオカスの爲めに強いて穢れたる食物を喰はしめられてゐた人々に取つて、かうした物語が、如何に懐かしく又悦ばしきものであつたかは説明するまでもない。ダ

界人類に多大の裨益を與へたる精神運動の源となつたのである。そして、歴史は神の定め給へる或る目的に向つて動き行きつゝありとの確き道念を把持したりしことに於て、又見ゆるものに因はれず、見えざるものの中に眞實を見出したりし遠觀に於て、これは人類の上に永遠なる寄與を爲すものであり、豫言運動の遺産として、まことに適はしき價值を有するものといはなくてはならない。

第三章　ダニエル書の内容とその使命

(イ)　ダニエル書に於ける英雄物語

ダニエル書は、前に言つたやうに、マカビース出現時代に於けるユダヤの民に勇氣と獎勵を與へるために書かれたものである。されば先づ過去の國民史よりの引例を持ち來つて、確き信仰の維持者達が、如何に神の祐助を得たかを改めて民の心に喚び起さしめ、次で種々なる幻に由つて、過去より未來に亘るまでの世界史、特にユダヤ人を中心としたる世界史を物語り、神が必ずユダヤ人に輝かしい將來を與へ給ふであら

なる人々の名を用ひて、その書物の價值を増進せしめ、又その頒布の範圍を廣からしむることは、ペルシヤ時代の末葉から次第に盛行し來つた風潮であつた。そして、その理由と認むべきは凡そ以下の如きものであつた。當時に於て律法は既にその編纂を完成し、豫言者の時代も大凡過去のものとなり、人々は神の聖旨を知るに當つて、この標準的な聖書に收められたることに頼ることが次第に多くなつた。所謂學者なるものが出で來つて、律法の現代的適用について種々なる指示を與へるやうになつたのもそれが爲めである。されば、こゝに神に就ての新らしい眞理を宣傳しやうとするものがその著作に對する讀者を得んが爲めには、自らの名を出すことをせず、古代聖賢の名に隱るゝといふことが最も策の得たるものであつたのである。之に加ふるにこの時代の人々にあつては、著作權を主要視するといふ考へは全然無く、たゞ書籍が傳へんとすることの眞實性と、その頒布とのみが彼等の關心であつたのである。

かくの如きが默示文學であつた。艱難の裡にあつて猶且つ信仰を維持すべしとの彼等の獎勵は、やがて一方に於てはユダヤ教として、一方に於てはキリスト教として世

て默示文學は豫言に比して遙に廣大な展望を有するといつていゝ。いな、この展望の廣大さは單に地域の上に於てだけのことで無く、時間の上に於てもさうである。默示文學がその基調としてゐる問題は『世界の終り』である。そして死後に於ける人間の運命である。さうしたことが神の特別な活動に由つて、神の聖旨に適ふべきものにまで導かれ行くといふが默示文學の中心思想である。

(三) 従つて、默示文學が好んで用ふる文學的方法是幻のそれであり、表徴的に己が言はんとするところを語るといつた風がある。元來『默示 (Apocalyptic)』といふことの意味は、蔽幕を取り除ける、といふことであつて、通常の方法を以て知るを得ざる靈的秘密、又は未來に關はる機密を知るといふことにあるのであれば、その表出法が一種神秘的のものとなるのは寧ろ自然だとも言ひ得られるのである。

それとともに、默示文學に見らるゝ今一つの文學的方法是、その著者が悉く匿名である、といふことである。ダニエル書の如きも、ダニエルが書いたのではなく、古代の人物たるダニエルを取り來つてその主人公としたまでである。かやうに古代の有名

(二) 豫言者達が世に出でたのは、國民史上の危機に於てであつたことは既に述べた。しかも、さうした危機は打續き、ペルシャ時代よりギリシャ時代に入つて國運挽回の希望は全く失せ、そして前章に於て見たやうに、その信仰さへも絶滅の悲運に會しやうとするに當つては、ヤーエの靈に導かるゝ人々は絶望の極にまで押しやられたといつていゝ。しかも、さうした中であつて、ヤーエが最後の勝利者であることの確信を握つてゐたものが默示文學の著者達である。されば豫言者達の改革意見は、神に對する信仰の恢復とか、人に對する行爲の變改とか、或は戦争、飢饉といったやうな事によつて、神の國の出現、或は神に叛くものへの懲罰が行はれるのだと信じ、又宣傳してゐた。しかし默示文學の人々に取つては、この世の腐敗は餘りにも甚だしく、朽木彫るべからずであつて、最早尋常の手段を以て神の世を臨らしむべき方法は無い。根本的な天地の變改が必要であると見らるゝやうになつたのである。されば豫言者達に於ては、その中心がユダヤ民族であり、たゞそれに關係した諸外國の問題が取り扱はれてゐるだけであるが、默示文學の取り扱ふことは全宇宙的である。その點に於

默示文學は、豫言者達の活動が終熄したる後に於て、その正常なる繼承者として生れ出でたるものであり、一面よりいへば、豫言運動が種子として後代に傳へたものが、新らしき還境と、新らしき養分とを與へられて、こゝに異なりたる姿を以て咲き出でたる珍奇なる花なりともいふことができるのである。然らば、默示文學は、豫言書に比して如何なる特異點を有してゐるのであらうか、左に少しく之を摘録することゝする。

(一) 豫言者達は元來が説教者であり『神の言』の代辯者であつた。彼等の語ることがあり、而して後にそれが書物として編まれたのである。エゼキエルに到つて自ら豫言を著作する風が出で來つたのではあつたが、しかし、それが第一のことであつたのでは無かつた。然るに默示文學に於ては先づ書物として出さるゝことが第一であつたのである。豫言者と等しく神の靈に感じ、豫言者と等しく、その時代に對して時代の問題を論じたのではあつたが、しかし先づそれを説教する前に文を筆に上したことが默示文學の特質であつた。

トラ（律法）ナビーイム（豫言）カサビーム（諸書）がそれである。元來ヘブル語にては舊約などといふ名稱がある譯でなく（舊約といふは新約出でし後始めてそれに對照する語として採用さるるに至つたのであるから）この三語を繋いだものを以てその名稱としてゐた。そして、この中にあつて、ダニエル書は豫言の中に含まれず、寧ろ『諸書』の中に加へられてゐるのである。これを以て見れば舊約の編纂者達は既にダニエル書が豫言諸書とはその性質を異にすることを認めてゐたことが知られるのである。又、舊約はその全部の編述が完成された後三部に分たれたのでなく、その各部各部として編纂されありしものを後に全體として取り纏めたものであつて、各部編纂の時代的順序も又律法、豫言、諸書、となるのである。いな諸書といふは律法にも豫言にも含まれざる凡ゆる種類の書物をここに取り纏めたものだといひ得るのである。さればダニエル書が他の豫言諸書に比して後代の述作に由るものであることも又、この事實から推定することができる。そして、その内容よりすれば、それは今日學者達が『默示文學』と名づくるものに屬してゐるのである。

命せられて、村の人々はゼウス禮拜を行つてゐた。そして一人の祭司が唯々としてその犠牲をゼウスに捧げやうとするのを見たマツタテヤは、憤激の餘りに劍を以て之を刺し、反す刃に王よりの使者達を屠つた。反逆の賽は既に投げられたのである。彼は直ちに己が子五人を率ひて山地に遁れ、此處に同志を糾合した。五人の中に於てもユダ・マツカピースは特に秀でた將帥であつたために、着々としてシリヤ軍を破り、此處に再びユダヤ人が獨立を獲得するの基を拓いたのであるが、前一六五年十二月二十五日には再び神殿を潔め、異教禮拜を除却することとなつた。以後この日は『宮殿の日』としてユダヤ人の間に守らるることとなつたのである。

第二章　默示文學の本性とその價值

我等がダニエル書と呼ぶ舊約書中の一書は、かうした歴史的事實を背景として生れ出でたるものである。そして本書は現行の聖書に於ては豫言諸書の中に含まれてゐるのであるが、ヘブル語に於てはさうでない。ヘブル語の舊約書は三つの群に分たれる

ヤ兵を駐在せしめるとともに、城壁を悉く破壊し盡したのである。次で彼は命令を出して、一切のヤーエ禮拜、割禮、ユダヤ教聖書の朗讀及び所有、安息日の嚴守などを悉く禁壓した。そして使者を全國に送り、全ユダヤをして、ヤーエ禮拜を棄て、この新らしきギリシヤ宗教に歸依せしむべき策を講じた。彼はかの新らしく神殿に建てられたる祭壇に於て豚を犠牲とすることを爲さしめ、ユダヤ人の祭司をして強ひてその肉を食はしめた。ユダヤ教の律法に由れば、かかることを爲したる祭司は、ヤーエの前に全く穢れたるものとなるのであり、ヤーエに仕ふるを得ざるものとなるのである。

ヤーエに對する熱信と忠誠とを有するものが、かかる状態の下にあつてその生活を續け行くことは最早不可能に近いこととなつた。弱き者共は次第にその信仰を棄てて行く。しかし、ユダヤ人傳統の血を承けて、愛國の至情と、ヤーエの熱信に燃ゆる人々は飽までも之に對抗した。かうした敬虔者の一人に祭司マツタヤがあつた。彼はモデインと名づくる一邑に住んでゐたが、ある日のこと、王より遣された一團の使者に

しかし、アンテオカスが戦死したといふのは誤報に出でたものであつた。そこで彼はエヂプトよりの歸途エルサレムに立ち寄り、已れに對して爲された反逆に對して恐ろしい所罰を加へたのであつた。勝に乘じてゐた敬虔派が再び迫害の鞭を受けることとなつただけで無く、破壊者の手に神殿に對して迄も伸ばさるることとなり、至聖所は穢され神殿及び寶物に鑲められた金は悉く剝がれてアンテオケへ持ち去られた。

その後、前一六八年、アンテオカスは又もエヂプト侵略を企てたのであつたが、其處にはローマ兵の駐在あり、之に抗すること能はず、空しく兵を還すの止むなきに至り、悶々の情抑ゆべからざるものがあつた。そして、彼の憂鬱は、遂にエルサレムに對する再度の迫害として爆發したのである。

そして今度はユダヤ人を徹底的にギリシヤ化し、ヤーエ禮拜よりゼウス禮拜に遷ししむることが彼の目的となるに至つた。かくして彼は前一六八年十二月、エルサレム神殿に於ける尊い祭壇の上へ、ギリシヤ風なる祭壇を作り上げ、以後其處にて行はるる犠牲はゼウス神に捧げらるべきものと定めたのである。そして神殿近き兵營にシリ

しかも不幸にして事態は益々悪化し行くばかりであつた。ヤソンが賄賂に由つて獲た地位は、更に多額の賄賂を提供したメネラウスの爲めに奪はれることとなつた。しかしメネラウスとて素より百萬長者といふ譯でも無いので、賄賂の金を償ふためには、新たに重税を民より徴したのであり（既に記したやうに、祭司長は宗教上に於てのみならず、政治上に於ても民の首領であつた。そして又、さうした重要な地位であるためにヤソンなどの輩が之を窺つたわけである）又神殿の寶物をもその爲めに持ち出すことを敢てした。これに對して敬虔派の人々は強い反抗を試みたが、それに對するメネラウスの答は、追放されたオニアスを死刑に處することであつた。愛國の至情と愛神の念に燃ゆる人々の堪忍袋は、既にその緒を切らんとしてゐるのであつた。

その折しも、前一七二年、アンテオカス・エビファネースはエヂプトと戦ふこととなつて南下したが、彼は陣中に戦死したとの報がエルサレムに達した。メネラウス及びその一派に對して反抗の機を伺つてゐた人々は、この時こそとばかり蜂起し來り、憎むべき輩を一舉に殺戮した。

あつたが人民は直ちにそれを揶揄して『エビマネース（狂人）』と呼ぶやうになつた。彼はその才智に由つて、彼の治下にあるやうな諸民族を統一するには、それを同一文化の下にあらしめねばならないことを見透したので、彼特有の感情的熱誠を以てギリシャ文化の扶植に従事することとなつた。

アンテオカス・エビファネースの政策は、直ちにエルサレムに於ける兩派に影響を與へた。ギリシャ化賛成派はここに百萬の援兵を得たるが如き有様となつたのである。當時エルサレムに於ける神殿の大祭司はオニアスであり、彼は敬虔派の首領であつた。一方彼の弟にヤソンなるものがあり、ギリシャ化派の重鎮であつた。然るにヤソンはエビファネースに賄賂を贈ることに由つて自ら大祭司となり、オニアスを追放した。そして、それとともにエルサレムをギリシャ化すべき許可を王より受けた。ここにギリシャ派萬歳の日が來つたのである。敬虔派の不平滿々は記すまでもない。いな彼等の不平よりも更に重大なのは、このギリシャ文化が究極の勝利を占むる日には、エドヤ教は全く地を拂つてしまふであらうことであつた。

かやうに兩者の間には著しい反對があり、それに基因する暗闘が行はれてゐたのは事實であるが、しかし元來が思想上の問題であつたのであれば、やがては何れかの方に勝利が歸するとしても、それは全然平和的な手段を以て行はれたものであつたらうと思はれる。然るに不幸にして、この思想問題を遂に流血の慘事にまで導き行くべき事情が発生した。

それは前一七五年、セルーシツド家の王位に、アンテオカス・エビファネースが登つたことである。彼は幼時、ギリシヤのアテネに於て勉強した結果、熱烈なるギリシヤ文化の使徒となつてゐた。そして元來が直情的な人物であり、一夜の中に思ひ付いたことは、翌朝如何なる困難を打破してもこれを達成せすば止まないといつた風な男であつた。それとともに實際的な手腕にも可成りに秀でて居り、優れた將軍であり、又巧みな外交家でもあつた。しかし彼の特徵といふべきは、極めて強い自惚れの心であつて、その結果、彼は自らを神々と同位に考へるやうになつた。そこで彼は己が治世の下に新鑄された貨幣に『テオス、エビファネース（現はれ給へる神）』と彫らせたので

ならしめ、その地位が特にギリシャ官憲との交渉を多からしむる上流階級よりして、ギリシャ文化のユダヤ浸略は開始さるることとなつた。それとともに新奇を好む青年階級は滔々としてこのギリシャ化の風に順應して行つたのであつた。

ヘブル名を變じてギリシャ風の名を附するものあり、ギリシャ風なる帽子と外套は盛んなる流行を來し、祭司達さへも、時に神殿の職分を怠り勝ちに、競技場へ來るに至つた。競技場に於ては裸體となることが多い爲めに、ユダヤの青年達が、自ら割禮を有することを恥づるといつた風さへも醸されて來た。ギリシャ風なる巧智が貴ばれ、古風な賢實性が次第に失はれ行くのを如何ともし難いといつた風であつた。

さればその反動として、國粹保存論者が漸く擡頭し來るのも又免れ得ないことであつた。この一派の人々は敬虔派として知られるやうになり、彼等はギリシャ化に忙しい人々を世俗派なりとして排斥し、ユダヤ人の宗教的健實性を維持保存するために奮闘した。

(ハ) アンテオカス・エピファネースの迫害とユダヤの獨立

通じて、ギリシヤ人に特有なる自然主義的人生觀の涵養にいそしんでゐた。彼等に取つて人生の最大目的は、神の榮光を現はすといふことよりも、寧ろ人生を極度に享樂するといふことにあつた。かうした思想が、宗教を人生に於ける最大事なりと確信しつゝあつたユダヤ人の中に浸潤し來つたのである。

(二) ギリシヤ文化を象徵するものは、その造形美術であつた。その生命はその建築と彫刻とに盛られてゐた。ギリシヤ都市に於ては、その政治機關も、教育機關も、社交機關も、否都市生活そのものが、美しい建築を必要としたのであり、それ等は皆優れたる彫刻を以て裝飾さるることを必要とした。しかもさうした文化が、極度に偶像を排斥することを教へられてゐるユダヤ人の上に襲ひ來つたのである。

しかし、ギリシヤ文化は、西方の優れたる文化である。如何にもハイカラなる生活様式である。そして既にいつたやうに、これは支配者が極度の熱心を以てその宣布に努めてゐる文化である。美しい言語と、典雅な文學と、優れたる哲學と、楽しい生活様式を仲保として移植され來る文化である。されば、その富力が新らしい生活を可能

ギリシヤ的な諸制度が布かれ、ギリシヤ風な風俗が移入され、ギリシヤ商人の活躍が行はれた。エヂプトを始めとして各處にアレキサンドリヤと名づくる新しい都市が興され又類似の都市が新設さるるとともに、支配者の意を迎ふるに急なる從屬の諸民族は相率ひてその都市のギリシヤ化に努めた。そしてこれ等の諸都市を中心としてアジアのギリシヤ化は着々として進行したのである。

(ロ) ギリシヤ化運動とユダヤ教との抗爭

ユダヤ人も、素よりこの渦中にあつたのであれば、その影響に左右されずしては居られ無かつた。ここに彼等は重大なる岐路に立つに至つたのである。

(一) ギリシヤ人がその幼時から植えつけられてゐる思想は、人生は樂しきものであり、人は充分その樂を享受すべきであるといふことである。人生を樂しむに先づ必要なのは健康である。さればギリシヤ都市には必ず運動場の設備があり、それが市民生活の重要な分子であつた。青年は舉つて運動場に集り、そこに身體の鍛鍊を行ひ、競技の鍊磨に勉めたのである。従つてそこは一種のクラブとなりその社交機關を

しかし、紀元前一九八年、アンテオカス大王がエヂプトを破つた後に於ては、パレスチナは全くアンテオカスの家に屬し、新たに造られたシリヤの首都アンテオケに在るその王廷の支配を受けることになつた。この王朝に屬する家をセルーシツド家といふ。かくて、從來東方にその支配者を持つて居たユダヤ人が、西方の人たるギリシヤ人をその治者として戴く時代が始まつたのであつた。

アツシリヤ、バビロン、ペルシヤ、ギリシヤとその主人を變へる毎に、その主人達が有する特殊な政策がユダヤ人の上に及ぼされた。既に述べたやうに、アツシリヤのそれは撲滅的であり、バビロンのそれは包擁的であり、ペルシヤのそれは自由的であつたが、ギリシヤの政策はこれ等のものと全くその性質を異にしてゐた。

アレキサンダーにしても、その後繼者達にしても、その征戰の最後目的は單に領地の擴張といつたやうなことに留まるので無かつた。彼等は自らギリシヤ文化の使徒を以て任じてゐたのであつて、世界をギリシヤ化することをその使命なりと信じてゐた。さればギリシヤ軍の足跡が印せられるところ、必ずそこにギリシヤ都市が建設され、

られるのは寧ろ當然のことでもあつた。しかし、ペルシャを破らんが爲めには、先づその準備行動として、小アジア及びシリヤ等を攻略するの必要がある。乃ち紀元前三三四年小アジアを手中に収めた彼は、三三三年イサスの戦に於て、ペルシャ王ダリウスを潰走せしめ、翌年地中海岸に沿つて南下し、更に軍を北に還したのであつて、三三一年にはエジプト、シリヤ、メソポタミヤ、アッシリヤ等を、悉くダリウスの手より奪取し、バビロンもスサも悉く己が勢威に服せしめた。勢に乗じた彼は遂にインドにまでもその軍を進めたのであつたが、三三三年バビロンに妖歿した。

彼の歿後、國內は部下の將軍達の間に於ける爭奪戰の渦中に投せられ、多年の混亂を経たが、結局、エジプトはプトレミーに、メソポタミヤはアンテオカスに屬することとなつた。しかも、この兩者の間に狹まれてゐたバレスチナは、過去の歴史に於て幾度びか繰り返へされた苦難の歴史を又も經驗しなくてはならなかつた。ただユダヤは、地中海岸に於ける交通路に位せず、山間にあるエルサレムを中心とした生活を送つてゐたのであるために、その禍害の度が幾分か尠ないといつた有様であつた。

第五篇　ギリシヤ時代に於ける豫言の進展

ギリシヤ時代に於けるユダヤの運命——默示文學の本性とその價值——ダニエル書の内容とその使命——ヨエル書及び他の默示文學

第一章　ギリシヤ時代に於けるユダヤの運命

(イ)　アレキサンダー大王の東方進出

アレキサンダー大王のアジャ進出は、世界史の上に於ける重大な事件であるとともに、ユダヤ人の運命の上にも、又その思想の上にも、極めて顯著な轉換期を與ふるべき機縁であつた。

大王東征の第一目的は、いふまでもなくペルシヤ勢力の打破にあつた。過去一世紀に亘る間、ペルシヤ軍の襲來と、その間牒の活躍とは、ギリシヤ人の平和に取つての一大脅威であつたのであれば、今大王の機才とその膽力とが、この禍源の一掃に向け

が、その後この思想は繼續的な發達を遂げ、特に詩篇に現はれたる宗教思想として新約の上に著しい影響を與へることとなつた。

が、しかし、それに失敗した。そこで大魚の腹中（乃ち俘囚）の苦い経験を嘗めなくてはならなかつた。

しかし、再び故國に連れ歸られて、またも世界の救の爲めに働くべき機會を與へられたのにも拘らず、彼等はこれを拒まうとしてゐる。しかし、異教の舟人もヤーエを拜んだやうに、そして、ニネベの民をヤーエが愛し給ふたやうに、ヤーエの支配は全世界のものでも無くてはならないのである。

ヨナ書の使命が此の點に存することを理解する時、我等はヨナ書の有する眞價値を明らかにし得るのである。これは單なる大魚の話ではなくして、人種の別を超越したる、人類兄弟主義の一大宣言書であることが分明するのである。

かくして『律法主義』と世界主義とは、豫言の花が散り失せた後にも、それが結びたる種子として、兩々相俟つてユダヤ人の宗教思想を形づくつて行つた。

舊約に於ける豫言運動が、その遺子として世に與へたものの今一つは、宗教に於ける個人主義である。これは既に説き來つたやうに、エレミヤを以て始まつたものである。

で、神に懺悔の祈りをする。そして魚は遂に彼を地上に吐き出す。

(三) ヨナは改めてニネベに警告を與へたが、外國人たるニネベの民は、直ちにヤーエの命令に従つたので、ヨナは不平であつた。そして不滿の心を以て端座してゐるヨナの上に、瓢の蔓が急に茂つて彼に日蔭を與へたが、間もなくそれは虫に喰はれて失せ去つた。ヨナの悲痛と不平とは愈々増大する。それに對して

『ヤーエ曰たまひけるは、汝は勞を加へず。そだて生育そだてざる、此の一夜に生じて一夜に亡びしひる瓢を惜めり。まして十二萬餘の右左を辨へざる者と許多の家畜とあるこの大なる府まちニネベを我惜しまざらんや。』

といふのを以て本書が終つてゐる。

(ロ) ヨナ書の使命

ヨナ書の著者が、その小説的な形を以て説かうとしてゐる真理は之を窺知するに難くない。

ヨナはユダの民を代表する。ユダは世界の民に正義を説くために撰ばれたのである

故にこの書の中に、所謂奇蹟的分子が多いことも、強て怪しむに足らざることである。話の内容は、人口に膾炙してゐるといつてもいい程であるが、之を摘録すれば次の三段となる。

(一) 豫言者ヨナは、異邦の首都たるニネベの町に、その罪を悔改むべき勸告を爲せよとの命令をヤーエから與へられる。しかし、彼はそれを厭ふて、反對に西方なる海へ出で、タルシシ行の船に乗り込む。然るに海上大いに荒れて、船も沈まん許りなので、乗客各々自ら信ずる神に救ひを求めたが、これは何人か船中にある一人の罪に起因するのであるとて鬪を以て取調べることになつた。するとそれはヨナに當つたので、ヨナは有りし次第を告白する。そこで遂にヨナが海中に投げ入れられることとなつたが、それとともに、さしもの暴風も全く沈靜したので、船中の水夫どもは異教の人々であるにも拘らず、ヤーエを拜し、これに感謝した。

(二) 海中に投げ入れられたヨナは、やがて大魚の腹中に吞み込まれてしまつたがそこに靜かに考へると、如何にも己が取つた道の誤まつてゐたことが明白となつたの

宗教的律法の確立を見た。

この律法は、既にエゼキエルに由つて始められた運動が、此處にその果を結んだものであるが、それはユダの民を『聖』とすることをその中心思想としたものであつて、それが爲めには、極めて猛烈なる排他的國民思想を醸成し、他民族との結婚を禁ずるとともに、高く築かれたる律法の蔭に、自らの神民たる特權を保護するに努めたのである。これを通常『律法主義』(Legalism)と呼ぶ。

この律法主義に由れる排他思想に反對し、ヤーエの宇宙主義と、世界的傳道主義とを高調したものが『ヨナ書』の名を以て知らるる文書である。

ヨナと名づくる豫言者が、ヤラバアム二世の當時に存したことは明らかであるが(列王紀略下十四章二十五節)しかし彼は一の王廷的豫言者であり、本書に示されたやうな思想の持主では無かつた。更にこの書は、他の所謂豫言書とはその類を異にし、それはヨナの語を記したものでなくして、ヨナに關する一の物語であり、その物語に托して一の眞理を教へやうとした傳道的トラクトである。

形を爲して民の宗教思想を涵養して行くべき新らしき種子がこれより生れ出でたのである。

ユダヤ教に於ける律法主義及び默示運動は、豫言の成果として出で來つた種子であつたのである。

第六章 ヨナ書の眞性とその使命

——律法主義とヨナ書の眞性——ヨナ書の使命

(イ) 律法主義とヨナ書の眞性

ハガイ、ゼカリヤ、第三イザヤ等が直面した社會惡と困難とは、紀元前四四五年、當時ペルシヤ王アクタクセルクセスの大膳職にあつたユダヤ人、ネヘミヤが、故國の悲報を聞いて驅けつけることに由つて、漸く恢復の曙光を與へられた。彼は王室の勢力を利用してエルサレムの城壁を修理し、周圍の諸國民が之を攻撃するのを防ぐとともに、城内に於ける諸惡をも改革した。かくして次年にはエズラの出現あり、民の間に

イスラエルの有する使命は世界的なものだとされてゐる。しかし、それは世界に對する奉仕の使命ではなくして、世界統御の使命である。ここに國民的排他主義が猶その根を残しゐるのが認められる。

かうした豫言の衰顔は、極めて悲しむべきことであるのには相違無い。しかし一方より見ればこれは免かれ難い、餘儀無い結果だとも言ひ得るのである。宗教的活力の溢れてゐた時に於ては、そこに熱情があり、動機の力がある。そしてさうした生命力を發展せしむべき手段として國家の建設があり、次で、その國家勢力の進展が求められる。然るにさうした生命力はやがてその勢を失ひ、手段のこのみが後に残る。そして組織體は、他の形態を有する組織體へと轉移して行く。その結果、最後に於てはさうした形態のみが固執されることとなつてしまつたのである。

かくして、永きに亘つてイスラエルの宗教的生命となり、時に絢爛の花を咲かした豫言運動もここに凋落の一路を辿り盡して、遂に硬化の末路に達したのである。しかしその硬化はやがて種子の有する硬化であつた。神自らの攝理と指導との下に新らしき

それに由つて、又、それに由つてのみ、眞の正義は世界に布かれるのである。

東洋各國の民は、官僚的な專政的な統治の下に呻吟しつのであるが、このエダ恢復に由れる新らしい國に於ては『繁榮』が官吏であり、『正義』がその税吏である。壓へられたる民が、ここに始めて光明を見るのである。

『起よ、光りを發^{はな}て、なんぢの光きたり、ヤーエの榮光、汝の上に照り出でたればなり、視よ暗きは地を蔽ひ、闇はもろくの民を蔽はん、されど汝の上にはヤーエ照出でたまひて、その榮光なんぢの上に顯るべし、もろもろの國はなんぢの光にゆき、もろくの王は照り出づる汝の光輝にゆかん……海の富はうつりて汝につき、もろの國の貨財はなんぢに來るべければなり……なんぢの民は悉く義しき者となりて永久に地を嗣がん』(六十章十)

第三イザヤは、その精神に於て崇高であり、その辭句に於て典麗である。しかし、我等は既に彼に於て豫言がその降り坂に向ひつつあることを見逃し得ない。

古來より傳はつた、『正義』に對するアピールはここにもある。しかもその正義はハガイ等に於ける祭祀的なものとの混淆を免れないである。従つて靈的といふよりは寧ろ祭祀的な傾向を有する。

エルサレムの民を圍む四周の敵は全く打破られる。しかも、この勝利を招來する立役者はヤーエ自身なのである。そして、ヤーエはその使者を通して、ユダに眞實なる救を與へ給ふ。

「主ヤーエの靈みたまわれに臨めり、こはヤーエ我に膏をそそぎて、貧しきものに福音をのべ傳ふることを委ね、我を遣はして、心の傷める者をいやし、俘囚とらはれびとに赦しをつけ、縛められたるものに解放ときはなちをつけ、ヤーエの恩恵の年と、我等の神の刑罰の日とを告しめ、又すべて悲むものをなぐさめ、灰にかへて冠を賜ひ、シオンの中の悲しむ者に與へ、悲哀にかへて歡喜のあぶらと與へ、憂ひの心にかへて、讚美の衣を與へしめ給ふなり、彼等は義の樹、ヤーエの植ゑ給ふ者、その榮光をあらはす者となへられん。」(六十一章——三節)

しかし、ユダ恢復の希望を最も美はしく、最も力強く描いてゐるのは六十章である。聖き都エルサレムは、世界に對する當然の女王として示される。エルサレムの子等は皆國の首都へ歸還する。そして、世界の民はその富と奉仕とを之に捧げる。ヤーエは世界に對して宗教上の統御力を有し給ふが故に、敢てこのことを爲し給ふを得るのである。しかもヤーエの宗教的統御は、その民の政治的統御を包括する。そして、

れは全地をその住居とし給ふべきものなるヤーエを、恰も手にて造れる神殿の中に押し籠めやうとするが如きものである。

『ヤーエかくいひたまふ、天はわが位、地はわが足臺なり、汝等我がために如何なる家を建てんとするか、又如何なる處かわが休憩やすみの場とならん』(六十六章一節)

神に對する罪はそれを以て終らない。更に深刻なるものがある。民は、申命記の改革を受けてゐるのにも拘らず、俘囚の教訓を充分に學びたる筈であるのにも拘らず、猶未だ舊來の惡習を捨てず、異教風な禮拜が、再建された神殿にまでも喰ひ込んでゐる。之に對して第三イザヤの攻撃は、隨分手ひどいものがある。五十七章三節以下、六十五章一節以下、六十六章十七節以下は特にその著しいものである。

(ハ) 第三イザヤとユダの將來

しかし、罪に對する攻撃が激しいとともに、ユダの將來に於ける救の望も又、充分なる強調を受けてゐる。いな寧ろ第三イザヤの特徴は、イスラエルの將來に對する、かうした希望の方面に於て著しいと思はれるのである。

(一) 社會上經濟上の罪がある。

『義者^{たじろもの}ほろぶれども心にとむる人なく、愛しみ深き人々取り去らるれども、義しき者の禍害のまへより取り去らるるなるを悟るものなし、かれは平安^{やすき}にいり、直きを行ふ寢床にやすめり。』
(五十七章一節)

(二) 司法上の不義不正がある。

『公平はうしろに退けられ、正義ははるかに立てり、その眞實は衡間にたふれ、正直は入ることを得ざればなり』(五十九章十四)

いな、罪は單に社會上の不幸を誘來するといふやうなものでは無く、更に深刻のものである。罪は民を神より隔離するものである。ヤーエは大なる勝利を持ち給ふべくして未だそれを持ち給はぬ。それは民の罪がそれを妨害してゐる爲めに外ならぬ。

『ヤーエの手は短くして救ひ得ざるにあらず、その耳は鈍くして聞えざるにあらず、たゞ汝等の邪曲なる業、汝等と、汝等の神との間をへだてたり、又汝等の罪その御面^{みかほ}をおほひて聞えざらしめたり』(五十九章一——二節)

さうした罪は、他の方面に於て、ヤーエの眞意に對する誤解を誘發する。そしてそ

この神託に於ても、斷食は、その原理實際の兩方面に於て、何等の非難をも攻撃をも與へられてゐるので無い。只從來よりも遙かに優つた斷食の用ひ方が示されてゐるのである。斷食といふものは、自らの容を害ふことの爲めに行ふべきでない。斷食の日には特に他に對して憐憫、慈愛を澆ぎ出さなくてはならぬ。自ら飢ゑるといふが如きも、單に己が失費を輕減するといふことに重點を置かず、他の人々の道德的必要に満足を與へるといふことで無くてはならぬ。

かやうにして、第三イザヤに現はれた主義は、從來行はれた宗教上の勤行を廢止するのではなくして、之に新しい精神を與へ、更に榮光あるものたらしめることであつた。乃ち神と民との兩者に、より多くの人道的成素を付與することであつた。

(ロ) 第三イザヤの罪惡觀

罪惡に關する思想に於ても、第三イザヤのそれは俘囚前豫言者を反映するものがある。ユダの罪惡は、俘囚によつても未だ全くは贖はれ終らず、今猶人々の中に存在し、民の共同生活に脅威を與へてゐる。

の存在する眞目的は、それに由つて神と民とが眞に心よりの交通を爲し得ることである。單に物質的に留まるものを除却し、靈的なことに一切を集中することである。

『もし、安息日になんぢの歩行をとめ、我聖日に汝の好むわざを行はず安息日をとなへて樂日となし、ヤーエの聖日をとなへて尊むべき日となし、之をたうとみて己が道を行はず、おのが好む業をなさず、おのが言を語らずば、その時なんぢヤーエを樂むべし、ヤーエ汝を地の高き處にのらしめ、汝が先祖ヤコブの産業を以て汝を養ひ給はん』(五十八章十三、十四節)

かく宗教的制度が有する靈的意義を闡明することに於て、第三イザヤの態度は俘囚以前の豫言者に髣髴たるものあるを見るのである。

(二) 斷食の問題 同じ風な思想は、斷食の問題に於ても之を見出すことができる
(五十八章十一—十二節)

元來近東地方に於ては、舊約時代に於ても現代に於ても、斷食は宗教上に於ける眞實にして恒常的な一要素である。彼等は食を斷つことに由つて、非物質的、即ち靈的なことにその注意を集中し得ることを知つてゐたのであり、従つて斷食は神と交はる上に於ての最も重要な一手段とされてゐたのである。

最後の光輝を揚げたと認むべきであつて、これは少しく詳細に、その内容を學ぶべき必要がある。

しかし、この書に載せられた神託が、悉く同一人の手に成つたものと考へることは困難である。各個の神託は極めて貴重な内容を有してはゐるが、全體を通じての思想系統といつたやうなものは之を見出すことが困難である。只問題が同種傾向のものであり、同一傾向の希望をその中心としてゐるといふことに於てのみ、之を一纏めとして取り扱ひ得るのである。

(一) 安息日の問題 第五十六章を以て始まる神託は、安息日を守ることの必要を強調してゐる。イスラエルの民の中には、他の民の間に生れたる者も加はり得るのであるが、その條件としては、安息日を守ることを爲さなくてはならぬ。しかし、安息日を守るといふことは、單に外形的なことでは無い筈である。なる程、それは仕事を休む日であり、又快樂を追ふことを止むるを必要とする日であるのには相違無い。しかし、それとても單にある目的を達するための手段であるに過ぎないのである。安息日

にまで達したものと見られるのである。そこには過大と見らるるまでに祭祀が重要視されてゐる。されば、失望よりやがて道徳的墮落へ、道徳的墮落より宗教的無關心へと、靈的生活の階梯を急激に下降しつつあつた民を救ふためには、さうした方法に出づるのが唯一最良の手段であつたとの立場よりのみ、マラキの貢獻と價值とを見得ものであると思ふ。

第五章 オバデヤ及び第三イザヤ

第三イザヤの宗教觀——第三イザヤの罪惡觀——第三イザヤとユダの將來

(イ) 第三イザヤの宗教觀

マラキ書と同じ背景に對して出されたる豫言が、オバデヤ書及び第三イザヤ(イザヤ書五十六章——六十六章)である。オバデヤ書はエドムに對する呪ひと、その滅亡に關する豫言の中に、如何にエドムに對するユダの民の怨恨が深刻極るものであつたを知るの外我等を益するものは尠い。しかし、第三イザヤに於ては、舊約の豫言はその

めがあり、祭司も全く聖まりて、昔のやうな正しい禮拜を行ふ。そしてその潔めは國內全部に行き亘り、凡ゆる社會的な罪、個人的な罪を拭拂ひ、惡を爲すものを取り去るのである。しかもこの恐ろしい日に於ても、ヤーエは未だ全くはユダを滅ぼし給はないのである。さればヤーエは正義であり又愛であることに於て、決して民の非難を受け給ふべきで無い（二章十七節——三章六節）

（五） ヤーエが民に恩澤を施し給ふことの出來無い理由は未だ他にもある。それは民が律法通りに十分の一を神に捧げず、神に對する義務を怠つてゐることである。神に對する義務を果さずして、神の責任を云々するが如きは、身の程を知らざるものの極といはねばならぬ（三章七節——十二節）

（六） 更に三章十三節——四章に於ては、惡人の繁榮に由る懷疑が示されてゐるがそれに對して豫言者は、やがて來るべき日に於てヤーエの審判あるべきことを豫言する。

エゼキエルに由つて始まつた禮拜中心主義は、マラキに至つて、遂にその行くべき所

(二) 然らば何故、ユダには繁榮が無いか。それは決してヤーエがユダを愛し給はないからでは無い。ユダの人々が、ヤーエに對するその祭祀に於て、極めて無關心であるからである。祭司自らが、その職分を煩勞とする状態にあるからである。(一章六節——二章九節)

(三) 更にヤーエの恵を妨ぐる重大事件がある。それは彼等が、みだりに離婚を行ふことである。彼等の多くは若き時よりの妻を輕々しく離縁して、偶像禮拜者なる他民族の女と結婚する。それは富又は勢力を得やうとする政略上のことにその原因を有するのであるかも知れ無いが、何れにしてもそれは正義と公正に叛くことであり、愛に對する絶大の侮辱である。かうした不道德の民は、如何ばかり神に向つて叫んだからとて、神がその恩恵を降し給ふ譯には行かぬでは無いか (二章十——十六節)

(四) 民は、神は審判を行ひ給はず、善惡に對して無關心であらせ給ふ、といったやうな大それたことを考へてゐる。しかし、豫言者はそれに對してヤーエはやがて自らの使者を遣はし、『ヤーエの日』を來らしめ給ふのだといふ。そこには火を以てする潔

今はその影を失ひ、神殿建築既に成つて、民心は漸く弛緩してゐる。政權を握つてゐる祭司級及び他の支配階級に屬する人々の間には、人心深く潜んでゐる貪慾の性質が、又もその頭を擡げ來つて、階級的憎惡、社會的不正、弱者への壓迫が甚だしくなつた信仰あるものは貧困に陥り又迫害を受け、それに加へて、さうした苦しみは、彼等の罪に對するヤーエの罰であるとの敎説にわざわひされて、天日暗きを覺ゆる悲觀のド
ン底にあつた。

(ロ) マラキ書の使命

この危機に際會して、民を激勵するとともに、彼等の間に信仰の復興を起さうとしたのがマラキ書の著者である。

(一) 彼は先づ『ヤーエは我等を愛し給はず』との懷疑思想を抱くに到つてゐる民に對して、ヤーエがユダを愛し給ふことの例證を擧げて行く。最近ユダの宿敵たるエドムは大いに荒されたではないか、我等の憎みは満足されたではないかといふ。(一章二——五節)

編纂者がその中心的なる句ともいふべき『わが使者』（二章二節）なる語を取つて、この書の題目としたもののやうである。『わが使者』はヘブル原語にて『マラキ』である。

前五一六年、神殿の再建が完成された後に於けるユダの歴史は餘り明白ではない。統治者たるペルシャ王廷に於ては、ダリヨス、クセルクセス、アルタクセルクセスと王位の繼承が行はれたが、この間ユダヤの支配はペルシャ代官の手中にあつた。しかし代官はユダヤよりは遙か北方に駐在してゐるのを常としたので、直接の支配はユダヤ人の中に於ける祭司長に委ねられてあつた。

當時ユダの民が爲しつゝあつた社會生活は一般に悲痛なものであつたやうである。そこには最早彼等を擁護して呉れるクロスのやうな英王は存在しない。代官達は思ひの儘に誅求と壓迫とを行つてゐる。四周にある諸民族、特にエドム人は、ユダヤ人の弱小に乗じて屢々掠奪を敢行する。

困難はかうした外患のみから來るのではなかつた。俘囚から歸つた當時の熱心も、

る（そのことはその豫言の價值を少しも減少せしめるもので無いことは論ずるまでも無い）。これ等の浮動的豫言は凡そ三つであつて、次のやうなものであり『ヤーエの言の重荷』なる句を以てその豫言が始められてゐるのを特徴とする。

（一）ゼカリヤ書九章——十一章

（二）同 十二章——十四章

（三）マラキ書

ゼカリヤ書は舊約豫言書（そして、今日の形に於ては舊約全書）の最後のものであるために、舊約書中の何れへも所屬せしめ難い豫言が、此處に聚録されたのだと思はれる。

（一）（二）の兩者は、その性質上、後に於て説明する默示文學に屬するものである故に、ここでは論じ無いこととする。（三）のマラキ書が即ち本章の主題となる譯であるが、元來、マラキと名づくる豫言者が存在した譯では無く、既に曰つたやうに、これは、無名の（寧ろ匿名の）豫言者によつて發せられたものであるが、後代に於ける

て國を起す力といふも、決して人間的な努力に留まるので無く、

『萬軍のヤーエのたまふ、是は權勢いさばつに由ず能力ちからに由ず、我靈に由るなり』(四章六節)といふのである。

かく檢察し來れば、ゼカリヤは、豫言運動の上に於て新らたなる生面を拓いたものであるとは曰ひ得ないが、しかし、前代の卓越したる豫言者達の主義原則に對する忠實なる追隨者であるとともに、それを當面の實際問題に該當せしむべき實際的手腕の所有者であつたことは、充分これを認めなくてはならない。

第四章 『德』の豫言者マラキ

マラキ書とその背景——マラキ書の使命

(イ) マラキ書とその背景

今日ゼカリヤ書として編まれてゐるものの中、ゼカリヤ自身の豫言を記したものは一章より八章までであつて、他は無名の豫言者達によつて發せられた浮動的豫言であ

ふものは、それ自身に於て、何等特殊なる價值があるので無い。最も重要なことはヤーエが民に爲し給ふ要求に服従することである。往昔の豫言者達は、貧しき者、弱き者に對して公平と憐恤とを與へよと叫んだのに、民はそれに對して何等の注意をも拂はなかつた。それが爲めに、國には永い間に亘る不幸が襲ひ來つた譯である。しかし、もうそれとても遂に終結すべき時が來た。イスラエルの未來には希望が輝いてゐる。斷食が饗宴と變るべき日が來る。各國の民がエルサレムに來りヤーエの禮拜に加はらんことを求め、神の民なるユダヤ人の中に已等も加へられんことを求める日が來るのである。そして、

『「ヤーエかく言ひ給ふ、今我^{われ}シオンに歸れり、我エルサレムの中に住まん、エルサレムは『誠實^{まこと}ある邑^{まち}』と稱へられん。萬軍のヤーエの山は『堅き山』と稱へらるべし、……エルサレムの街衢には再び老たる男、老ひたる女坐せん、皆年高くして、各杖を手に持べし、またその邑には男の兒、女の兒滿て、街衢に遊び戯むれん』（八章三——五章）
といふのである。

エバ舛の中に示されたユダの罪にしても、單に祭祀的な罪に留まるので無い。そし

ても、豫言的精神はその本質を改めたのではなく、只その外形に變更があつたに過ぎないものと思はれる。

不幸にしてゼカリヤの愛國運動は失敗に終つたもののやうである。神殿の再築は達成されたものではあつたが、獨立ユダヤの政治的中心人物たるべかりしゼルバベルは、間も無くその姿を歴史の面から失つてゐる。恐らく、かうした反抗運動に氣付いたペルシャの代官は、何等かの方法によつて、ゼルバベルを處置し終つたものであらう。

(ロ) ゼカリヤの宗教的教説

ハガイが平信徒であつたのに對し、ゼカリヤは純然たる祭司であつたもののやうである。従つて彼の豫言者の資質は特にその宗教的教説に於て覗ひ得られるのである。第七章及び第八章に記されるところに由れば、紀元前五一八年の頃、一團の人々は祭司達に向つて一の質問を發し、從來嚴守し來つた、五月、七月等の月に於ける斷食は、今後に於ても繼續する必要のあるものであらうかと訊ねた。

それに對して、ゼカリヤは自ら答を與へて『神の言』を宣べてゐる。乃ち斷食とい

味するもののやうである。

これ等の幻は、明らかに反亂の宣傳であつて、ペルシアの怒を怖れて、餘りに明らかなる意味を示すを厭つたために、かうした形を以て示したものである。

國家的宗教觀に囚はれてゐる民に向つて、國家の亡滅を説くことが、俘囚以前に於ける大豫言者達の任務であつた。それ程彼等は宗教の靈的性質を高調したのであつた。それに比すれば、ゼカリヤの愛國運動といふが如きは、餘りにも物質的な、そして『此の世』的な宗教の見方であり、豫言運動頽廢の一徵候だと見られないでも無い。

しかし、此處に我等の留意すべきことは、當時の世界にありて、倫理的な宗教觀を有する國民はただユダヤ人のみであつたことである。ユダヤ人がその國民的存在を失ふことがあるとすれば、今漸くその形を恢復しようとしてゐるユダヤ人の宗教も、やがてその發展を全くすべき基本を失ふであらう。そしてそれは世界の靈的損害を招來する結果となるのであるかも知れない。さればゼカリヤには、このことが無意識的に痛感され、彼の愛國的活動となつて現はれたのであると思はれるのである。結局彼に於

(三) 第三は測量師の幻であつて、エルサレムは將來何等の城壁をも要せず、その中に在すヤーエの力に由つて守られるのであり、又エルサレムの民はその數いや増して、遂に外に溢れるであらうといふのである。(二章一——五節)

(四) 第四は祭司長ヨシユアに關する幻であつて、ヨシユアと、彼を告訴するサタンとの間に於ける争ひあり、遂に天使達は、ヨシユアに美服を衣せ、之に冠することによつて彼に勝利を與へる。(三章一——十節)

(五) 第五の幻は一つの燈臺と、二本の橄欖樹とのそれであつて、それはヤーエが絶えず人類のことに關涉し給ふことを示してゐる。そして二本の橄欖は、乃ちゼルバベルとヨシユアとを意味するもののやうである。

(六) 第六は飛び行く害物。

(七) 第七はエバ(穀類を量る)鉢の中なる女の幻であり、共にユダの中なる罪がやがて除き去らるべきことを示すものである。(第五章)

(八) 第八の幻は四色の馬に牽かれたる四輛の車であつて、ユダの世界的支配を意

ダの民は概してダリヨスに好意を寄せてはゐたが、しかし、かうした混亂狀態を前にしては、ペルシヤの桎梏を離れて、獨立的なる神政々治を樹立しやうとの野望が起り來るのは寧ろ自然の數である。ハガイの敎說の中にも既にさうした希望の一端が覗れるのであるが、彼と時を同じくして豫言を爲したゼカリヤに至つては、民を激勵して、愛國運動に参加せしめんと志望は更に明白となつてゐる。

彼の豫言は、殆んで總てが『幻』である。これは彼が神憑りの狀態に於て見たるものを、後自ら筆を執つて書き記したものだと思はれるのであるが、それは皆、一種の煽動的メッセーヂであることが窺はれる。

(一) 第一の幻は騎馬の天使を主題とせるものであつて、彼等が全地を行き巡つた結果として、ヤーエの神殿は完成し、エルサレムもその周圍も、人煙愈々盛んにして、民は鼓腹擊攘するであらうといふのである。(一章七——十七節)

(二) 第二は四人の鍛冶の幻であつて、それは、ユダを苦しめたる國々が、やがてユダの爲めに打ち碎かれるであらうことを意味する。(一章十八——二十一節)

ユダヤ人の新たなる宗教生活はこれを中心として發展すべき機運に向つたのである。

第三章 幻の豫言者ゼカリヤ

ゼカリヤの愛國的活動——ゼカリヤの宗教的教説

(イ) ゼカリヤの愛國的活動

クロス王は五二九年に歿し、その子カムビセスが位を繼いだ。カムビセスは軍を率ひてエチプトに遠征しつゝある間に、故國に於てガウマタなるものの反亂を起すに遇ひ、直ちに軍を返したが中途に於て自殺を遂げた。かくしてガウマタがペルシヤの主たらしむるに到つたが、王家に屬する貴族の一人なるダリヨス起つて之を殺した。紀元前五二一年のことである。しかし、彼の王位に對しては猛烈なる爭奪が行はれ、それを機としてペルシアに屬する諸國の反亂が起つた。しかしダリヨスは獨力能く戦ひ紀元前五一九に至つて完全に國內を平定し終つた。

ハガイがその豫言を爲したのは紀元前五二〇年、乃ちこの反亂の眞只中であつた。ユ

ある。これは一面から觀察すれば、豫言が既にその成熟期を終り、漸次的に凋落してその中なる核實を示し來つた姿だともいへる。

しかし、ハガイに關しては今一つの立場よりその價值を検討する必要がある。第一に彼は一個の平信徒であつて、多くの豫言者のやうな宗教家では無かつたことである。従つて彼は實際問題にその力を入れた。しかも彼の警告と獎勵とは、失望と怠惰とに陥つてゐた民を奮起せしめ、ここに彼等の宗教的中心を造營せしむるとともに、それに關する活動そのものに由つて、民をして勇氣と勤勉とを學ばしめたのである。第二に俘囚以前の民に於ては、神殿を重視するといふことは、彼等の宗教的墮落を意味してゐた故に、豫言者達は神殿の無用を唱ふるを必要とした。しかし、ハガイに在つては、神殿を造營しないことが、民が靈的に不熱心であることを示してゐる。故に神殿造營の獎勵といふことは、その外面的形態に於てこそ物的のものであれ、その内容に於ては全く靈的のものであると言ひ得られるのである。

かくしてハガイの努力は空しからず、紀元前五一六年を以て所謂第二神殿は完成し

法はかうである。宗教上のことに於て、汚れを受けるといふことは容易であり、汚れが傳染することも容易である。しかし、一旦汚れたものが、聖いものに觸はつたからとて、中々それは聖くならない。それと同じやうに、今、僅かに二ヶ月許り神殿の造營をやつたからとて、それに由つてヤーエの恵に預ることはさう急に來るものではない。しかし、それにも拘らず、今年の出來秋は、どうやら豊年であるらしいではないか、ヤーエが恩恵を與へて居給ふことの證跡は歴然たるものがある。今は手を緩めるべき時ではあるまい。(二章十一—十九節)

(四) そして、やがてヤーエがその大なる定め給へる日に於て、ゼルバベルをして只にユダの首領たらしめ給ふのみならず、全世界の王たらしめ給ふべき日が來るのであると彼は説いた。(二章二十—二十三章)

ハガイの豫言を通觀する時、我等はその空氣が俘囚以前の豫言者と全く相違してゐるのを見出す。今や、神殿建築といふが如きことが宗教上の一大事業、最重要事となつたのである。靈的、道德的なものから、全然物的なものにその重點が轉移したので

のであるか、國運が進展しないのも、又近年不作が続いてゐるのも、皆民が神殿の造營を等閑に附してゐるためである。先づ神の殿を建てよ、然らば國內には繁榮が漲るであらう、といった。

彼の警告は直ちに民の聽從するところとなり、二週間後には既に造營のことに着手された。(第一章)

(二) しかし、一ヶ月も経たない中に民等は漸く失望し始める。如何に努力して見ても、音に聞えたソロモンの神殿のやうなものを造り上げることはできない。やり甲斐のない仕事ではないか、と彼等は考へるのである。それに對してハガイは更めて獎勵を與ふの必要を感じ、ヤーエの靈は必ず彼等を助け給ふのであり、萬國の金と銀とはやがて神殿のために捧げられ、ソロモンの神殿に勝るものが出來上るであらうと言つた。(二章一——九節)

(三) かくて氣を取り直した民は、二ヶ月間仕事を續けて行つたが、事業の困難は又も彼等の意氣を阻喪せしめる。そこでハガイは再び立つて彼等を督勵する。彼の論

すべきは、彼等の間に於ける支配者に、ペルシヤ政府より任命されたる總督であり、古へのダビデ王朝の血統を引いてゐるゼルバベルがあつたことと、宗教上の元締として之も又ザドクの裔なる正しい血統から出でた祭司長としてのヨシユアがあつたことである。

(ロ) 豫言者ハガイとその教説

しかし、かくも無氣力に、且又無爲に過しつゝあつたユダの人々に對して、強い警告の聲を發するものが出来た。豫言者ハガイがそれである。

彼がその豫言を爲したのは紀元前五二〇年（ダリヨス王の二年、ダリヨス王のことは次章に於て説明する）のことであつて、四回に亘る彼の宣言は一々その日付を有つてゐる。

(一) 年の六月一日、彼は民に向つて、神殿建築に着手することの必要なるを力説した。それに對して民のあるものは、未だ時期到らず、彼等の力充分ならずと答へた。ハガイはこれを反駁して、汝等は已れの家を建て得るに何故ヤーエの殿を建て得ない

(二) 歸還の途は遠く、旅路は困難である。バビロン軍の虜囚として、着のみ着の儘の姿にて旅することは可能であつたとしても、今家産を纏め、妻子眷族を引き連れてユフラテ河畔を西北へ、そしてダマスコを通つて南に下る遠い旅路につくことは、困難中の困難である。

されば、クロスの詔勅を機會としてエルサレムへの歸還を敢行したものは、極めて少數の熱心家であつたに過ぎないと思はれる。エズラ書に由れば四萬二千の人々が群を爲して歸還したかのやうであるが、それは、この後一世紀の後になつて行はれた、戸口調査の際に於ける全人口をいつたものであると思はれるのである。

歸つた人々は、神殿の廢墟を清め、古へを知つてゐる古老の話を聞いて、ありし昔の故國の繁榮と、その信仰生活の樂しくまた美しかりし日を偲んで、涙を漑ぎ出したもののやうであるが、しかし、あまりにも少數であり、又無力であつた彼等は、直ちに神殿を再建するの勇氣もなく、十八年は徒らに經過し、その間途切れ途切れに歸り來る人々によつて、その人口を増すに過ぎない有様であつた。ただ、この間にあつて特記

る宗教家に感ぜられた程には、貴重なものとして考へられなかつたのである。

それには種々な事情があつた。

(一) 五八六年の俘囚から數へても、既に半世紀を経て居るのであれば、エルサレムに對して故郷懷しとの感に打たれるやうな年頃まで古都の感化を受けて育つたものは、大抵あの世の人と成り終り、ユダヤ人の中堅を爲す人々は大多數バビロンに於て生れたものである。彼等は、例へばカリフォルニアに生れた日本人の子等が親達に伴はれて日本へ來た時『早く故國（アメリカのこと）へ歸りませうよ』といったといふ話があるやうに、バビロンこそ寧ろその故郷として感ぜられてゐるのである。

(二) 彼等は今、バビロンに於て資産を持ち、職業を持ち、商業的發展を爲してゐる。エルサレムは、帝國の一隅にある廢墟累々たる一地區に過ぎない。彼等のあるものはバビロン人を母とし又は妻としてゐる。あるものは宗教的にもバビロンの人になつてゐたであらう。されば彼等が今更、エルサレムへ向つて旅立つの必要を感じなかつたのは、寧ろ當然だときへも思はれる。

満足することであつた。しかし、クロスに由つて始められたペルシャの政策は、これ等前代の二帝國のそれと全く類を異にするものであつた。

クロスは往昔に於ける帝王中、稀に見らるゝ英邁轄達の性情を有し、その征服民に對しては、徹底的なる溫情主義を取つた。彼の寛容なる態度が特に明確となつたのは、從屬民の宗教に對するそれであつた。彼自らは、アフラ・マツダ乃ち光の神を信じて居たが、他の國民が他の神々を信じて居るのは、同じい神を、他の姿に於て信じ且禮拜してゐるのだと考へた。されば彼は、卽位後間も無い紀元前五三八年の頃、國中にある凡ての虜囚を解放し、本國への歸還を許すとともに、その宗教的禮拜に關しては絶對的な自由を與へた。

かうした釋放の民の中に、ユダヤ人も含まれてゐたことはいふまでも無い。第二イザヤが叫んだ豫言は、此處に實現の機會を與へられたのである。されば民は直ちに立つて本國への歸還を急ぎ、再興の聖都の爲めに力を盡したであらうか、必ずしもさうではなかつたやうである。一般のユダヤ人には、この機會が、第二イザヤの如き熱烈な

され、又具體化されるためには、ナザレのイエスの出現を俟たねばならなかつたのである。

第二イザヤは理論家ではない。しかし、その勝れたる靈的洞察と、類ひ稀なる詩的情懷とを以て、彼の内に燃えさかる確信と熱意とを他にも傳へやうとしたものであり、その點に於て我等の靈的高揚を資くる上に異常の能力を有するものである。彼の確信を知らんが爲めには五十四章十を、彼の熱意を感じんが爲めには、特に五十五章十三を讀まれんことを切望する。

第二章 殿の豫言者ハガイ

ユダヤ人の歸還——豫言者ハガイとその教説

(イ) ユダヤ人の歸還

征服民族に對するアッシリヤの政策は、これを全く撲滅し終ることであつた。バビロンのそれは、只國家的存在を失はしめ、再興の反亂の虞れ無きに到らしむるを以て

ほのくらき燈火をけすことなく

眞理をもて道をしめさん

かれは衰へず、喪膽せずして道を地にたてをはらん。

もろくの島はその法言をまちのぞむべし』（四十二章一——四）

いふまでもなく、俘囚の民は、かうした理想的な態度を以てその苦難に直面したのでも無く、その使命の眞意を充分に理解したのでもない。これは第二イザヤの如き先覺者の幻に畫かれたる理想であつて、民一般に取つては餘りにも崇高なるものであつた。

『ヤーエ宜給はん、わが思はんぢらの思とことなり、わが道はんぢらの道と異なれり。天の地より高きが如くわが道はんぢらの道よりも高く、わが思はんぢらの思よりもたかし』（五十五章八——九）

の言ある所以である。

第二イザヤの思想は、後代に於ける宗教思想を感化し、ユダヤ人の靈的宗教を維持する上に於て多大の貢獻を爲したのであつた。しかし、それが眞實の意味に於て理解

『わが義しき候は、その智識によりて多くの人を義とし、又かれの不義をおはん……彼はおほくの罪を負ひ愆あるものゝ爲にとりなしを爲せり』(五十三章十一、十二)

その尊き業とは乃ち全地の救ひ、ヤーエが諸の民に知られ給ふことである。

『なんぢわが僕となりて、ヤコブのもろくの支派をおこし、イスラエルの中の残りて全うせしものを歸らしむることはいと輕し、我また汝をたてゝ、異邦人の光となし、我が救を地の果にまで到らしむ』(四十九章六)

かくして世界的使命を帯びるに至つたヤーエの僕は、神の靈を受けて世に出で行くのである。しかもその謙遜と柔和によつて彼は『義』乃ち眞實に道德的な宗教を世界に充ち亘らせるのである。

『わが援くるわが僕

わが心よるこぶわが撰人をみよ

わが靈をかれにあたへたり

かれ異邦人に道をしめすべし

かれは叫ぶことなく聲をあぐることなくその聲を街頭にきこえしめす

また傷める蘆を折ることなく

然るに我等思へらく、彼はせめられ、神にうたれ苦しめらるゝなりと。

彼は我等の愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安をあたふ。

そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり、われらはみな羊のごとく迷ひておのゝ己が道にむかひゆけり。然るにヤーエは凡てのものゝ不義を彼の上に置きたまへり』（五十三章四—六）

まことに然りである。

『彼は苦めらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場にひかるゝ羊羔^{こゝろつじ}のごとく毛をきる者の前にもだす羊のごとくしてその口を開かざりき……』（五十三章七—九）

豫言者は同情の言を以てイスラエルが苦難に對して執る態度を描く、そして、しかも、それがヤーエ自らの深い意圖に出づるものであることを宣明する。

『されどヤーエは彼を碎くことを喜びて之を惱まし給へり。斯てかれの靈魂とがの献物をなすに至らば、彼その本をみるを得その日は永からん』（五十三章十）

ヤーエも亦、イスラエルの爲す代償的苦難（Vicarious Suffering）が如何に尊き業を成就するものであるかを示し給ふ。

上りのぼりて甚だ高くならん……

王たちは彼によりて口を緘まん

そは彼等未だ傳へられざることを見、

未だ聞ざることを悟るべければなり』(五十二章十三——十五)

これに對して異邦の人々はいふ。

『われらが聞きし(宜ぶるところと譯するは誤まつてゐる)ところを信ぜしものは誰ぞや——

彼は主のまへに芽のごとく、^{あか}爛きたる土よりいづる樹株のごとく育ちたり、

われらが見るべき美はしき容なく、うつくしき貌なく、われらが慕ふべき^{みづか}麗色なし。

彼は侮られて人にすてられ、^{かなしみ}悲哀の人にして病患をしれり。

また面をおほひ避ることをせらるゝ者のごとく侮れたり。

われ等も彼を尊まざりき。』(五十三章一一——一二)

これがイスラエルの苦難に對する彼等の見解であつた。しかも恢復と榮光のイスラエルを前にして、彼等は、このイスラエルの苦痛が、彼等自らの救をその目的とするものであることを悟る。このことを發見した彼等は悲しげに告白する。

『まことに彼は我等の病患をおひ、われらのかなしみを癒へり。』

ラエル國民を代表するものか、さうした問題について聖書學者の間には種々の異説があり、その何れにも相當の論據が存するのであるが、現在に於ては、これ等は皆第二イザヤの口より出でたるものであり、ヤーエの僕とはイスラエル國民のことをいふものであるとするが、最も眞理に近い説だと思はれる。

この等の詩が取り扱つてゐる主題は、何故ヤーエの僕が、かくまでに苦しまなくてはならないかといふことである。そして、それに對する根本的な理由は結局與へられてゐない。しかし、それが何の目的であるかといふことが、深刻なる詩句を以て語られてゐる。

イスラエルの苦難は、それが萬國の救ひとならんためである。かくまでに苦しみつゝある民をヤーエは救ひ出し給ふ。それに由つて世界の王達は驚愕する。そしてその驚愕はやがて彼等をヤーエに導く機縁となるであらうといふのである。

ヤーエは先づこれ等異邦の王達に呼びかけ給ふ。

『視よ、わが僕、知慧をもて行はん』

ある。イスラエルが撰ばれたのはそれが真宗教の所有者であるからである。そして今クロスを用ひて爲し給ふ業は、この世界的大業を目標とせるものに外ならない。

『而して日の出づるところより西の方まで、人々我の外に神なしと知るべし。我はヤーエなり他にひとりもなし』(四十五章の六)

(ホ) イスラエルの世界的使命

世界的なる救に對するイスラエルの使命は、更に明白に、いはゆる『ヤーエの僕の詩』に表はされてゐる。

この詩は四個であつて次の個所に記されてゐる。

(1) 四十二章、一——四節

(2) 四十九章、一——六節

(3) 五十章、四——九節

(4) 五十二章十三節——五十三章十二節

これ等の詩は第二イザヤの筆になるものか、或は他の詩人の作物より採擇編入されたものか、又このヤーエの僕とは過去の人物か將來のものか、個人であるか或はイス

己が腹の子をあはれまざることあらんや
たとひ彼等忘るゝことありとも

我は汝を忘るゝこと無し』(四十九章十四)

イスラエルはヤーエの愛妻、若き日の妻である、いま悲しみつゝあるのではあるが
ヤーエは決して彼女を忘れ給ふたので無い。初めの愛を以て愛し給ふのである。

『我^{われ}しばし汝を捨てたれど大いなる憐憫をもて汝をあつめん、わが憤^{いきどほ}りあふれて、暫くわが面
をなんぢに隠したれど、永遠^{とこしへ}のめぐみをもて汝をあはれまんと、これ汝を贖^{あか}ひ給ふヤーエの聖言
なり』(五十四章七、八)

しかし、ヤーエ若し全地の神に在すとすれば、ヤーエの愛は諸國の民に差別なく及
ばされ無くてはならぬ。然らば彼が特にイスラエルを愛し給ふのは、解し難いことではあるまいか。

この問題に對して豫言者はかう答へる。イスラエルはヤーエの僕である。ヤーエはこの僕を用ひてヤーエに關する智識を萬國に及ぼさんとし給ふのである。神の目的は世界の救ひにある。イスラエルを恢復し給ふは、この目的を達成せんがための手段で

えものゝ中の一つの陶器なるに、己をつくれる者と争ふは禍ひなるかな。泥塊はすえものつくりに向ひて汝なにを作るかといふべけんや……われ義をもて彼のクロス^{クロス}を起せり、われそのすべての道を直くせん、彼はわが邑をたて、わが俘囚^{とらひびと}を價のためならず、報のためならずして釋すべしこれ萬軍のヤーエの聖言なり」(四十五章一——十三)

(ニ) ヤーエとイスラエルとの特殊關係

かく第二イザヤは、ヤーエが唯一にして全能、そして全地の神であることを強調したが、しかし、彼はそれがためにヤーエが特別な意味に於てイスラエルの神で在することを閑却したのではない。彼の使命は、ユダの民に『慰め』を與へることであつた。その目的を達するためには、ヤーエが彼等に對して有し給ふ特殊なる恩寵を強調することが最も適當なる方法である。ここに豫言者は、永遠に輝く眞理を含んだ神言を以て、民の心を勵ましたのであつた。

『然どシオンはいへり

ヤーエ我をすて、主われを忘れ給へり、と

婦^{なんな}その乳兒^{ちのみこ}をわすれ、

(二) この眞理に照すとき、偶像禮拜の不都合にして愚かなるは、明白過ぎる程に明白である。

『偶像をつくる者はみな空しく、かれらが慕ふところのものは益なし、その證をするものは見こ
となく、知ることなし、斯るがゆゑに恥をうくべし、たれか神をつくり、又益なき偶像を鑄たり
しや』(四十四章九以下)

右の文を以て始まる偶像攻撃は、古今の名文章と稱すべきものであらう。ここに俘
囚を境として特に旺盛となれるユダヤ人の靈的宗教觀が、偶像禮拜に對して如何に堪
え難き迄の嫌惡を感じたかが示されてゐる。

(三) ヤーエは、かくの如き絶對者に在すが故に、その使者として外國人クロスを
用ひ給ふが如きも、民が知り得ざる深き計畫あつてのことであり、そのことに對して
神を非難するは身の程知らざる不當のことである。

『われヤーエわが受膏者(原語メシヤであつて、神よりの任命者の意)クロスの右の手をとり
て、もろくの國をそのまへに降らしめ、もろくの王の腰をとき、扉をその前に開かせて門を閉
づるものなからしめん……われはヤーエなり……我のほかに神なし……一人もなし……世人はす

答へていふ、何とよばるべきか、いはく人はみな草なり、その榮華はすべて野の花のごとし……

草はかれ、花はしぼむ、然どわれらの神のことは永遠にたゞん」(四十章八)

バビロン如何に強大なりとも、それは遂に『人』の建てたるものに過ぎない。永遠なる神の前には無力なるべき筈である。豫言者はかく主張したのであつた。

(六) 世界的唯一神の信仰

第二イザヤに於て、ユダヤ人の間に於ける完全なる唯一神の信仰は始めて其姿を顯はしたといへる。ヤーエは最早従前のユダヤ人が信じたやうな、神々の中に於ける一人の神では無く、唯一無二なる神である。

(一) このことは特に、ヤーエの豫言者達の豫言が、過去に於て悉く實現されたことに由つて最も明白に示されてゐる。

『汝等いにしへより以來のことをおもひいでよ、われは神なり、我のほかに神なし。われは神なり、我のごとき者なし、われは終のことを始よりつけ、いまだ成ざることを昔よりつけ、わが謀略はかならず立といひ、すべて我がよろこぶことを成んといへり』(四十六章十)

『よき音信おとづれをシオンに傳ふるものよ。

なんぢ高山たかみやまにのぼれ

嘉よきおとずれをエルサレムに傳ふるものよ

なんぢ強く聲をあげよ

聲を揚げておそろゝなかれ

ユダのもろくの邑につげよ

なんぢらの神來り給へり』と(四十章九)

豫言者は自らの熱心に溺れたる有様である。彼に取りて、ヤーエがクロス王を用ひて爲し給ふべき救は餘りにも明確である。彼は焦燥の心を以て、己が同胞に同じ確信と熱心とを與へやうとする。しかし、餘りにも強大なバビロン帝國の勢威の前に萎縮し、餘りにも優秀なその文化に陶醉したる俘囚の民には、さうした言葉は只夢見る人のそれとしてのみ響く、ここに第二イザヤは立つて、『人』の如何に果敢なきか、そして、それに對して神が如何に永遠にして絶大の力を持ち給ふかを叫ぶ。

『聲きこゆ、曰く、呼ばはれ、

『なんぢの神いひたまはく

なぐさめよ、汝等わが民をなぐさめよ

懇ろにエルサレムに語り

之によばはり告げよ。

その服役の期すでに終り、

その咎すでに赦されたり

そのもろもろの罪によりて

ヤーエの手より受けしところは倍したり、』と（四十章一——二）

彼は天使が既に砂漠の中に途を設け、ユダへ歸り給ふべきヤーエの爲めに準備を爲しつゝあるを幻に見る。

『よばはるものゝ聲きこゆ

なんぢら野にてヤーエの途をそなへ

砂漠にわれらの神の大路を直くせよ』（四十章三）

いな彼の幻は、彼をエルサレムにまで送る。そして彼はエルサレムに向つて、ヤーエを迎ふべき準備を爲すべきをすゝめる。

かに存するので無いのであれば、無名の豫言者が存在したからとて、それは豫言そのものの價值を左右するものではない。

(ロ) 慰の豫言者第二イザヤ

かうした無名の豫言者中、特に優秀なるものに、『我等が假りに『第二イザヤ』(Deutero Isaiah)と名づくるものがある。彼の豫言がイザヤの豫言に附加せられ、イザヤ書四十章——五十五章を形成してゐるからである。

クロスの興起は第二イザヤの心に新らしい希望を湧かせたが、それはやがて彼の確信となり、その確信はやがて他に向つて發せられる豫言となつた。

彼の信念の基礎を爲すものは、歴史の中にその大能を揮ひ給ふ神といふことであつた。この立場よりクロス王の勝利を解釋したる彼は、この世界的大運動は、ヤーエがその民を故國に歸さんが爲めに爲し給ふ活動に外ならぬを感じた。かくて彼は紀元前五四六年クロスの軍がバビロンの野にその勢威を揮ひ始むる頃より、己が民に向つてやがて來るべき『慰』と『歡喜』との豫言を爲したのであつた。

従つてエゼキエル時代に示されたやうなバビロンに對する好意も、今や漸く其影を失ひ、バビロンを打ち倒すべきものであれば、如何なる敵をも歡迎するといつた心の状態にあつたと思はれる。

この時に際してのクロスの興起と、その成功とは、ユダヤ人の心を震撼せしめては置かない。再び獨立を恢復し得べしとの望と、その讐敵に對する復仇の志とは相俟つて民の中なる指導者を刺戟し、ここに新らしく、そして極めて旺盛なる豫言運動が起つた。これ等の豫言はその數も多く、その靈的調子に於ても、その活躍せる文體に於ても、前代の大豫言者達のそれに勝るとも、決して劣らざる程度に高邁なるものであるが、その何れも、その名が我等に傳はつて居ず、只その豫言のみが、他の豫言書の中に介在して我等に傳へられてあるのみである。往昔の豫言者達は、その著作によつて名を竹帛に垂れやうとする志があつた譯ではなく、只之を筆記し、又は之を編述したるものが、特に著明なる豫言者達の名を附して之を後に傳へたに留まるのである。豫言の重要性はその内容にあるであつて、それが如何なる名の人に由つて爲された

めに殺され、その位を奪はれた。ネルガルの子は父よりの位を受けて後九ヶ月にして謀叛の爲めに斃れ、ナブナイドが王位に登されたが、彼の治世中に起つたペルシアの爲めにバビロン帝國は遂にその最後を見ることになつた。

從來この地方に於て帝國を成したるものは、最古の住民たるスメリヤ人を除いては悉くセミチツク人種に屬するものであつたが、ペルシア起るに及んで此處に始めてアリアン（インド・ヨーロッパ）人種の帝國が始まつたのである。彼等はバビロンの東方に位する山嶽地をその住居とし、メデヤ人の支配下にあつたのであるが、英傑クロス起つて彼等を率ゆるに及び、メデヤより獨立したるのみならず、紀元前五四九年、遂にメデヤを己が支配下に屬せしめた。次で西往して小アジアに於けるリデヤを撃ち轉じてチグリス河上流地方に於てバビロン王子ベルシャザルの軍を破り、やがてバビロンに迫り、一刀に屺らずし之を占領した。紀元前五三八年のことである。

ネブカドレザル王の治下に於て、可成りの自治と自由とを與へられてゐた俘囚のユダヤ人も、彼の死後に於ては矢張り東洋的專制王の下にある外國奴隸たるを免かれず

第四篇 ベルシヤ時代に於ける豫言の進展

『慰』の豫言者第二イザヤ——『殿』の豫言者ハガイ——『幻』の豫言者ゼカリヤ——
『德』の豫言者マラカイ——オバデヤ及び第三イザヤ——ヨナ書の眞性

第一章 『慰』の豫言者第二イザヤ

ベビロンの滅亡とベルシヤの興起——慰の豫言者第二イザヤ——世界的唯一神の
信仰——ヤーエとイスラエルとの特殊關係——イスラエルの世界的使命

(イ) バビロンの滅亡とベルシヤの興起

ネブカドレザルに由つてその光榮の絶頂に達した新バビロン王國は、歴史上稀有なる成功を収めたものではあつたが、紀元前五六一年ネブカドレザルの死とともに、急天直下の勢を以て、國運は衰頹の途を辿つたのであつた。彼の子エビル・メロダク(列王紀略下二十五ノ二十七)が位をついだが、二年の後その義兄ネルガル・シヤレザルの爲

のがあるのである。

弊習に墮落したのは、後代の人々がエゼキエルの如き高遠なる靈性を把持し得なかつたのに基づくと言ひ得るのである。

更に又、俘囚以後のユダヤ人は、外國人よりの感化を受けること特に甚だしいものがあつた。バビロンに於けるマルドク神の壯麗なる禮拜は、可成り多數のユダヤ人をして之に歸依するに至らしめてゐる。しかもエゼキエルはバビロンに對して極めてデリケートな立場にあり、彼が後世國民の首領を『王』といはずして、特に『君たる者』といったことにも明らかに寛はれるやうに、周到なる注意を要することが多かつたのである。されば彼がその國民を外界の惡感化より救はんが爲めに、特に宗教上の隔離を主張したのは、深い洞察の跡をその中に認めしめずしてはおかない。

從來國民的であつた宗教が、個人的のものとなるに於ては、其處に確固とした聖典の必要なのは明らかであつて、後代の惡用を以て直ちにエゼキエルの功罪を評定することは出来ない。俘囚の民が宗教的に維持されたればこそ、世界はキリスト教の恩惠を受けてゐる。さればその維持の上に力あつたエゼキエルの功績は容易に没すべから

は『默示文學』(Apocalyptic Literature) と稱せらるるものであり、ダニエル書の如きが最もよき適例である。之は幻の中にある經驗によつて眞理を悟るものであり、又やがて來るべき理想國の畫圖をその主體とするものである。この點に於てもエゼキエルは一の先驅を爲すものであつて、枯骨の谷の幻、及びゴグの侵入の如きは、典型的なる默示文學の體を爲してゐる。

かく考察し來る時、エゼキエルがユダヤ人の宗教に爲したる貢獻は、退歩的なものに止まるやうにも見えるのであるが、しかし少しく深く彼の使命を検討すれば、その決して然らざるを見出す。彼がその對象としたる國民は、國と神殿を失ひ、しかもその恢復の曙光未だ見えざる時期に住める者共である。彼等の間に於ける宗教は勢ひ思索的のものに墮せざるを得ない。宗教は生活であつて、單なる思想體系ではない。國民的組織と神殿の禮拜にその生活的成素を有したりしユダヤ人の宗教は、何等か之に代るべき衣を與へられるに非れば、遂に雲消霧散し終るであらう。エゼキエルが祭祀制度を強調したのは、即ちこの種の外衣の必要を感じたからであり、それが後代に於て

とは全く類を異にしたものである。そして、それは又後代に於て、いはゆる學者バリサイの人々に由つて精神よりも文辭の末に拘泥するの風を生じ、靈的宗教の地位をあまりやふくするの弊を來したものであつたが、このことに就て最も重要な感化を與へたものはエゼキエルである。そのことは彼の召命が卷物を食ふことにあつたことに見られるやうに、彼の教説の中核を爲したものであつた。

(二) 俘囚以後に於けるユダヤの宗教は、特に祭祀的となり、人格よりも行事を重んずるの風をさへ生じ、聖書の宗教と相俟つて所謂律法主義を醸成したが、さうしたことの上面にもエゼキエルの與へた感化は多大であつた。

(三) 俘囚以後に於けるユダヤ人は、強烈なる國民主義者であり、排他主義者であつた。これは世界的神觀と矛盾するものであり、従つてユダヤ人の宗教的伸展に甚だしい障礙を與へるものであつたが、このことに於ても、外國人の排斥を強調したエゼキエルは、ユダヤ教の父祖たる地位を占めてゐる。

(四) 俘囚以後に於て漸次に發達し來り、遂に豫言の地位に取つて代りたるもの

(ト) 豫言史上に於けるエゼキエルの位置

申命記法に於て具體化し、エレミヤに於て人格化した、豫言と祭司との結合は、エゼキエルに於てその頂點に到達したといへる。彼が描いた理想のイスラエルは、全然祭祀的のものである。勿論彼は豫言的使命を忘れたのではなく、個人的宗教の強調を抛棄した譯でもない。彼が恢復されたる民の中に道德的要素の必要なるを主張しなかつたのは、既に彼等が『聖くされたる』民であるべきことを豫想したためであつたとも言ひ得る。

しかしながら、彼が豫言運動の上に於て一轉機を劃したものであることは、之を否定することが出来ない。彼以後に於て起つたユダヤ思想史上の新要素は、大抵彼に源を發してゐるからである。

(一) 俘囚以後に於て、ユダヤ人の宗教上に重要な地位を占めたものは『聖書の宗教』であつた。乃ち成文的なる神言あり、之に服従し、之を解釋することに、神への奉仕があるといふのである。これは往昔の豫言者達の、創意的なそして應變的な神託

に、種々の規定が設けられる。彼等は神殿に於て奉仕するに當り、汗を出すことを防ぐために必ず麻衣を纏はなくてはならぬ。奉仕の間に酒を飲んでゐてはならぬ。祭司の寡婦の外、寡婦と結婚してはならぬ。又極めて近い姻戚の外は死人に近づいてはならぬなどのことがそれである。

(二) 祭祀のことについては特に嚴重なる規定が設けられ、それによつてヤーエとイスラエルとの間に於ける交際を愈々親密ならしむべき道が開かれる。特に罪祭を行ふことによつて罪の贖が爲され、聖所は聖められ、ヤーエの怒が静められることとなつた。新年に於て、逾越節に於て、又第七月の十五日に於てこの罪祭が守られる。君たる者、乃ち復興國民の中心を爲すメシヤは、これ等のことに就て特に忠實であらねばならぬ。

神殿より流れ出づる河ありて死海に流れ入り、その中には民を養ふべき多數の魚類が産出され、又その沿岸に生ずる樹葉は民の病を癒す。かくして幸福なるイスラエルが世に來るべしいふのである。

對して最も忠實なりし族である。他國民は全くバレスタインより追ひ出されることとなる。今この計畫を圖表すれば前頁の如くである。

神殿の計畫も、領地の分割も、『聖なること』の表徴として、悉く規矩の正しいものとして造り上げられる。

(二) 次に『聖き物』と『聖からざる物』との間に明確な區別が定められる。滅亡以前の神殿に於ては、雜事を爲すものは外國人たる奴隸の雜色であつた。しかしながら、彼等は『心にも割禮をうけず、肉にも割禮を受けざる外國人』(四十四章七)である。故にこの新らしい神殿に奉仕することは許されない。そして彼等の代りとしてレビ人が雜事に映掌することとなる。レビ人にいふは、既に説明したやうに、申命記法に由つて廢止されたる地方諸神社の祭司である。彼等はザドクの末なるエルサレムの祭司と全く區別され、祭司のみが神に直接の奉仕をするのである。何故レビ人はさうした差別を受けるかといへば、彼等は偶像禮拜の行はるる神社の祭司であつた、その罪に由るのだと説明される。そして、祭司達自身にも、聖所を穢がすことの無いため

いふ。滅亡とともに此地を去つたヤーエの榮光が再び此地に歸り來るのである（四十
三章）。されば、都にはヤーエの住所にふさはしい設備が爲されねばならぬ。そしてそ

ダ	ン	族			
ア	セ	ル	族		
ナ	フ	タ	リ	族	
マ	ナ	セ	族		
エ	フ	ラ	イ	ム	族
ル	ベ	ン	族		
ユ	ダ	族			

『君たる者』の領		領の人のレ		『君たる者』の領	
		神			
		殿			
祭司領		□		市領	
市領		市街		市領	
ベン		ヂ		ヤ	
シ		メ		オ	
イ		ツ		サ	
ゼ		ブ		ル	
ガ		ド		族	

の第一の條件はヤーエが
穢れたるものより隔離さ
れ給ふことである。

(一) さればヤーエの
神殿はユダの山に立てら
れ、王の家、王の墓より
も隔離され、特に神殿の

中なる至聖所は祭司以外何ものも近づくを得ざるやうに造られる。そして神殿の外廓
には祭司の住居があり、又『君たる者』の所領がある。エルサレムの街は神殿の南方に
置かれる。そして、これを中心としてヘブル十二族の領地が定められるのであるが、
しかも神殿に最も近い領地を與へらるゝのは、ユダ族とベンヂヤミン族、即ちヤーエに

ムを求める實際家であつた。これは彼の天性に由るのかも知れない、或は又實際的なバビロン人から受けた感化に由るのかも知れない。彼が幻に見たる復興の聖都が規條正しい形態を爲してゐること、神殿の下より出で来る生命の河などが、如何にもバビロンに於ける都市計畫、及び神殿造營、又は運河の水清きそれに似たることなどより考へ來る時は、バビロンの感化はエゼキエルの復興計畫に尠なからぬ影響を與へたものであることが窺はれる。それとともに、彼の祭司的教養は、再び強い勢力を以て彼の復興觀に色付けしてゐることが認められる。

エゼキエルに於ては、俘囚を経たるユダの民は『聖き民』であり、『祭司たる國民』である。故に聖きにふさはしい制度と組織とを持たねばならない。四十章から四十八章乃ち最後の章に記されたる復興計畫は、この目的を達成する爲めのものであり、彼がこの幻を示されたのは紀元前五七三年のことであつた。天使の一人が、彼を導いて新らしきエルサレムの様を彼に示した。

復興の聖都はその名を『ヤーエ・シヤマア』(ヤーエ此處に在す)(四十八章二十五)と

スラエルの後裔とともに、新らしい國を造り上げ、其處にヤーエとの間に新らしき契約の民ができ上り、神殿は永久に彼等の中に屹立するであらう。(三十七章)

次でマゴグなる地の王ゴグが、この新らしい神の國を攻めることとなるのであるが、遂に之に勝つ能はず、全き敗北を與へられてしまふ。しかも、この勝利を與へ給ふものはヤーエ自らであつて、民はただ戦の利を收めればいいのである。このゴグこそは、前代の豫言者達が、民に向つて警戒を與へた、かの北方の敵に外ならぬのである。(三十八章——三十九章)

かくして失望の裡にある俘囚の民に、新たな希望と獎勵とが與へられた。彼等はヤーエに頼ることに由つて、偉大なることを望み得るのである。ここにエゼキエルの理想主義は、殆んど埒を知らぬまでに伸べ廣げられ、理想の國なるメシヤ王國の幻が彼の前に開展される。

(へ) 理想王國の憲章

かやうに潑刺たる理想主義を持つたエゼキエルは、同時にまた確乎としたプログラ

その民を正しく導くこと無きを攻撃したる後

『主ヤーエかく言たまふ、我みづからわが群を索して之を守らん、牧者がその散たる羊の中にあらる日にその群を守るとく、我が群を守り、之がその雲深き暗き日に散たる諸の處より之を救ひとるべし。』(三十四章十一節)

と叫んでゐる。

イスラエル人の宿敵たるエドム(セイルの子)は、ユダの滅亡を見て、我時到来りと大いに喜ぶかも知れない。しかしエドム自らが却つて破滅を與へられるのである(三十五章)。そしてエルサレムの山々は再び恢復して緑の野となり、エデンの園のその如く、そして新らしき心を與へられたる民がその地に住むに至るであらう。(三十六章)

かやうな豫言の後、エゼキエルは幻の中に死骨の活きかへるを見た。そしてその中にやがて生命を吹き返すべきユダの姿を見た。そしてヤーエの約束を聞いた。

ダビデより出でたる王の下に、ユダの子孫は嘗て紀元前七二一年に滅ばされたるイ

『清き水を汝等にそゞぎ、汝等を清くならしめ、汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝らを清むべし、我新らしき心を汝等に賜ひ、新らしき靈魂を汝らの衷に賦け、汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝らに與へ、我靈を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾律法を守りて之を行はしむべし』(三十六章二十六——二十七)

エゼキエルが嘗てなしたる滅亡の豫言が、事實を以てその眞實なることを裏書されたこと、及び彼が今轉じて、まことに嬉しき救ひの音信を、悲觀のドン底にある民に傳へたことは、彼をして、一躍民の人氣者たるに至らしめた。

『汝の民の人々、垣の下、家の門にて汝の事を論じ、互に語りあひ、各その兄弟に言ふ、いざわれら如何なる言のヤーエより出るかを聽んと……彼等には汝悦ばしき歌、美しき聲美く奏る者のごとし、彼ら汝の言を聞ん』(三十三章三十一——三十二)』

といつた狀況であつた。

(ホ) ユダヤ恢復の希望

かうした局面の轉換は、やがてエゼキエルの職分にも變化を與へた。『守望者』であつた彼は『牧者』となつたのである。第三十四章に於て彼は民の牧者乃ち指導者達が

といふのである。

これに對して、エゼキエルは從來とは全く相反した態度を取ることとなつた。彼に於ては、最早ユダに對する懲戒は充分であるのである。國と神殿とが全く失はれたとなつては、民をしてヤーエに叛かしむべき材料はない。今は民の罪を責むるよりも、彼等の裡に希望を吹き込まねばならぬ。そして彼等を神の民としてふさはしい新らしい民に造り上げなくてはならぬ。彼はここに方向を轉じて、神の赦しの福音を傳へることとなつた。

『主ヤーエ言たまふ、我は活く、我惡人の死るを悦ばず、惡人のその途を離れて生くるを悦ぶなり、汝ら翻り、翻りてその惡き道を離れよ、イスラエルの家よ、汝等なんぞ死ぬべけんや』(三十三章十一)

かくして彼等はその罪を洗はれて『新らしき心』を與へられ、罪を思ひ出づることありとも、それは彼等をして、單なる恐怖に襲はれしめるものではなく、却つて、改めてヤーエに忠誠ならんとする心を盛んならしむるものである。

て呪の言が發せられる。これ等の諸章に於けるこれ等各國民の描寫は極めて巧妙であつて、讀むものをして、これ等古代民の活動をさながらに目睹するの思ひあらしめる。しかも、かくまでにユダの敵國を呪ひ、その罪惡を責めながら、バビロンに對しては何等の攻撃が爲されず、却つてネブカデザルに對しては、可成りの好意が表明されてゐる。バビロン人が第一回の俘囚に對して多大の好意を寄せてゐたことも、その理由の一であらう。或は又、エゼキエルが他の方面に於ても示してゐる如才なさが、ここにも又その一面を現はしてゐるのだと見ることも出來やう。

(三) 第二俘囚以後に於けるエゼキエル

紀元前五八五年の正月、エルサレムからバビロンに來つた一人の逃亡者は、首都が全く廢墟と化したことを告げた。ここに民は始めて豫言者の語の眞實なるを悟るとともに、その罪に對する恐怖は彼等を絶望の底に逐ひ遣つた。

『我らの愆と罪は我らの身の上にあり。我儕はその中にありて消失せん。争でか生きることを得ん』(三十三章十)

ず、只その義により己が生命を救ふことを得るのみ(十三章——十五章)

(四) 次でユダの罪とサマリヤの罪とに對する激しい攻撃があり、只悔改むることによつてのみ根本的な絶滅を免がるべしとの警告が發せられた後(十六章十七章)、第十八章に於て、個人宗教の眞隨が宣明され、エレミヤの敎説が更に繰り返へされてゐる。そして十九章——二十四章に於ては、更に滅亡に關する豫言が與へられ、又種々なる比喩を以てしての敎説が與へられる。

かくして『守護者』としての彼の警告も空しく、五八八年の正月、エルサレム最後の攻圍は始まつた。この年エゼキエル自らにも家庭的悲劇が襲來し、彼の『目の善愛、心の望』であつた彼の妻が死んだ。しかも彼は亡妻の爲めに嘆きの營みをするこゝから神命によつて禁ぜられた。その體驗を以て民への表徴的敎訓を與へんがためであるエレミヤと同じやうに、エゼキエルも又涙を以てその使命に盡さねばならなかつた。

(五) 二十五章より三十二章までは、ユダの周圍の國々に對する豫言である。アンモン、モアブ、エドム、ペリシテ、フエニシヤ(ツロ及びシドン)及びエデブトに對し

して、國民の滅亡を豫言した（第五章）、そして更めて明確なる言辭を以てエルサレムの破滅を説いた（六——七章）。

（二）次で彼は幻の中に（かく解するを正しいとされてゐる）エルサレムに赴き、その神殿に於てすら、多くの迷信と偶像禮拜の行はれつつある様を見る（八章）。そして、天使達の來つて是等惡行を爲せるものを滅ぼす様を見、そしてヤーエの榮光の愈々輝く様を見た。（九章——十章）

（三）かくしてヤーエの榮光はエルサレムを去り（十一章十二章）その没落は愈々明確となる。

かうした警告に對して、所謂平安主義の豫言者達、並びに一種の迷信を用ひて民を惑はしつゝあつた女豫言者達、及び民の中なる長老達は、一齊にエゼキエルに反對し、又その過激なる言辭を嘲笑したので、彼はこの輩に對して恐ろしい呪ひを發した。そして左の如き、后世有名となつた語を繰り返して滅亡の日の恐ろしさを豫言した。

『主ヤーエいふ。我は活く、ノア、ダニエル、ヨブそこに在るとき、その子女を救ふことを得

口に甘きこと密のごとくなりき』(二章九——三章三)

『人の子』といふはエゼキエルに於て特に著しい語であつて、神の榮光に對して、人の如何に卑きかを示す語である。この意味に於てエゼキエルの召命はイザヤの所謂『けがれたる唇の民』なる語が示すのと同じい内容を持つてゐる。(一章——三章)

(ハ) エゼキエルに對する反對運動

エゼキエルが第一に宣布しなくてはならなかつたのは、エルサレム滅亡の免かるべからざることであつた。しかも彼の豫言は幾多の表徴的、行爲と幻を見ることに由つて與へられてゐるのであつて、彼に於ても又、豫言者の特質なる恍惚狀態の存したことは確かである。

(一) 彼は瓦の一片を取りて之にエルサレムの邑を畫き、小兒のするやうに城壘をその周圍に築き、之に攻撃の陣を備へ、以て城の陷落を教示し、次で左側のみに臥すことを三百九十日續けて、ユダの罪の表徴とした(四章)。又銳利なる刃を以て頭と頷を剃り、その毛を三分し、その一分を焼き、一分を刃にて撃ち、三分の一を風に散ら

び教育が祭司のそれであつただけ、深い印象をそれから受けたもののやうである。

従つて、彼はイザヤと同じやうに、ヤーエ自らの顯現を見たのではあつたが、しかも之に事ふるものはセラピムではなく、四つの生物であつて、その形は犢牛、獅子、鷲の合形物の如きものであり、しかもこれ等の生物の周圍には不思議なる輪が置かれてあつた。

(二) 更に又、バビロン人は書物の民であつた。ユダヤ人の間に史書の編纂などが盛んになり、やがては彼等が『聖書』を中心とする民にまでなつたのは、俘囚時代に於けるバビロンの影響に由るものであるとされてゐる。現にエゼキエル自らが『著作的豫言者』となつたのも、さうした理由によつてのことである。

かうした感化の結果として、エゼキエルの召命に於ては、イザヤに與へられた熱灰の代りに、一卷の書物があつたのである。

『時に我見るに吾方に伸たる手ありて、その中に卷物あり……我にいひ給ひけるは、人の子よわが汝にあたふる此卷物をもて腹をやしなへ、腸にみたせと、我すなはち之をくらふに、其わが

(二) 『平安あらざるに平安あり』といふ豫言者の活動があつた(十三章十、十六)
(三) 信仰と禍福とを交換條件的に信じてゐた民等は、ヤーエの政治は不義なりと呼稱する態度を取つてゐた。

『ヤーエは我等を見ず、ヤーエこの地を棄てたり』(八章十二)

と稱するものが多數であり、ヤーエ信ずるに足らずとしたる結果は、相率ひて偶像禮拜に走り(八章七——十四)又他の神々に事へた(六章四——六、八章十六其他)凡てエレミヤの章に於て説いた悪行が横行したのである。

エゼキエルはかうした状態に對して警告を與ふべき『守望者』(三章十七)として、ヤーエよりの召命を受けることになつた。そして、その召命の叙寫は、如何にバビロンに於ける生活が、彼の思想の上に既に著しい影響を與へたかを示してゐる。

(一) バビロンに於けるマルドクの神殿は、特にネブカデレザル王の努力に由つてその壯麗を加へてゐた。そしてその裝飾として用ひらるるものは多く動物及び鳥類であつた。かうした神殿に於ける盛大なる祭祀を目撃したるエゼキエルは、その血統及

も民の従ふところとならず、紀元前五九七年に於ける第一回の俘囚が來たのであるがその時、バビロンに伴はれ行いた祭司達の中に、我がエゼキエルも含まれてゐたのである。

(ロ) エルサレム陷落以前に於けるエゼキエルの活動

かくてユダヤよりの移民は、首都に近いケバル運河の邊に一劃の土地を與へられ、そこに自らの宗教を保持し、自らの長老を立てて、一種の自治を許されてゐた。その間に於ける宗教上の諸問題に就ては、既に前章エレミヤの條下に説いたのであるが、同じ問題に直面したるエゼキエルは、エルサレムを離れ、他國民の間に住めるものとして、異つた立場より之に考察を加へたのであつた。彼が豫言者としての召命を受けたのは俘囚の第五年(一章二)即ち紀元前五九三年七月のことであつた。

(一) ユダの民の間には如何にかして獨立を計らんと希望があり、俘囚の人々にもその志が漸く強められ、周圍に於ける反バビロン同盟と相呼應して事を舉げんとする機運が強く動いてゐた。

(一) その一は申命記法の發布に由つて、地方にある諸神社が廢止され、それ等諸神社の祭司であつたレビ人が、エルサレム神殿に集められ、ザドク族の裔なる祭司達と共にされたことである。この事實は一方から曰へばエルサレムの祭司達に特殊の地位を與へ、その意味に於て彼等に利益を與へたことになるのではあるが、しかし從來專擅されてゐた自分達の事業に他の者共が手出しをするといふことは、エルサレムの祭司達には可成り不快なことであつたらしく、その爲め幾多の論争が起つたことと想像される。かうした間に於てエゼキエルが受けた印象は、後年彼をしてイスラエルの將來を描くに當り、レビ人に對する強い反感を示さしめてゐる(四十四章十——十四)

(二) 今一つはエレミヤの感化である。同じく祭司の出であつたエレミヤが、豫言者として爲したる幾多の教説は、若きエゼキエルに多大の感化を與へたもののやうであつて、エレミヤの中心思想たる、個人宗教と心の宗教の問題は、殆んど語を同じくしてエゼキエルの中に反覆されてゐる(十二章十九以下、十八章一以下を見よ)。

しかし、申命記法の問題もヨシア王の死とともにその勢力を失ひ、エレミヤの熱心

それ等の語が他の人々に由つて書き残されたるものであつた。然るにエレミヤに於て、始めて一種の著作が始まり、彼は書記バルクに命じて己が語を筆記せしめたのであつたことは既に説いた。

この著作者としての事業を更に進展せしめたものが、以下に於て説かうとするエゼキエルの事業である。彼の説教が始めから成文となつてゐたものであると信ずる必要は無いのであるが、彼はその説教を述べたる後、自ら筆を取つて之を記し、又自らの説教を一の書籍として自ら編纂したもののやうである。従つて、エゼキエル書は之を他の豫言者に比すれば極めて散文的であり、又その組立も可成りに整頓し、日附に従つて之を記し編んだもののやうである。

彼が生れたのは恐らく申命記法が發布された紀元前六二一年前後であらう。彼は祭司プシの子である（一章三）と記されてゐるのであるが、プシといふはエルサレムに於ける祭司の一家であつたと思はれる。

エゼキエルの少年時代に於て、彼に著しい感化を與へたものが二つある。

に神よりの特殊なる召命と靈感との存したためであるとはいへ、彼自身が豫言者中にありて特に傑出したるものであることは、何人も之を否定するを得ないのである。

特に彼が、個人の宗教、心の宗教を高調したりしことは、國家を失ひ、神殿を失つた後に於けるユダヤ人をして、猶且その宗教生活を可能ならしむべき機縁となつたのであり、そして俘囚によりて、彼等の宗教が漸く世界的宗教にまで進展し、遂に全人類への賜として傳へらるるに至つたのに見れば、我等がエレミヤに負ふところのもの極めて多大なるものあるを思はざるを得ない。

第四章 『法』の豫言者エゼキエル

著者としての豫言者——エルサレム陥落以前に於けるエゼキエルの活動——エゼキエルに對する反對運動——第二俘囚以後に於けるエゼキエル——ユダヤ恢復の希望——理想王國の憲章——豫言史上に於けるエゼキエルの位置——

(イ) 著者としての豫言者

豫言者の職分は、神馮りの状態に於て、民への神言を傳へるだけであり、豫言書は

にエレミヤはヤーエと民との關係が全く斷絶せることを宣言し、民に警告を與へたのであつたが、如何にしても彼等の聽くところとならなかつた。そして傳説によれば、彼はユダヤ人のために石を以て殺されたといふのである。

かくてこの偉大なる殉教者の一生は終つた。その天資に於て寧ろ優雅であつた彼がかくまでの苦難に直面して、かくまでの勇氣を示したことは、我等の驚嘆と崇敬とを惹起せずしては措かない。特に我等の記憶すべきは、彼には來世に關する希望、後の世に於る應報といふが如き觀念の全く存在しなかつたことである。ユダヤ人の間に於ける來世に關する思想は、ギリシア思想の洗禮を受けたる後に於て始めて完全なる發達を遂げたるものであつて、エレミヤの當時に於ては、死とは單に神の世より離れてシオール（陰府）へ赴くことであつたのである。そしてシオールに於ける存在とは恰も影の如き存在であつて、何人もこれを欲するものは無かつた。されば神よりの應報といふも、善惡共に悉くこの世に於て計算濟となるものと考へられてゐたのである。かやうな思想を抱懷しながら、しかも彼が如くに最後まで奮戦を爲し得たのは、一

ならぬのであつて、キリストその付^けされ給ふ夜、酒杯をとり『この酒杯は我が血に由れる新らしき契約なり』（コリント前書十一章二十四）と仰せ給ひし日に全く備はつたのである。

（ル） エレミヤの晩年と彼の功績

總督ゲダリヤの善政によつて、エレミヤの心中にも一縷の望が萌し來り、樂觀的な敎説を爲すに至つたのであるが、ゲダリヤは在位幾ばくならずして暗殺者の手に斃れ、エレミヤの希望も水泡に歸するに至つた。

總督の死に由つて恐慌に襲はれたユダの民は、直ちに四散せんとしたので、エレミヤは極力之を留めたのであるが、彼等はこの忠言に耳を藉さうとせず、蒼皇としてエジプトに遁れ、ナイル河口に近きタバネスに彼等の殖民地を造つた。エレミヤも又余儀なく彼等に加はつたのであつた。

かくして全く望を失つたユダの民等は、再び偶像禮拜に歸し、特にその女達の間には天后の禮拜が旺盛を極め、之を抑制すべき立場にあつた男子達も之を看過した。ここ

を始めとし、多くの豫言者達はその傳播と宣布とに努力したのであつた。しかもそれは單に書物に書かれたる『契約』である。それがためにそれは既にヨシャ王の治世中にすらその弱點を示したのであり、エホヤキム以後に於て愈々その無力を曝露した。されば神と民との間に於ける眞實なる契約は、書物に書かれたるものを以てして充分でない、それは人々の心、各自の良心に銘記されなくてはならぬ。エレミヤはかうした結論に到達したのである。

ヤーエ言ひ給ふ、みよ、我イスラエルの家とユダの家とに新らしき契約を立つる日來らん。この契約は我彼らの先祖の手をとりてエジプトの地より之を導き出せし日に立し所の如きものに非らず。我彼等を契りたれども、彼等はその我契約を破れりとヤーエ言ひ給ふ。然どかの日の後に我イスラエルの上に立つる所の契約は此なり。即ち、われ我律法を彼等の裏に書き、その心の上に録さん。我は彼等の神となり、彼等は我民となるべし（三十一章三十一—三十三）

かくしてエレミヤは神の契約を記すべき材料として、書卷にあらざるものを見出した。しかしながら、T・H・ロビンソンが指摘してゐるやうに、彼に於て缺けてゐたのは、新らしいインキを見出すことであつた。そしてそのインキは即ち最も尊き『血』に外

ヤーエに忠實なる豫言者に對して、日毎に迫害を加ふる民の中に住み來つたエレミヤは、遂に重大なる眞理の發見に到達したのである。

その時、彼等は父が酸き葡萄を食ひしによりて兒子の齒浮くと再びいはさるべし。人はおの
おの自己の惡によりて死ん。凡そ酸き葡萄をくらふ人はその齒浮く(三十一章二十九、三十)

遺傳と環境とが人の道德性に影響感化を與へることの多いものであることはいふまでも無い。しかしながら、その究極に於て、人の罪は、罪人自身と神との問題である個人的なる責任である。しかもこのことはエレミヤに由つて始めて明確となり。次で『詩篇』に於ける個人宗教となり。遂に新約の宗教にまで承け繼がれたのである。そしてキリスト敎の腐敗が起り來る度毎に、之を潔むるものは、——ルツター以下の宗教改革に見らるるやうに——この個人宗教の復興であつた。

心の宗教 個人的宗教觀に次でエレミヤの特徴を成すものは『新しき契約』なる語である。『契約』なる語はヘブル人に取つては『宗教』と同義の語であつた。されば申命記は一の契約であつたが、それが宗教そのものの體現であるの故を以て、エレミヤ

エレミヤはエルサレム落城の日まで獄に居たが、ネブカドレザルは彼を釋放し、又可成りの優遇を與へた。特に總督ゲダリヤはエレミヤの親友であつたのであれば、此處に漸くエレミヤに取つての得意時代が出現したといひ得るのである。

召命以來四十年、彼は日毎に殉教者としての生涯を経験した。そして今彼は漸く、己が豫言の成就を見たのであつた。しかしながら、その豫言の成就といふことは、彼の熱愛する國の滅亡することであつた。彼の得意は乃ち彼の失意であつたのである。そして彼はこの深刻なる體驗を通して、永遠なるべき眞理を學んだのであつた。その一は『宗教の個人性』であり、その二は『心の宗教』である。

宗教の個人性 既にホセアの條下に説いたやうに、神がその對象とし給ふものは『民族』であつた。即ち、アブラハムに與へられた祝福は、全イスラエル民に對する祝福であり、アカンの罪（ヨシユア記第七章を見よ）は全イスラエルにその災禍を及ぼすのである。されば民の一人が犯せる罪は他の人々にも同斷なる罪科が及ぶのであつて、そこにホセアの悩みがあつたのであり、又エレミヤの悩みがあつた。しかし、

その説に賛したもののやうであるが、同時に民の反感を怖れ、エレミヤに向つてこの會見の内容を他に告ぐるなと命じた。かくしてエレミヤの熱誠は遂に容れられず、三年に亘る守備兵の果敢も遂に効なくして、紀元前五百八十六年の春、エルサレムは落城の悲運を見た。ゼデキヤ王は身を以て逃れやうとしたが効なく、その子等は眼前にて殺され、自らは眼をくり出され、鎖につながれてバビロンに曳き行かれた。エルサレムの城壁は全く破壊され、宮殿も神殿も人家も焚かれ、二萬五千の民はバビロンに移された。かくしてミカが豫言したやうに、エルサレムは累々たる廢墟と化し、殘留せる無智の下層民が辛じてそこを耕作しつゝある有様となつた。

(ヌ) 個人宗教と『心』の宗教

ネブカドレザル王は、ユダをバビロンの殖民地とすることに定め、その總督としてユダの貴族出身なるゲダリヤを任命した。彼は優秀なる指導者であつて、エルサレムに近いミツバに駐在して、離散したる民を招き歸し、ここにユダ復興の曙光を與へたのであつた。

さて、井戸に投げ入れられたエレミヤの運命は如何になつたのであらうか。これに關する聖書の記事は極めて活寫的である。

王の室の寺人エテオピア人、エベデメレク（黑人である）彼等がエレミヤを筭おなに投げ入れしを聞けり、時に王ベニヤミンの門に坐いへしたれば、エベデメレク王の室より出で行きて王に言ひけるは『王わが君よ、かの人々が豫言者エレミヤに行ひし事は皆好からず、彼等これを筭に投げ入れたり、邑の中に食物なければ、彼はその居るところに餓死せん。王、エテオピア人、エベデメレクに命じて言ひけるは、汝こゝより三十人を携へゆきて豫言者エレミヤをその死ざる先に筭より曳あげよと。エベデメレク即ちその人々を携へて王の室の庫の下にいり、其處より、破れたる舊き衣の布片をとり、索なはをもてこれを筭にをるエレミヤの所につり下せり、而してエテオピア人エベデメレク、エレミヤに告て、汝この破れたる舊き衣の布片きんを汝の腋の下にはさみて索に當てよと云ひければ、エレミヤ然しかなせり。彼等すなはち索をもてエレミヤを筭より曳きあげたり。エレミヤは獄の庭にをる（三十八章七——十三）

ゼデキヤ王の朝令幕改は、この記事を讀む我等をして啞然たらしむるものがある。かうした間にもバビロン軍の攻撃は愈々急を加へて來る。思ひ餘つたゼデキヤ王は又もエレミヤの忠告を求めた。エレミヤはその平和開城説を飽までも主張する。王は

滅亡の豫言者であり、皮想的に見て悲觀論の主張者でありし所以である。

(リ) エレミヤの入獄とエルサレムの滅亡

エレミヤが豫言した通り、エジプトの援助は一時的のものであつて、ネブカドレザルは間もなく軍を返し、再びエルサレムを圍んだ。城中一時に沸騰せる中にあつてエレミヤは猶も開城と平和とを勸告する。

『この邑に留^まるものは劍と饑饉と疫病に死^しべし、然ど出でてカルデヤ人に降る者は生きん。乃ちその生命をおのれの掠^{ぶんど}取物となして生くべし。ヤーエかく言ひ給ふ、この邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん、彼之を取るべし』と(三十八章二、三)

城塞の防禦に當つてゐる人々は、かうした軟論の鼓吹者に對して、最早や猶豫を與へることができない。彼等は王に請ふてエレミヤを獄中の井戸に投げ入れた。エレミヤは井戸の中なる泥の中に埋まつてゐる。王自らエレミヤを憎んだのでない。彼は只他の人々の勸告に従ふのみであつて、自ら確乎とした意志を有たなかつたのである。其處に彼の弱點があり、この弱點の故に彼は己が身を滅ぼし、又國を亡ぼしたのである。

彼等が如何に激勵しても、士氣の沮喪を免がれ無いからである。その折しもエレミヤは、郷里アナトテにある親族の土地に關して或る協定を爲すの必要があり、その爲めにベニヤミンの門より城外に出でんとした。門衛の兵士達はこれを見て、彼はバビロン人に内應し、彼等の軍に投せんとするものなりとして之を捕へ、エレミヤの辯明に耳を藉さずして遂に之を獄に投じた。エレミヤは王に上申して、寛恕を請ふたので、籠城中食物のある限り、パンの支給を受けることとなつたが、獄を出づることは許されなかつた(三十七章十一——二十一)。

この土地の問題は、後にアナトテなる親族の一人がエレミヤを獄中に訪ひ、ここに買入の協定が成立したが、この時エレミヤは、彼が國運の將來に關して如何に樂觀しつつあるかを舉證した。即ち彼はその地券に證印を求め、その封印せるものと、されざるものとの二通を得、バルクに命じて之を瓶中に貯藏せしめたのである。エレミヤは眞實なる愛國者であつた。ヤーエとユダとの關係に關する彼の信念は聊かも動搖しない。然しながらユダの罪は之を除却する爲めに一大清潔法を必要とする。これ即ち、彼が

しながら、民は異常の決心と熱心とを以てバビロン軍に對せんとし、城壁の固めは堅固に守備軍の士氣は旺盛である、王は遂に民意に従つて政擊軍に反抗するの膽を固めた。そして、更にヤーエがユダの軍勢に福を降し給ふべきを確實にしようとて、申命記十五章十二——十五の律法に従ひ、ヘブル人にしてヘブルの奴隸たるものの總てを解放した(三十四章八)。このことは極めて靈驗あらたかであつて、エヂプト軍の應援が國境に迫り來つたのに餘儀なくされて、ネブカドレザルは一旦エルサレムの包圍を解いてエヂプトと向つた。エルサレム城中の歡喜はその頂點に達したのである。

しかし、エレミヤは頑としてその主張を枉げない。エヂプトの救助は一時的のものに過ぎない、最上の策はバビロンに降ることであると強調する。

イスラエルの神ヤーエかくいふ、汝らを遣して我に求めしユダの王にかくいへ、汝らを救はんとて出きたりしパロ(エヂプト王)の軍勢は、おのれの地エヂプトへ歸らん。カルデヤ人再び來りてこの邑を攻て戦ひ、これを取り火をもて焚べし(三十七章七、八)

かうしたエレミヤの平和主義は、國內の指導者達を憤慨せしめないでは置かない。

である。しかし、再び勇を鼓したエレミヤはハナニヤに向つて

『汝木の轆くわきを擡くたきたれども、之に代て鐵の轆くわきを作れり』(二十八章十三)

と宣言し且彼を呪咀したために、同じ年の七月遂にハナニヤの死を見た。

エレミヤの苦難はそれ許りではない。彼が好意を以てバビロンにある俘囚の人々に送つた手紙は、却つて人々の怒を買ひ、彼等の主領なるシヤマはゼデキヤ王に書を送つて、エレミヤ斥責のことを請ふたのであつた。ここにエレミヤは激怒してシヤマとその一家とを呪咀したのである(二十九章二十四——三十二)。

遂に最後の日が來た。エヂプト王ホブラの陰謀に乗せられた親エヂプト派は、遂にゼデキヤ王をしてバビロンに叛かしめた、紀元前五百八十九年のことである。ネブカドレザルは直ちに大軍を率ひて來襲し、翌年一月エルサレムの包圍を固めたのであつた。

(チ) エレミヤの愛國心

エレミヤは王に忠告して、直ちにバビロン軍に降ることの利益なるを強調した。然

嫁よめを娶めとり、汝きみらの女むすめを嫁よめがしめ、彼等かれらに子女うまを生うめよ。此は汝等きみらかしこに滅ほろびて増ふえんがためなり、我われ汝きみらを擄さら移うつさめしところの邑まちの安やすを求め、これが爲ためにヤーエに祈いのれ、その邑まちの安やすによりて、汝きみらもまた安やすを得ればなり（二十九章五——七）

（ト）ゼデキヤ王バビロンに叛く

然るに、ユダに残れる者の中にも、バビロンに赴けるものの中にもバビロンに叛いて獨立を謀らうとの機運が次第に動いて來た。特にエヂプトの陰謀はバレスチナ周圍の諸邦を聯合せしめ、以て反バビロンの旗を翻へさしめやうとするのであつて、ユダもそれに捲き込まれやうとするに到つた。

この危機に際して、エレミヤは再び表徴的行動に出で、索と轆とを己が首にかけ、ユダの民がこの姿にてバビロンに捕はれ行くであらうと豫言した。これに對して『泰平の豫言者』ハナニヤが起つてエレミヤに反對し、首にかけたる轆を打ち摧いた。このことに於て民の輿望は寧ろハナニヤの側にあつたもののやうであつて、『豫言者エレミヤ遂に去りぬ』（二十八章十一）とある聖書の記事は、エレミヤの失意を物語るもの

行きたる人々は、即ち神の怒に觸れたるもの、残れる彼等は神に嘉せらるるものなりとして自ら誇つたのである。

これに對してエレミヤは著しい反感を懷いたのであつて、その間の消息は、所謂『無花果の幻』に於て語られてゐる。彼は先づ『始に熟せしがごとき至佳き無花果』を示される。次で『いと惡くして食ひ得ざるほどなる惡き無花果』を示される。そして

イスラエルの神ヤーエかくいふ。我わが此處よりカルデヤ人の地に逐やりし、ユダの虜人^{とらはれびど}を、此佳き無花果のごとくに顧みて恵まん……ヤーエかくいひ給へり、我ユダの王ゼデキヤと、その牧伯等及びエルサレムの遺りて此の地にをる者を、この惡くして食はれざる惡き無花果のごとくになさん（二十四章五——八）

との語を聽いたのであつた。

エレミヤはこの俘囚の人々にイスラエル再興の望を置き、そしてその希望を達する爲めには、彼等がバビロンに定住することを得策なりと感じたのであつて、彼は俘囚の人々に書き送つて、その意を通じたのであつた。

汝ら家を建てこれに住ひ、園をつくりてその果を喰へ。妻を娶て子女をうみ、又汝らの息に

征服民族の絶滅を計るといふので無く、ただそれが再び反抗の舉に出でざる程度にその國力を弱め置くを以て足れりとした。故に彼はユダ國內の優秀者一萬人をバビロンに移すを以て満足し、囚はれたる王エコニヤの代りとして、エコニヤの叔父なるゼデキヤをエルサレムの王とした。かくしてユダの民は、舊國ユダに残れるものと、バビロンに於ける殖民との二部に分れたのである。ゼデキヤは忠實にネブカドレザルに朝貢し、平和は再びエルサレムを訪れたもののやうであつた。

しかし、内面に於ける事情は決して樂觀を許すものでなかつた。俄かに發せられたる俘囚の命に由つて、國內の優秀者はバビロンへ移り行かねばならなかつた。それのために、その家財は二束三文に賣り飛ばされ、賣却の時期なきものはその儘に放棄された。そして此間にあつて漁夫の利を占めたるものは、残されたる劣等者達である。かくして、何處にもあるやうに、災禍によつて利したる成金の徒が輩出し、國內の事態を左右すべき力が彼等によつて握られることとなつた。それに加へて、當時の思想に従へば、不幸は神の怒を示すものであるとされてゐたため、此等殘留の徒輩は、囚はれ

いふのである。そして、

ヤーエかくいふ。我かくの如く、ユダの驕傲と、エルサレムの大なる驕傲をやぶらん、この惡き民はわが言を聽ことを拒み、己の心の剛腹なるに従ひて行み、且他の神に従ひて之に仕へ、之を拜す、彼等は此帶の用ふるに堪えざる如くなるべし（十三章九——十）

といふのであつた。

第二は陶人より瓶を買ひ、之を民の長老達の前にて壞すことであつた。そして

萬軍のヤーエかく言ひ給ふ、一回毀てば復全うすること能はざる陶人の器を毀が如く、われ此民とこの邑を毀たん、（十九章十一）

といふのであつた。

しかも、エホヤキムは、エレミヤの忠言に聽かず、遂にエレミヤの言をして悲しい實現を爲さしむる至つた。かくして五九七年に於ける第一回の俘囚が襲ひ來つたのである。

（へ） 俘囚に對するエレミヤの觀察

バビロン王ネブカデレザルの政策は、アツシリヤ王サルゴンのそれとは趣を異にし

然ど、ヤーエの語我心ことばにありて、火のわが骨の中に閉こもりて燃るがごとくなれば、忍耐しのびにつかれて堪難し……されどヤーエは強き勇士の如くにして我と偕ともに在す、故に我を攻る者は驢ろきて勝ことをえず（二十章九——十一）

この時に當つて、彼は一の幻まぼろしを興へられた、陶人が轆轤ろくろを回しながら陶器を作りつゝあるが、しかもその陶器に傷みあれば、直ちに他の器に作り代へる有様を見たのがそれであつた。そのことは、豫言が條件的なものであつて、神は事態の變化に應じてその手段を變へ給ふのであり、民が警告に従ふことあれば、降るを約せられた災禍も遂に降らずして止むことあるを教へたものであつた。（第十八章）

このことはエレミヤに新しい勇氣を與へる機縁となつた。此處に彼は、嘗てイザヤが用ひたやうな煽情センセイショナル的な宣傳方法、即ち表徵シムボリック的行動を以て、民に警告を與へることとなつた。

その第一は、麻の帶を買ひ、これをユフラテ河の邊ほとりなる磐穴はなに隠し置き、可成りの月日を経たる後に之を取り出せば、それは既に朽ちて用ふべからざるに至つてゐると

彼は、民の爲めに活動して、しかも民の迫害を受け來つた。そして、彼の神は、その命を給ふところに従つて爲す豫言を、何日實際とならしめ給ふのか、全く見當のつかぬ有様である。如何に頼り無いヤーエであることか。そればかりでは無い。當時の信仰に由れば——そして、それは又エレミヤ自身の信仰でもあつた——神は豫言者に『偽の靈』を送つて自らの破滅を招來せしめ給ふことがあるとされてゐた。エレミヤは果して神より眞實の靈を受けて居るのであらうか。今まで忍び來つた一切の迫害は皆悉く無益のものであつたのではあるまいか。

ヤーエよ汝われを勧め給ひて、我その勸に従へり、汝我を捉へ、我に勝ち給へり。われ日々人に笑となり、人皆我を嘲りぬ。われ語り呼はることに暴逆惡虐の事をいふ。ヤーエの言日々にわが身の恥辱となり、嘲弄となるなり。是をもて我重ねてヤーエの事を宜す、又その名をもて語らじといへり(二十章七——九)

しかも『もし福音を宣傳へずば、我は禍害なるかな』(コリント前書九章十六)といつたパウロと同じやうに、神命は何處までも急であり、又神の與へ給ふ援助の保證は益々強い。

王小刀をもてその巻物を切割き、爐の火に投いれて、之を盡く爐の火に焚り（三十六章二十二、二十三）

王に取つてこの種の言説は、政治的隱謀の一としか認められなかつたのである。

王はエレミヤの逮捕を命じたが、遂にその隠れ家を見出し得なかつた。エレミヤは更めてバルクに命じ、王に焚かれたると同じ豫言を筆記せしめたのであつて、その筆記こそは、後年エレミヤ記の編集に際して、その中核を爲したものであると思はれる。エレミヤ記の中にある名句として、後世人口に膾炙されてゐるものの多くも、亦この當時に於て發せられたものだと思はれるのである。

○エテオピア人その膚をかへうるか、豹その斑駁を變へうるか。若之を爲しえは、惡に慣れたる汝らも善をなし得べし（十三章二十三）

○收穫の時は過ぎ、夏もはや畢りぬ、されど我等は救はれず……ギレアデに乳香あるにあらずや、彼處に醫者あるにあらずや、いかにして我民の女は醫されざるや（八章二十一—二十二）

（ホ） エレミヤの疑惑

かうした間に於て、エレミヤの心中には強い疑惑が起つて來た。召命を受けて二十年

暫くの間彼は公生涯を避けて、隠遁の生活を送つてゐたもののやうである。(二十六章を看よ)

(ニ) 隠遁時代に於けるエレミヤ

エレミヤはこの隠遁時代に於て、豫言史上に於ける劃期的な事業に従事した。從來豫言者の敎説といふは、豫言者達がその神馮^{かみかか}りの状態に於て發した語が、他のものによつて保存されたのであり、豫言者自らが著述を試みるといふが如きことはなかつた。然るにエレミヤはこの時、書記バルクに命じて、己が述ぶるところを筆記せしめた。そしてバルクはエレミヤの指示に従ひ、それを神殿に群集せる人々に讀み聽かせたのであつた。

この豫言を聽いた國內の有力者達は、その眞理なるを認むるとともに、事極めて重大なりとして、エホヤキム王にそれを讀まれんことを勧めた。王は乃ち秘書エホデに命じ、バルクの手よりその書を持ち來らしめた。

時は九月にして王、冬の家^{ふゆいへ}に座せり、其前に火の燃る爐あり、エホデ^{みどら}三枚か四枚^{よひら}を讀めり時、

北方イスラエルに於けるシロの神殿の如く、やがて壊滅の運命を見るであらう。エレミヤは特に人々の群集する祭の日、神殿の門に立つて、この怖ろしい宣告を爲したのであつた。

汝らは是はヤーエの殿なり、ヤーエの殿なりといふ偽の言をたのむ勿れ、……みよ汝らは偽の言を頼む、汝等は盗み殺し、姦淫し、妄りて誓ひ、バアルに香を焚き、汝等が知らざる他の神に従ふなれど、我名をもて稱へらるるこの室にきたりて、我前に立ち、我等はこれらの憎むべきことを行ふとも救はるるなりといふは如何にぞや、わが名をもて稱へらるる此室は汝らの目には盗賊の巢と見ゆるや——この故に我シロになせし如く我名をもて稱へらるる此室になさんとす。即ち汝等が頼むところ、我なんぢらの先祖に與へし、此處になすべし。またわれ汝等の凡ての兄弟すなはちエフライムのすべての裔を棄しごとく、我前より汝らをも棄つべし」(七章四——十四)(二十六章一——七)

この豫言は特に宗教家達の反感を買ひ、彼等は民を煽動して、この種の豫言を爲すものを迫害せしめた。それが爲めにエレミヤと同様なる運動に携はつてゐたウリヤと名づくる豫言者は、遂に彼等のために殺さるるに至つたが、エレミヤに對しては、ミカの例を引きて之を擁護するものがあつたために、彼は辛うじて死を免かれたが、その後

(ハ) エホキヤムの登位とエレミヤ

エホヤキムの登位とともにエレミヤの第二期活動が始まる。ヨシヤ王に對して特殊の尊敬を感じてゐたエレミヤは、反動的なるエホヤキムに對して當初より反感を有つてゐた。

不義をもて其室をつくり、不法をもて其樓たかどのを造り、其隣人を傭て、何をも與へず、其價を拂はざる者は禍なるかな。彼いふ『我己の爲に廣厦ひろきいへと涼しき樓たかどのをつくり、又己のために窓を造り、檜をもて之を蔽ひ赤く之を塗ぬふと、汝檜を争ひ用ふるによりて王たるを得るか、汝の父は食飲せざりしや、公務たじしきと公道みちのやうを行ひて福を得ざりしや、彼は貧者と患難者の訟を理たてして祥をえたり、かく爲すは我を識しことにあらずやとヤーエ曰ひ給ふ。然ど汝の目と心は惟貧ただいひるばかりをなさんとし、無辜つみなきものの血を流さんとし、慮遠しるほと暴逆をなさんとするのみ。故にヤーエ、ユダの王ヨシヤの子エホヤキムにつきてかく曰たまふ……『彼は驢馬を埋るがごとく埋められん、即ち曳れてエルサレムの門の外に投棄らるべし』(二十二章十三—十九)。

いな、その罪のために滅びるのは、王のみではない。セナケリブの侵略を免がれて以來、神の都として、又難攻不落の堅城として恃まれつつあるエルサレムも、その罪のために、遂に没落の運命を與へられるのであり、國民的信仰の中核たるその神殿さへも

レミヤは王の主張に賛成する宣傳者であるために、彼等は何の手出しをも爲し得ないだけのことであつた。その間にヨシヤ王の變死があつた。今は誰憚らずしてエレミヤを迫害することが出来る。ここにアナトテの人々はエレミヤの生命を絶たんと計畫を樹てたのであつて（十一章十九——二十三）エレミヤは遂に故郷を去り、エルサレムに住ふに至つたもののやうである。

このことはエレミヤに取つて、誠に堪え難い悩みであつた。彼は多感の人であり、自然と草木と、特にその動物を愛する性情の所有者であり、人生の吉凶哀樂の行事に多大の趣味を感じてゐた。しかも今、結婚の樂も、家庭の和樂も、社交の愉快も、悉くこれを捨てなくてはならない。（十六章一——九）

しかも、彼が豫言したスクテヤ人の侵入は實現せず、ユダに福を降すと見え、その爲めに彼が熱烈なる宣傳を試みた申命記法の成果は、英王ヨシヤの死を以て報ひられる。ここにエレミヤは、ハバククが感じたのと同様な疑惑に襲はれたのであつたが、ヤーエ自らその力を以て彼を護り給ふべしとの保證を獲た、（十二章一——五）

ユダの人々とエルサレムに住める者よ、汝等みづから割禮を行ひてヤーエに屬き、己れの心の前の皮を去れ、(四章四)

これがエレミヤの忠告であつた。

(ロ) 申命記法の發布とエレミヤ

かかる間に申命記法の發布が來た。エレミヤが望んでゐた氏の悔改めが成就されるであらう日が來た。彼は非常なる熱心を以て、國內の諸邑を遍歴し、この『契約の言』を受容すべきことを民に勧めたのであつた(第十一章を看よ、エレミヤと申命記との關係に就ては種々の異説あれども、この説を執る方が正しいやうである)

しかし、このことはエレミヤを一のデレムに陥れずしては置かなかつた。申命記法は地方にある神社を否定するものである。しかも、エレミヤの父を始めとし、その親族一統はアナトテに於ける地方神官である。申命記法によつて槍玉に擧げらるべき運命にある人々である。その申命記法を、その親族の一人なるエレミヤが宣傳するといふのであれば、彼等はエレミヤに對して強い反感を持たずには居られない。ただエ

『ユダよ汝の神は汝の邑の數に同じければなり』(二章二十八)
といつた有様であつた。

(二) 外國崇拜である。『汝ナイルの水を飲んとてエヂプトの路にあるは何故ぞ、また河の水を飲んとて、アツシリヤの路にあるは何故ぞ』(二章十八)

(三) かくしてヤーエを離れて他のものに頼ることは、既にホセヤが教へたやうに、それ自身恐るべき姦淫の罪であるとともに、國內に姦淫の風滔々たるものあるに至らしむるのである。(第三章及び五章七、八)

(四) 富者の横暴であり、判官の不正である。(五章二十六——二十九)

(五) 宗教家の腐敗である。(五章三十——三十一) 特に、かうした國家的危機に際會しながら猶も平安を唱へつつある『僞豫言者』の存在である。

かれら淺く我民の女の傷を醫し、平康からざる時に平康平康といへり(六章十四)

されば、ユダに取りて、災害を免るべき唯一の途は、悔改である。肉體上の割禮を以てヤーエとの關係を保つのみならず、その精神の根本よりヤーエに服従しなくてはならぬ。

紀元前六二六年の春——當時彼は二十歳乃至二十五歳であつたと思はれる——彼のその故里の郊外を歩みつつあつた。森には今や巴旦杏はだんきよう(シャケド)が花咲いてゐる。そして、それは彼に、ヤーエが今やその聖旨を成さんとして見守り(シヨケド)つつあり給ふことを示し(一章十一、十二)、ここに彼は豫言者としての召命を受けた。しかし彼は年齒余りに弱いために、さうした任に堪え得るや否や疑はしい(一章六)。彼は躊躇する。それに對してヤーエは常住の保護を約束し給ひ(一章七、八)又如何なる權威の前に於ても彼を『堅き城、鐵の柱、銅の牆』と爲し給ふべきを約束され、ここに彼は勇を鼓して立ち上つたのであつた。

彼に示された幻は『沸騰ふえたちたる鍋なべ』であつて、『北より此方こなたに向ふ』(一章十三)ものであつた。これはスクテヤ人の侵入を意味するものであつて、彼等はエルサレムをも襲つて之を荒すであらう。しかも、それは悉くユダの民が犯せる罪の結果である。

その罪とは即ちゼバニヤの見たるものと同一であつて、

(一) パアルパアルの禮拜である。(二章十一、十二、十三)

第三章 『心』の豫言者エレミヤ

エレミヤの召命——申命記法の發布とエレミヤ——エホヤキムの登位とエレミヤ——
——隱遁時代に於けるエレミヤ——エレミヤの疑惑——俘囚に對するエレミヤの
觀察——ゼデキヤ王バビロンに叛く——エレミヤの愛國心——エレミヤ入獄とエ
ルサレムの滅亡——個人宗教と『心』の宗教——エレミヤの晩年と彼の功績

(イ) エレミヤの召命

スクテヤ人の侵入がユダの人心を聳動しつつあつた當時、ゼバニヤの召命と前後して、豫言的使命を與へられたるものにエレミヤがある。彼の生地はエルサレム北方數哩の山地なるアナトテ、彼の生家はその地に於ける祭司の家であつた。されば、彼の召命に於て『われ汝を腹につくらざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に汝を聖め、汝を立てて萬國の豫言者となせり』(一章五)との語を聞いた事にも現はれてゐるやうに、その家系よりするも幼時の教養よりするも、彼は宗教家たるべく特に恵まれたる境地にあるものであつたといへる。

カルデヤ人はユダを征服する。しかしその中に弱點を持つてゐる。その一は高ぶら
 であつて、例へば膨れ過ぎた風船玉のやうに、やがては爆發してしまふであらう。そ
 の二は不正である。そして例へば曲つた柱が屋根を支へ得ずして頽れるやうになり終
 るであらう。しかしユダヤ人乃ち『義しき者』の中には信仰がある。それは忠誠であ
 り、又正義である。故にカルデヤ人がユダの人々を苦しめるのは一時的のことであつ
 て、ユダはその信仰に由つて生きるであらうとの答が與へられたのである。

ハバククの價値は、從來單なる民族的遺産として繼承されたのに過ぎない『信仰』
 をば、當面の事實に照して検討し、ここに驗證されたる眞理としてそれを受けたる點
 に存する。そしてこのことは又、豫言史の上に於ても重大なるものであつて、從來豫
 言者の見たる眞理は、『ヤーエ斯く曰ひ給へり』との宣言であつたが、ハバククに於て
 は先づ問題を提供し、そしてそれに對する『哲學的』検討を加ふるの風が始めて發見
 されるのである。

あらうか（一章十三——十七）

豫言者は、この問題を提出し、神の答を待つために戌樓に登る。而して、神よりの答は走る人も読み得べき明白なる文字を以て書きつけられることとなる（二章一——二）

そして、それは

視よ、彼の心は高ぶり、その中にありて直からず。

然ど、義き者はその信仰によりて活くべし（二章四）

といふのである。

これはローマ書一の十七、ガラテヤ三の十一、及びヘブル書十の三十八に引照され又、ルーテルの標語として用ひられたるものである。しかしながら、パウロに於ては律法の行爲に對する信仰を、ルーテルに於ては教會制度に由る救に對する信仰を高調するために用ひられたのであつて、ハバククに於ける最初の意味とは、聊かその趣きを異にしてゐる。

も思はれるのであつて、この豫言者の人物に就ては、之を知るべき術が無い。ただ使宣上彼をハバククと呼んで置くこととする。

彼はユダに於ける奪掠と壓迫とを見、綱紀弛み、不義横行し、惡しき者榮え、義しき者苦しみつつあるを見て、ヤーエに抗議し來つたのである。しかもその抗議は聽かれざりしとの理由を以て、彼はヤーエに不平を訴へるのである（一章二——四）

これに對して、ヤーエ自ら親しく答へ給ふ。それに由れば、ヤーエは今將にこの邪惡を正さんとして殆んど信すべからざる程に驚くべきことを爲し給ふ。それはカルデヤ人を起して、この暴惡の民を屠戮し給ふことである。

これは恐るべき民であつて恐るべきことを行ふであらうといふのである（一章五——十）

しかし、このことは更に問題を複雑化する。なる程ユダに於ける惡人達の問題は、それで解決するかも知れない。然しながら、これは異教の民を以て、神の民を苦しめしむることである。然らばユダを神の民なりとするは、何の益も無いことであるので

つたバビロン王（カルデヤ人）ネブカドレザル（聖書のネブカデネザル）とカルケミシュに戦つて大敗し、世はバビロンの勢力下に置かることとなつた。エホヤキムも又カルデヤ人の命に服し、これに朝貢を爲しつゝあつたが、遂に周圍の諸國と相結んでバビロンに叛いたため、ネブカドレザルは部下をしてエルサレムを攻めしめたが、やがて親しくその包圍軍を指揮するに至つた。この間に於てエホヤキムは歿し、その子エコニヤ（エホヤキン）が立つたが、遂に紀元前五九七年、三ヶ月の攻圍の後カルデヤ軍に降つた。當時十八歳であつたエコニヤ王は捕へられてバビロンに送られ、又エルサレムに於ける最も優秀なる市民一萬人もバビロンへ虜へ行かれたのであつた。これをユダの第一回俘囚といふ。

（ロ） ハバククの問題とその解決

かうしたユダの社會状態の中にあつて、しかもカルデルヤ人の進出が漸く顯著となり來つた當時に於て發せられた豫言が、ハバクク書に載せられたものである。ハバククと名づくる豫言者が存在したりしやは疑はしく、或はそれは編述者の名であると

したが、ネコ王は之を喜ばず、エホハアズを捕へて之をエヂプトに幽し、ヨシヤの長子エリヤキムを以て之に代へ、その名をエホヤキムと改めしめた。しかしエホヤキムは其の代償として多額の金をエヂプトへ支拂はねばならぬ（今日の金にして約五百萬圓に該當するものであつた）。王はその金を得るために、貴族及び富豪に課税した。貴族及び富豪は轉じてそれを下流民へ搾取した。そのみならず、王は新たに華麗なる宮殿の造營に着手したために、人民に對する賦課は愈々繁きを加へた。かやうにしてコシヤ王の善政はここに全くその面目をも存せない迄に打破されたのである。しかもある種の人々は、かくして下層にある弱者を壓迫し得る社會の再現を悦んだのであつた。ヤーエはさうしたことに反對し給ふかも知れない。しかし、若し、反對し給ふとすれば、それはヤーエの御損である。何故ならば、さうしたことに反對せぬ神々は何處にでも見出され得るのであり、民はその神々へ轉ずれば善いからである。彼等はさう考へた。しかもこの惡風は王の音頭取に由つて國內に滿ち亘つたのである。

かかる間に、エヂプト王ネコは、紀元前六〇五年既にニネベを陥れて西進しつつあ

(一説にはアッシリヤと聯合して新興バビロンに對せん爲めであつたとも曰はれる)北上し來つた。ヨシヤ王は彼に遇ふためにメギドに赴いたが、そこにネコ王の爲めに弑せられた(一説にはエヂプト軍の矢に當つて戰死した)。ネコ王が何故ヨシヤ王を弑すの舉に出でたのであるかは充分明らかで無い。或はヨシヤ王に反エヂプト的傾向があつた(豫言者達は概してエヂプトに好意を有たなかつた)からであるか、又は單にエヂプト軍の後背を衝くべき勢力としてのヨシヤを除くことが、後顧の憂ひを去るべき道だと考へたためであつたであらう。

何れにもせよ、ヨシヤ王の變死はユダの人心に取つて重大なる打撃であつた。莫邁なる指導者を失つた悲みのみでは無い。神に従ふものは榮え、然らざるものは亡ぶと信じ、且又、最大なる幸福は長命と子孫多きにありとした當時の思想よりすれば、宗教改革を遂行してヤーエへの忠誠を示したヨシヤ王が、かかる不慮の死を遂げるといふことは、まことに理解し難い攝理であつたのである。

ユダの民はヨシヤ王を懷かしみ、その指命したエホアハズ(ヨシヤの次子)を王と

難に際會しては、遂に本質的な提携を爲し得ることを示したものである。それとともに、申命記法に由つて地方の社祠が撤廢されたことは、ユダの民をして、社祠を離れたる宗教を持つ心的習慣を養はしむることとなり、やがて來るべき俘囚時代に於て、彼等がエルサレムの神殿を失ひつつも、猶且その宗教を支持し得べき心的準備を爲さしむることとなつた。

かうした重大なる律法にその感化を與へた一人として見る時、我等は始めてゼバニヤの重要性を理解し得るのである。

第二章 「信」の豫言者ハバクク

ユダの衰滅期とバビロンの興起——ハバククの問題とその解決

(イ) ユダの衰滅期とバビロンの興起

その治下に於て、ユダの黄金時代が到來するかに見えた英王ヨシヤは不慮の死を遂げることとなつた。紀元前六〇八年、エヂプト王ネコはアッシリヤを討たんがために

害の渦中にありし豫言者達が、再び來るべき宗教改革に達するプログラムを作成し、特にそれの基底として舊來モーセに由つて與へられたりとされたる古來の法令を用ひモーセの權威に由れる新らしき律法を作成し、時期の到來を望みつつ之を神殿内に匿藏し置きたるものなりとされてゐる。

もし、この所説にして誤なしとすれば、元來貴族の出であつたゼバニヤが、幼王ヨシヤをして豫言的改革に傾かしむべき感化を與ふるに與つて力ありしことは、我等が自然に想到し得ることであり、又彼が申命記の編成に於て重大なる地位を占めたであらうことも又之を推想するに難くないのである。

申命記は、この後に於けるユダの宗教思想に極めて重大なる影響を與へたのみならず、從來、單に豫言者達の語に由つてのみ傳へられ來つた主義原則が、ここに成文法となつたことは、やがてユダヤ人をして成文律の民たらしむべき第一步を踏み出したるものである。それとともに、これは祭司及び豫言者の協同的勞作に成るものであり、ともすればその利害及び主義が相反するものなるかに見ゆるこの二種の宗教家も、國

ビの族に屬するものとされてゐた地方の廢祠の神官達は、レビ人として從屬的位置に置かれた。(三) 不純なる一切の祭祠が廢止され、又、從來家族的なる祭りであつた逾越節が神殿に於て行はるべき國家的祭禮となつた。かくして宗教上の墮落を防止すべき一切の手段が講せられるとともに、(四) 舊來の宗教法及び民法刑法の一切に亘つて人道的立場よりの改正が行はれ、前代に於ける豫言者達の理想とした社會正義への途が確立された。

この宗教改革に於て特に注目すべきは、それが神殿の修理中、神殿の中に於て祭司ヒルキヤの發見したる『契約の書』に基づいて行はれたといふ事實である(列王紀略下二十二章以下を看よ)。そして、聖書學者達の結論によればそれは今日我等が申命記と呼んでゐるものの中核を爲すものであつて、申命記はこの時始めて發布されたる律法なのである。

然らば、如何にして、又何人の手に由つて申命記法は造り上げられたのであらうかこの點に關して聖書學者達が達した所説に由れば、それはマナセ王治世中に於て、迫

るを見ず、その敎説に於ても、前代の豫言者達のそれを繰り返すのみであつて、新らしき宗教思想への發途と認むべきものは無いとの理由を以て、ある人々はゼバニヤの價值を無視しようとする。しかしながら、我等が記憶しなくてはならないのは、豫言者は、單なる敎理の發明者として世に出でたものではなく、神の民に對し、神の聖旨を知らしめんが爲めに、特に神より撰ばれたるものであるといふことである。

ゼバニヤの前には、最早收拾すべからざるまでに至つたユダの墮落腐敗があつたのである。この危機に對して、必要なのは新たな敎理の宣傳ではない、民の良心の覺醒である。そして、この點に於て、ゼバニヤは多大の貢獻を爲したることを發見するのである。

ヨシヤ王在位の十八年、即ち紀元前六二一年に於て、ユダには再び、そして以前に行はれたそれよりも更に根本的な宗教改革が斷行された。(一)エルサレム以外にあるヤーエの禮拜所は悉く淫祠として廢止され、エルサレム神殿が唯一の禮拜所となつた。(二)ザドクの末なりとされてゐるエルサレムの祭司が中心的祭司となり、レ

その時はわれ^{ともしび}燈^{ともしび}をもちて（この句あるために中世紀の畫家達はゼバニヤを燈を提げたる豫言者として畫いた）エルサレムの中を尋ねん、而して滓^{みづ}（葡萄酒を作る際に出来るもの、甘けれど酸敗し易いものであつて、怠惰無關心を表はすものとされてゐた）に居着^{ゐつき}て心の中にヤーエは福^{さいはひ}をもなさず、災^{わざはひ}をもなさずといふものを罰すべし（一章十二）

（三） 富者の誅求がある。裁判官の收賄がある。

その中にをる牧伯^{つがふ}等は吼る獅子の如く、その審士^{さはんびと}は明旦^{あした}までに何をも遺^{のこ}さざる夜求食^{よあそひ}する狼の如し（三章三）

（四） 宗教家の墮落腐敗、御用宗教家主義がある。

その豫言者は傲^{はこ}り、かつ詐^{いつはり}る人なり。その祭司は聖物を汚し、律法を破ることを爲せり（三章四）

（五） 外國風への心酔、従つて外國風の服裝を喜ぶ風の横行がある。

（ニ） ゼバニヤの貢献と申命記

ゼバニヤの豫言は、呪咀に満ちたるものであつて、例へばエリヤのそののやうに、罪惡を攻撃し、悔改めを叫ぶ、二章一——三）のみであつて、何等建設的なるものあ

かうした樂觀的な民の待望に反して、その日は、禍の日、民がその罪の報ひを受くべき日なりと教へた最初の豫言者はアモスであつた。(アモス書五章十八——二十)。ゼバニヤはアモスの教へたりしことを當代に適用して宣言したのである。

そして、かうした災禍の日が来るのは、ユダに於ける罪惡の結果である。

(一) バアルその他異邦の神の禮拜がある。

われユダとエルサレムの一切の居民との上に手を伸べん、我此處より、かの漏のこれるバアルを絶ち、ケマリム(偶像禮拜の祭司)の名を祭司(正式の祭司にして墮落したるもの)とともに絶ち、また屋上にて天の衆軍を拜むもの、ヤーエに誓を立て拜みながらも、亦おのれの王(これは、マルコム乃ちアンモン人の神の名の誤譯であるとされてゐる。乃ち民は、ヤーエを禮拜すると稱しながら、その宗教上の實行に於ては、異教の神の名に由てする、宗教混合のことである)を指て誓ふことをする者、ヤーエに悖り離るる者、ヤーエを求めず、尋ねざる者を絶ん(一章四——六)

(二) 實際上に於けるヤーエの拒否、即ちヤーエは人生々活の上に於て何等重要な關係を有し給はずとする思想がある。

この内憂外患の危機に於て神の召命を受けたるものが、豫言者ゼバニヤであつた。彼はヒゼキヤ王五代の孫であつたやうであり（一章一節）従つて、イザヤと同じやうに貴族の出身であつたと思はれる。又彼がエルサレムの地理に委しきより見れば、彼も又エルサレム市民の一人であつたと想像される。

彼が當面した第一の問題はスクテヤ人の侵入であつた。彼はこれを解して、それは『ヤーエの日』であるとしたのである。そして是はユダのみならず、周囲の諸民族にも及ぶべき、恐ろしき日であると宣言した。

汝、主ヤーエの前に黙せよ、そはヤーエの日近づき、ヤーエすでに犠牲を備へ、その招くべきものを定め給ひたればなり（一章七）（一章十四——十八、二章二一五を看よ）

『ヤーエの日』といふは、ヘブルの民の間に昔より信ぜられた、將來に於けるある日のことであつた。そして、それはヘブル民族が神の恩恵によりて非常なる光榮と繁榮とを與へられ、四周の民によつて羨望畏敬さるに至るべき黄金時代だとして考へられてゐた。

つた。アッシリヤの勢威が隆盛であつた間、その邊境の外に蟄居するを餘儀なくされてゐた諸蠻族は、アッシリヤの國威衰退とともに次第に帝國內に侵略を試みるやうになつた。

これ等諸蠻族の中に、スクテヤ人と呼ばれる一群があつた。彼等はアルメニヤの北方なる山地をその根據地とする牧畜者を以て成つてゐたが、その獷猛性と殘虐性とは四周の民を畏服するのに充分なるものがあつた。ユダの王ヨシヤ治世の始め、既に彼等は、東方にメデヤ及びアッシリヤを破り、轉じて地中海岸に沿ひつゝエヂプトを目標として南下し來つた。彼等襲來の報は、その前進の途にある民に、異常なる恐慌を起したのであつて、ユダの民心も又之が爲に震撼されたのであつた。幸ひにしてペリシテの野を離れて山中にあることとて、スクテヤの侵入は遂にエルサレムに及ぶことなくして終つたが、民の恐怖は、直接その被害を被りし各地のそれに劣らないものであつた。

(ハ) ゼバニヤ起つ

ハズ王の例に従つて、アツシリヤの宗教を導入することである。さうした事情の下に、舊來のバアル禮拜復興と相俟つて、星斗（天の衆軍）を拜すること、特に金星（天后）を禮拜することが盛行し、民家の屋上のみならず、神殿までもその禮拜所と化するに至つた。豫言者達は迫害に逢ひ『無辜者の血を多く流して、エルサレムのこの極よりの極まで盈せり』（列王紀下二十一章十六節）といふ有様であつた。

かやうにして、豫言者達の運動が根本的に破壊さるるに至つては、豫言者達が根絶するに努めた諸種の社會惡が、再びその頭を擡げ來るのも又止むを得ない。

マナセ王の治世は、五十五年の長きに亘つたのであれば、この反宗教改革の運動は可成り徹底的に行はれたものであるべきを推想することができる。かやうにしてマナセの子アモンを経て、ヨシヤ王（六二三七——六〇七年）治世の始めに到つても、この勢は滔々としてその極るところを知らなかつた。

（ロ） スクテヤ人の侵入

ユダの内部がかうした腐敗を續けてゐる間に、外界に於ける危難も又増大しつゝあ

ば、王の死去とともに、その勢力が失墜するは寧ろ自然の數であつたこと。(二)豫言者達の高遠な理想主義は俚耳に入り難く、寧ろ實際的な世俗宗教が民衆にアピールするところ多かつたこと。(三)セナケリブの侵略に脅かされてエルサレムに避難した地方人の數は、かなり多數であり、しかも彼等は迷信に囚はれ易い人々であつたのであれば、彼等の感化が、反動的な勢力を助長したこと。(四)ヒゼキヤ王の后宫にあつた多數の妃妾達は、おそらく、イザヤが攻撃した女人達の一部であつたのであり、従つて彼等は豫言者運動に對して衷心より反感を懷いてゐた筈である、されば彼等がその勢力を利用して、幼弱の王マナセの政策を左右したことなどは、この反動運動を助長するに力あつたものと思はれる。

それに加へて、當時ユダはアッシリヤに朝貢する小弱の一國であり、セナケリブの碑文には、これを國と呼ばずして邑と呼んでゐるのに見ても、その國力の衰退は甚だしいものがあつたやうである。さればマナセ王としては、アッシリヤの意を迎ふべき一切の手段を講ずることが極めて大切となつた。アッシリアに迎合する最上策は、ア

第三篇 バビロン時代に於ける豫言の進展

『呪』の豫言者ゼパニヤ——『信』の豫言ハバクク——『心』の豫言者エレミヤ——
『法』の豫言者エゼキエル

第一章 『呪』の豫言者ゼパニヤ

マナセ王と反宗教改革——ゼパニヤ起つ——ゼパニヤの貢獻と申命記

(イ) マナセ王と反宗教改革

イザヤ、ミカ等の感化と、セナケリブ侵入の危機と、ヒゼキヤ王の英斷とが相合して遂行した宗教改革も、しかし余り永い生命を保ち得なかつた。ヒゼキヤ王を繼いだマナセ(六九二——六三八年)の治世に於て、この宗教改革は根本的に覆へされ、以前にも増して偶像禮拜が横行することとなつたのである。(一)ヒゼキヤ王の宗教改革は、國民全體の信念に基づくといふよりは、寧ろ王室よりの天降りであつたのであれ

と見る思想の發達しなかつた古代に於て、彼の言は、寧ろ異とすべきものであり、その點に於て我等を誨へるものが多い。第二章に描かれたアツスリヤ滅亡の畫圖は餘りにも實際に近いものであるために、ナホムの住處として記されあるエルコシ（一章一節）は、ある人々の考ふるやうなガリラヤの一都邑であつたのでは無く、寧ろニネベに近いある邑であつたと考へるを適當なりとする學者が多い。

ヤの没落に對する悦びの歌聲を擧げたものが、エルコシ人ナホムであつた。

ナホムに於ては、アッシリヤが過去二世紀の間、世界の民を苦しめたのは、單にその肉的なる慾望を満さんが爲めであり、アッシリヤに由つて爲されたる幾多の戦は、單に組織的な殺人に過ぎないのである。劍を以て起るものは劍を以て亡ぶべし。アッシリヤは、自ら掘りたる穴に自ら陷るのである。只ヤーエは善なるものに在すが故に彼に倚頼むものを善く知り給ふ。故にユダは救はれる。それがナホム書の中思想である。

ナホム書は餘りに短少であつて、我等はナホムなる人物の全豹を之に由つて窺ひ得るや否やを疑ふのであるが、我等に傳へられたるナホム書の方に就て見る時は、彼は常に敵國の罪と、その滅亡とにのみその注意を集め、己が民の惡を責むるを忘れてゐる。この點に於て、彼は所謂皮相的愛國者の部類に屬するのであつて、イスラエルが生んだ他の深刻なる豫言者達と聊かその類を異にしてゐる。しかしながら彼がアッシリアに對して放つ攻撃は、即ち戦争至上論者に對して放つ攻撃であつて、戦争を以て惡

惡より惡に進み行く有様であつた。國の防護に任ずるものは、雇ひ入れたる外國人の兵士であつて、國民の中に於ける愛國忠誠の心は殆んどその影を潜め終つたのであつた。國家そのものさへも、單に王及びその近親者達が利己的利益を占むる爲めの機關に過ぎないものと化し終つたのである。かくして、その外觀上に於ては榮光の最高に達してゐたアツシリヤが、ナボニダス王に到つて、突然、新興カルデア人（新バビロン）の爲めに覆滅の悲運に會し、さしも世界の心を震撼したる首都ニネベも、紀元前六〇五年を以て、遂にその最後の日を見たのであつた。

ヘブルの豫言者達が國家滅亡の原因なりとして指摘した成素は、今や悉くアツシリヤに具備されたのである。それとともにユダの豫言者より之を見れば、ヤーエがアツシリヤを用ひ給ふたのはユダ國民の罪を清めんが爲めであつた。しかも同じ罪がアツシリヤによつて犯され、しかもアツシリヤの殘虐は世界にその比類を見ざるものであつたのに見れば、ヤーエが必ず之に報復を與へ給ふべきは寧ろ當然のことである。

かうした立場よりして、ユダ自らに對する愛國の至情を表はすとともに、アツシリ

第五章 國の豫言者ナホム

セナケリブの後、アッシリヤには、エサルハドン、アシウルバニバル等の英王相次で位に上り、その國威に於ても、その文化に於ても、アッシリヤの黄金時代を現出したのであつた。遂にはエチプトさへも遂にその勢威の下に服したのであり、ユダを始めとして地中海岸の諸國は、過去に於ける苦い經驗の結果として、何ものよりも先づ服従がその安全策であることを學んだのであつた。その結果として朝貢は世界の四方よりアッシリヤ王の金藏に注ぎ入れられる有様であつた。特にアッシウルバニバル王は、アッシリヤ文化の祖たる古代バビロンの文化を復興せんが爲めに、廣大なる圖書館を建設し、其處に古代文書の翻譯を貯藏したのであつて、今日我等がこの地方に於ける古代文化の智識を得るに當つては、大英博物館に保有されあるアシウルバニバルの圖書館が極めて重要な地位を占めてゐるのである。しかも、かうした繁榮と、文化の進展とは、やがて國內に奢侈淫逸の風を盛んならしめ、その道德は腐敗し、社會狀態は

於て出来上つた二個の豫言的文章が附加されたものだといはれてゐる。しかし、ミカ書を研究するに當つては、第六章第八節に記されたる、豫言者宗教の理想を逸することはできない。

『人よ彼^れに善事の何なるを汝に告げたり、ヤーエの汝に要めたまふ事は、唯正義^{ただしき}を行ひ、憐憫^{あはれみ}を愛し、謙遜^{へりくだ}りて汝の神とともに歩む事ならずや。』

といふのである。『正義』はアモスの宣傳したところであり、『憐憫』(これはヘセドであつて愛である)はホセアを中心思想であり、謙遜りて神と共に歩むことは、神の『聖』を高調したるイザヤの教説より、自然に流れ出づる人生原理である。

かくて、この著者が、ミカ自身であつたにせよ、或は他のものであつたにせよ、我等はここに紀元前第八世紀に於けるヘブル豫言者の宗教的理想が、美しくも總括されたる一句を見出すのである。しかも、二千八百年を隔てたる今日に於ても、我等は果してこれ以上の宗教理想を組立て得るであらうか？

對してエレミヤの友人達は、ミカの例を引いてエレミヤの辯護に努めた。

「牧伯等と凡ての民、すなはち、祭司と豫言者にいひけるは、此人は死にあたる者にあらず、是は我等の神ヤーエの名に由りて我等に語りしなりと、時に此地の長老數人立て、民の凡ての集れるものに告げていひけるは、ユダの王ヒゼキヤの代にモレシテ人ミカ、ユダの民に豫言して云けらく、萬軍のヤーエかくいひ給ふ、シオンは田地のごとく耕され、エルサレムは廢墟となり、此家の山は樹深き高き處とならんと、ユダの王ヒゼキヤと、すべてのユダ人は彼を殺さんとせしことありや、ヒゼキヤ、ヤーエを畏れ、ヤーエに求めければ、ヤーエ、彼に降さんと告給ひし災を悔ひ給ひしにあらずや云々」(エレミヤ記二十六章十六——十九節)

朴訥なる田舎者の熱心と激情とは、遂に大聖イザヤを援けてヒゼキヤ王の宗教改革を招來したのである。ミカに於ては、その敎說中何等眼新らしきものが存在せず、彼は單に他の豫言者達の語を繰り返すに過ぎざる觀があるのであるが、ミカの價值はその敎說の新らしき點にあるのでなくして、彼がユダの民の良心に訴へ得た、その眞情の力に存するのである。

ミカ自身の豫言は、一般に第三章を以て終つたものとされ、それに續いて、後代に

それとともに、ミカの眼に度し難しと見へたのは、かの職業的な宗教家達であつた田園生活者特有の諷刺を以て彼はこの輩を嗤笑する、

『我民を惑はす預言者は、齒にて嚙むべき物を受る時は平安あらんと呼はれども、何をその口に與へざる者にむかひては戰鬥の準備をなす。ヤーエ彼等に就きて、かく曰ひ給ふ、然ば汝らは夜に遭ふべし。復異象を得じ、復ト兆を得じ、日はその預言者の上を離れて没り、その上は豈も暗かるべし、見者は愧を抱き、ト者は面を赧らめ、皆共にその唇を掩はん。神の垂應あらざればなり。』(三章五——七節)

職業的宗教家は、遂にそのメツセーヂそのものを失ふに至るべしといつたミカの教説は、今猶多數の宗教家に適切なる教訓を與へないでは置かない。

(二) ミカの成功

數多い豫言者達の中に於て、その教説が直ちに民に由つて遵奉されたのは、怖らくミカのみであつたといへる。彼の成功は、エレミヤ記に在る記事から窺ふことができるのである。當時エレミヤは、ユダの罪に由つてエルサレムの滅亡すべきことを説いたために、大いに宗教家等の怒を買ひ、彼等はエレミヤを殺さんと謀つたが、それに

爲し、ヤーエに倚頼みて云ふ。ヤーエ我等と偕に在すにあらずや。然ば災禍我等に降らじと是によりてシオンは汝の故に田圃たはたとなりて耕へされ、エルサレムは石堆いしづかとなり、宮の山は樹の生しける高處たかところとならん。(三章九——十二節)

(ハ) 富者と宗教家の罪

『上の好むところ下これより甚だしきは無し』かやうな不義不正が、上流階級及指導階級の中に行はるる結果は、凡ゆる階級にその感化が及ぶのである。イスラエル傳統の正義とデモクラシーとを維持するに當つて、最も有力なる分子であるべき普通民すらも、その愛國心、同胞愛を擲ち終るに至つたのであつた。かくして民は舉つて利己主義と物質主義に走り、よしそれが不正であつても、法律に觸れざる限りは敢て顧慮せざる有様となつた。凡ゆる方法を用ひて彼等は他人よりの掠奪を圖るのであつた。『その牀にありて不義を圖り、惡事を工夫くはだつる者等には禍あるべし、彼らはその手に力あるが故に天明よるけに及べばこれを行ふ。彼等は田圃たはたを食りてこれを奪ひ、家を食りて是を取り、又人を虐げてその家を掠め、人を虐げてその産業をかすむ。是故にヤーエかく言たまふ。視よ、我此族やからにむかひて災禍を降さんと謀る』(二章一——三節)

『我言ふ、ヤコブの首領よ、イスラエルの家の侯伯よ、汝ら聽け、公義は汝らの知るべきことに非ずや、汝らは善を惡み惡を好み、民の身より皮を剥ぎ、骨より肉を削り、我民の肉を食ひその皮を剥ぎ、その骨を碎き、これを切きざみて鍋に入る物のこどくし、鼎の中にいる肉のごとくす』(三章一——三節)

之等支配階級は又、既にイザヤに於て見たやうに、凡ゆる方法を以て不義不正を行つてゐるのである。田園より出で來つた青年達の奉仕によつて美しい都市を造營しながら、田園の人々には何の報ひをも爲さないのである。農村は只都市を肥さんが爲めに存在し、都市の人々は地方人を搾取することに由つて榮えてゐる。その宗教家といふも悉く金錢の爲めに働く御用宗教家に過ぎない。そして首都の人々は、ヤーエその中に在すが故に、首都は永遠に安全なりと涼しい顔をしてゐるのである。ミカの攻撃が骨を刺す鋭さを持たねばならぬ所以である。

『ヤコブの家の首領等及びイスラエルの家の牧伯等、公義を惡み、一切の正直事を曲る者よ、汝ら之を聽け、彼らは血をもてシオンを建て、不義をもてエルサレムを建つ、その首領等は賄賂をとりて審判をなし、その祭司等は値錢を取りて教誨をなす、又その豫言者等は銀子を取て占トを

すや、ユダの崇^{たかき}邸^ととは何かエルサレムにあらずや、是故に我サマリアを野の石堆となし、葡萄を植る處と爲し、又その石を谷に投おとし、その基を露さん……サマリアの傷は醫すべからざる者にて、すでにユダに至り、我民の門エルサレムにまで及べり」(一章五——九節)

(ロ) 支配階級の罪

國を教へんとするものは、先づその首都から始めるを適當とする。アモスもその途を取つた。ミカも亦、國民生活の中心なるエルサレムに登り行いて、その警世の言葉を發したのである。彼の心には燃え燃る憤怒がある。神命我にありとの確信がある。彼の言葉は勢ひ激烈のものたるを免かれぬ。

彼が第一に攻撃したのは支配階級の人々である。支配階級は、民を保護し、民の利益を計るために存在する。然るにユダに於ては、政府といひ、政黨といふものが、一種の利權獲得組合である二十世紀のある國のやうに、支配者はその地位と勢力とを以て私利私慾のみを計り、民と國とは彼等の喰ひ物となつてゐる。イザヤが既にいつたやうに(イザヤ書九章二〇——二二節)、彼等は喰人鬼の輩である。

豊かなる地方である。この地方は恐らく、ウジャヤ王の時代、その領地が擴張された時に、王直屬の殖民地として經營された一部であると考へられる。

ミカが豫言者としての召命を受けたのは、恐らくかの七〇一年に於けるセナケリブ侵入の時であると思はれる。アツシリヤ軍がユダを攻略するに取つた道筋は、大抵ペリシテの野から、ユダの山地即ち『シヘラ』へ上り行く道筋であつた。そしてセナケリブ自らその碑石に書き残してゐるやうに、エルサレムそのものは侵略されなかつたけれども、ユダの都邑四十六は、アツシリヤ軍の爲めに無慘に征服され、兵燹の災に罹つたのである。ユダの罪が、アツシリヤ軍の侵入を招來したのである。しかもユダの罪はエルサレムに於て犯される。そしてその災禍を蒙るものは、既に首都の爲めに幾多の誅求を受け來つた地方の民である。進み來る敵軍を前に戦々競々たる人々に取り圍まれて、ミカは遂に立つたのである。彼の豫言は純朴なる土の人が都市の逸民に對して有する憤激のほとばしりであつた。

「是みなヤコブの愆の故、イスラエルの家の罪の故なり、ヤコブの愆とは何か、サマリアにあら

第四章 『土』の豫言者ミカ

ミカの生地と彼の問題——支配階級の罪——富者と宗教家の罪——ミカの成功

(イ) ミカの生地と彼の問題

北方イスラエルに出でた野の人アモスに對して、市の人ホセアがあつたやうに、都市の豫言者イザヤを出した南方ユダに於て、野の人ミカの出でたのは興味あることである。彼が活動した時機は凡そ紀元前七〇五年より六八六年頃までの間とされて居りイザヤの活動期中に屬してゐる。彼は野の人であつたが、しかし、彼の出で來つた野は、アモスの育つたやうな荒涼たる南方の地ではない。彼はモレシテ人と呼ばれてゐる。モレシテはユダの山地が、ペリシテの平野に向つて斜坂を造つてゐる畝形の山地、通常『シヘラ』と稱せらるる地方である。この地方は、土地も肥え、氣候も和らかであり、主として灌木の茂みに圍まれた農耕地であつて、地中海より吹き上げる海風の影響をも受け、空氣は人體に適する程度の濕氣を帶び、萬花香り百鳥樹間に唱ふ

をも用ひて之が淨化に従事し給ふのである。

かく、イスラエルの神なるヤーエが、異教の民なるアツシリヤをも、その目的を達する手段として用ひ給ふことは、即ちヤーエの世界主義を示すものであつて、この點に於ても亦イザヤはアモス、ホセアの聲を反響してゐるといへる。しかしながら、その世界主義といふも、未だ充分なる發達を遂げたる世界的神觀といふ意味ではなく、矢張エルサレムに特殊なる利害を感じ給ふ神の世界主義である。従つて、イザヤの描いた理想國も、そしてその中心たるべき人物も、ダビデの王統より出づるユダヤ人であることを重要な條件としたのである。この點に於て、イザヤの理想國はキリストの理想國の如き、靈的にして、且徹底的に世界的なるものではない。しかも、紀元前八世紀に於て、かくの如き遠大なる理想を表明し得た點に於て、イザヤは豫言者として、優秀なる且重大なる地歩を占むべきものであり、又、初代のクリスチャンが、彼の理想國の中に、キリストの國の影を見出したのも又恰當なことだと曰ひ得るのである。

のものであつた。

『エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて實を結ばん、その上にヤーエの靈とどまらん。これ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈、ヤーエを畏るるの靈なり、……正義をもて貧しき者を救き、公平をもて國のうちの苦しき者のため斷定をなし、……正義はその腰の帶となり、忠信はその身の帶とならん。狼は小羊とともに宿り、豹は小山羊とともに臥し、犢雄獅子肥たる家畜ともに居て、小さき童子に導かれ……斯て、わが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の海を蔽へる如くヤーエを知るの知識地に滿つべければなり』(一章一——九節)

イザヤは、神の『聖』が、單に人と隔離され給ふといふ點にのみあるので無く、それは道德的内容と社會的原則を含むものであることを主張した。その點に於て彼はアモス、ホセアとその軌を一にするものである。同時に彼はヤーエの『聖』が又政治的の意義をも有するを説いたのであつて、即ち聖なる神は、その活動の中心地として撰び給ひしエルサレムを聖なる都とし、イスラエル民族の聖者たる神を拜するに適當なる所たらしめ給ふ。故に、その聖地の穢瀆さるるを見給ふや、アツシリヤの如き外敵

あると思はれる。

『幽暗をあゆめる民は大なる光を見、死蔭の地に住める者のうへに光照せり、なんぢ民をましその歡喜を大にしたまひければ彼等は收穫時によるこぶが如く、採物を分つときに樂むが如く、汝の前に喜べり。そは汝かれらがおへる輓とその肩の笥と、虐ぐるものの杖とを折り、これを折てミデアンの日のごとくなし給ひたればなり、總て亂れたたかふ兵士のよろひと、血にまみれたる衣とはみな火のもえくさとなりて焚るべし。ひとりの嬰兒我等のために生れたり、我等はとりひの子を與へられたり、政事はその肩にあり、その名は奇妙、また議士また大能の神、とこしへの父、平和の君となへられん。その政事と平和とは増し加はりて窮りなし、且ダビデの位に座りて、その國を治め、今より后とこしへに公平と正義とをもてこれを立て之を保ち給はん、萬軍のヤーエの熱心之を成し給ふべし』(九章二——七節)

イザヤが見た理想の國は、プラトーンが見たそれと同じやうに、理想的なる人物を中心とし、それに由つて完成さるる國であつた。しかも、その中心を爲す原則は、正義と、公平とである。そして、この理想國の出現は、單に、人類の福祉となるだけではなくして、凡ゆる生物の福祉となり、彼等の間にも又爭鬭無き日が來るのである。即ちイザヤの見たる理想の國は、神の造り給ふところのものであり、従つて全宇宙的

ヤに對して持したる態度を一變し、エルサレムの難攻不落と、アッシリヤ軍の大敗とを豫言して、大いに民と王との士氣を鼓舞したのであつた。

「汝がそしり、かつ罵れるものは誰ぞ、なんぢが聲をあげ、目をたかく向けてさからひたるものは誰ぞ、イスラエルの聖者ならずや……この故にヤーエ、アツシリヤの王については如此いひたまふ、彼はこの城にいらす、ここに箭をはなたす、盾を城の前に並べず、壘をきづきて攻めることなし、かれはその來りし道よりかへりてこの城に入らず、我已の故によりて、僕ダビデの故によりてこの城を守り、この城を救はん、これヤーエの宣へるなり。」(三十七章——二三——三五節)

しかも、イザヤの言は眞實となつたのであつて、アツシリヤ軍はエヂプトに近き沼地に陣しつつある間に惡疫の襲ふところとなり、セナケリブは急ぎ軍を還したためにエルサレムに遣はされてゐた一隊も同時に引き揚げることとなつた。

かくしてユダには始めて安穩の日が來たのである。そしてその青年時代より絶えず民の輿論に反對し、従つて、ユダに於ては極めて不評の人であつたイザヤも、此處に始めて人々の尊崇を受くる身となり、彼の得意時代が出現したのである。彼の所謂メシヤ的豫言即ち將來に於ける理想國に關する教説は、この時代に於て與へられたもので

(リ) セナケリブの再征とイザヤの晩年

かくしてヤーエに對するユダの民の信仰が漸く確立し、罪を悔ひたる結果として災害は全くエルサレムより取り除かれたりとの信念が、人々の中に愈々強められたのであつたが、しかもこの信仰が重大たる試鍊を與へらるべき時が來た。乃ち、凡そ六九二年の頃、セナケリブが再びシリヤ地方にその征戰を行つたことである。彼の目的とする處はエヂプトであり、エヂプトを根本的に抑壓することに由つて、將來の禍根を除かうと欲したもののやうである。然るに彼はペリシテの野に進出したる後、その背後にあるべきユダを壓へ置くの必要を感じ、將軍ラブシヤケに一隊の兵を附して、エルサレムに赴かしめ、ユダの民に向つて、アツシリヤの力強きを宣言し、城を擧げてアツシリヤ軍に降るべし、然らざれば大なる災禍を以て見舞はるであらうと脅かした(イザヤ書三十六章以下を見よ)

ヒゼキヤ王は大いに憂へ、直ちに使をイザヤに遣はしてその意見を求めたが、イザヤはアツシリヤ軍が、イスラエルの神を嘲罵するを聽きて大いに怒り、從來アツシリ

らは我にそむけり、牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる、然どイスラエルは識ず、わが民はさとらず、ああ罪を犯せる國人、よこしまを負ふ民、惡を爲す者の末、壞り損なふ種族、かれらはヤーエをすて、イスラエルの聖者を侮り、之をうとみて退きたり……』

セナケリブの大軍を以て包圍されたヒゼキヤは遂に策の盡きたるを悟り、豫て己が下に幽囚されてゐたバタイを引き渡すとともに、セナケリブに對して陳謝の誠意を示したので、遂にエルサレムの包圍は解かるることとなつたが、それが爲めに多大の償金を課せられ、之に應ずるためには神殿の飾さへも剝がされたのであつた。

かうした國難に直面しては、流石頑冥なるユダの民もその心を改めざるを得ない、ここにヒゼキヤ王を中心として大宗教改革が行はれたのであつた。乃ちアハズ王がアッシリヤ宗教を導入して以來、荒廢そのものとなつてゐたエルサレムの神殿を修理し之を潔め、盛んなる逾越節を行つて、大いに國內の宗教氣分を新たにした。かくしてイザヤが主張したる純正宗教が國內に樹立されるとともに、その社會生活も、道德生活も、次第に豫言的理想に順應するものとなつて來た。

マデメナはさすらひ、

ゲビムの民はのがれ走れり、

この日かれノブに立とどまり

シオンの女の山エルサレムの岡に向ひて手をふりたり（十章二八——三二節）

かうした間にあつて、民は猶事態の急を知らず、屋上に群集して宴を張つてゐる。彼等は噴火山上に亂舞しつつあるに過ぎない。

『なんぢら何故みな屋蓋やねにのぼれるか汝は騒がしく喧しき邑、ほこり樂しむ邑、何んちのうちの殺されたるものは劍をもて殺されしにあらず……亦戰に死にしにもあらず、なんぢらは喜びたのしみ牛をほふり羊をころし、肉をくらひ酒をのみていふ、我等食ひ且飲むべし、明日は死ぬべければなりと』（二十二章一——十三節）

しかし、攻撃軍が次第にエルサレムの周圍に迫り來るや、民は次第に沈鬱に轉じて行つた。この機に乗じてイザヤは一章二節以下に載せられてゐる沈痛なる説教を試みたのであつた。

『天よきけ、地よ耳を傾けよ、ヤーエ語りたまふ言あり、曰く、われ子をやしなひ育てしにかれ

(チ) セナケリブの侵略とユダの宗教改革

イザヤの豫言が、遂に實際となるべき日が來た。登位以來四ヶ年の間、周圍の叛亂鎮定に従事してゐたセナケリブは、遂にバビロンを陥れてメロダク・バラダンを追放し、バビロンと提携しつつあつたエラム及びアラビヤを抑へ、紀元前七〇一年、その全力を擧げて西征し來つた。そして電光石火のやうにフェニシヤよりペリシテに至る諸邑を攻略し、エリテケに於て大いにエヂプト軍を破り、遂にエルサレムを包圍した。

かれアイにきたりミグロンを過ぎ

ミクマシにてその輜重をとどめ

渡口をすぎてゲバに宿る

ここに於てラマはをのゝき

サウル、ギベア人は逃れはしれり

ガリムの女よ、なんぢ聲をあげて叫べ

ライシよ耳をかたむけて聽け

アナトテよ、なんぢも聲をあげよ。

時勢の變轉と、その重大なる意義とを覺知し得ないのは、王とその施政者のみではない、民も又全くその行くべき途を知らないのである。

『なんぢらためらへ、而して驚かん、なんぢら放肆にせよ、而して目くらまん。かれらは酔り、されど酒のゆゑにあらず、彼等はよろめけり、されど濃酒のゆゑにあらず……主いひたまはく、この民は口をもて我に近づき口唇をもて我を敬へども、その心は我に遠かれり』(二十九章九—十三節)

彼等は自ら行くべき途を知らざるのみならず、先見を有するイザヤの語にすら聽従しやうとせぬ。さればイザヤに残されたる唯一の途は、これを書物に記して知己を後代に求むることであつた。

『いま往てこれをその前にて脾にしるし、書にのせ後の世に傳へてとこしへに證とすべし、これは悖れる民、僞をいふ子等ヤエの法律をきくことをせざる子等なり、かれら見るものに對ひていふ見るなかれと、黙示をうる者にむかひていふ、直きことを示すなかれ、滑かなることを語れ、虚偽を示せ、なんぢら大道を去り、逕を離れ、われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれと』(三十章八—十一節)

う。

『あゝアリエルよアリエルよ、あゝダビデの營を構へたる邑よ、年に年を加へ節會まはりきりらば、われアリエルをなやまし、之にかなしきと歎息とあらしめん、彼をアリエルの如きものとなすべし』(二十九章一——二節)

そしてそれとともに、この反アツシリヤ同盟は必ず失敗に歸するであらう。

『かのエヂプト人は人にして神にあらず、その馬は肉にして靈にあらず、ヤーエその子をおのぼしたまはゞ、助くるものも躓づき、助けらるる者も倒れてみな死としく亡ぶん』(三十一章三節)しかも、かうした同盟にまでユダを引き入れたものは、王の會計官たる、成り上り者のセブナである。彼はその密計によつて、自らの爲めに美しき家をさへ造營してゐる。貴族の出であり、國の爲めには赤裸の身を以て東奔西走しつつあつたイザヤは、彼に對して皮肉の言を浴びせざるを得ぬ。

『なんぢここに何のかかはりありや、また茲にいかなる人のありとして、己がために墓をほりしや、彼は高き處に墓を堀り、磔をうがちて己がために住所をつくれり、視よ、ヤーエはつよき人の投うつがごとくに汝を抛ち給はん』(二十二章十六——十八節)

『その日なんぢは林の家（宮殿中の武具室）の武具をあふぎのぞめり、なんぢらダビデのまちの壊れおほきを見る、なんぢら下の池の水を集めまたエルサレムの家を數へ、且その家をこぼちて垣をかたくし、一つの水坑を垣と垣との間につくりて古池の水をひけり。されどこの事をなし給へるものを仰望ます。この事をむかしより營みたまへるものを顧みざりき、』（二十二章八——十一節）

戦備を頼みてヤーエを頼まざるさへ既に不届なるに、彼等ユダの民は何の益もなきエチプトに信頼し、神に由る救を無視してゐるのである。

『そのエジプトの助はいたづらにして虚し、このゆゑに我はこれを休みをるラハブ（海の怪物）とよべり……主ヤーエ、イスラエルの聖者かく曰ひ給へり、なんぢら立かりて靜かにせば救をえ平穩にして依頼まば力をうべし』（三十章七……十五節）

『助を得んとてエジプトにくだり、馬によりたのむものは禍ひなるかな、戦軍おほきが故にこれにたのみ、騎兵はなほだ強きがゆゑに之にたのむ、されどイスラエルの聖者をあふがず、ヤーエを求むることをせざるなり』（三十一章一節）

かうした政策の結果は乃ち知るべきのみであつて、ユダは滅亡の外はないのである
アリエル（祭壇の爐）のやうにエルサレムはその民の血を以て溢るる時が来るであら

彼は又、バビロン王との提携は、やがて、アハズ王が、チグラテ・ビレセルとの關係よりユダに招來したりしと同一なる災害を持ち來すものであることを察知し、バビロンの眞目的は、ユダの寶庫にあることを指摘して王を戒告した。(三十九章五、六節) イザヤの努力に由つて辛うじて押へられつつあつたヒゼキヤ王の野心は、七(五年)ザルゴン王が死し、その子セナケリブの登位があり、登位に伴ふ國內の叛亂あるや、最早や大河の堤を決するが如く、イザヤの力を以てしても之を如何とも爲し得ざるに至つた。バビロンとエチプト及びその南なるエテオピア、シドン、ツロ、ペリシヤ等が相呼應して叛旗を翻したが、ヒゼキヤ王も又衷心よりこの事に賛成し、特にエクロン(ペリシヤの一城)王バデイは、アッシリヤ王の屬臣なりとの理由に由つて、その地の民の爲めに位を追はれたが、彼の身を幽囚すべき場所としてはエルサレムが選ばれたので、結局ヒゼキヤはこの反アツスリヤ聯盟の盟主といつた客となつてしまつた。そして、對アッシリヤの戰備完成に汲々たる有様であつた。この間に於てイザヤは、力を極めて戰爭反對の聲を擧げたのであつた。

柄エヂプトにはシヤバカと稱する王出で、俊傑たるとともに野心満々たるものありしたために、又も反アツシリヤの氣運が起つてゐたが、サルゴンはその部下を遣はして七一年ペリシテの一城アシドドを滅ぼしたので、他の聯盟者は恰もその策謀を知らざるものの如く装ふたために、辛うじて難を免かれ得たのであつた。この當時において、かのバビロン王メロダク・バラダンは、再び勢威を恢復しつつあつたが、當時ヒゼキヤ王の病めることありしを奇貨として、之に使者を遣はし、贈物を爲した。この使者はエルサレムにある寶物庫をも巡視して歸國し、バビロン王とヒゼキヤ王との間には一種の了解が成立したのであつた。

この間にあつて、不斷に外交的術策の不可を唱へつつあつたのはイザヤであつた。彼は單に言論を以てしては王宮の政策を變じ得ざるを知り、大衆の間にセンセーションを起すことに由つて、輿論の興起をうながさうと試み、三年の間赤裸、跣足にてエルサレムを徘徊し、エヂプトがやがてこの有様となるべきを豫言したのであつた。(二十章)

より蝮おろち(サルゴン王)いで、その果はとびかける巨蛇おろちとなるべければなり(十四章二十九節)
更に又ユダの民に向つては

『その國の使者たちに何と答ふべきや、答へていはん、ヤーエ、シオン(エルサレム)に基をおきたまへり、その民のなかの苦むしものは避所をこの中にえん。(十四章三十二節)』

と忠告した。これはイザヤが如何に先見の明に富んだかを示すものであつて、サルゴン王は、この謀叛を聞くや直ちに七二〇年、軍を西方に向け來り、先づペリシテ人の盟主たるガテを陥れ、ついでエヂプトの聯合軍をラヒアに破つたので、ダマスコその他も直ちに鎮定した。然しイザヤを有したユダは幸ひにこの禍害を免かれたのであつた。

(ト) ヒゼキヤ王と親エヂプト派の活躍

サルゴンの西征があつたのと同年、即ち七二〇年、アハズ王は歿し、その子ヒゼキヤがその位に登つた。彼は天資英邁であつたので、夙にユダの獨立を志してゐた。故に七一四年の頃より、ペリシテ、モアブ、エドム等の隣邦との間に聯盟を策してゐた。折

よりてよろめき、酒にのまれ濃酒によりてよろぼひ、而して默示をみるときにもよろめき、審判をおこなふときにも躓けり、すべて膳には吐きたるものと穢とみちて、潔きところなし、かれは誰にをしへて、智識をあたへんとするか、誰にしめして音信を曉らせんとするか、乳をたち懷をはなれたる者にするならんか、そは誠命にいましめをくはへ、誠命にいましめをくはへ、度にのりをくはへ、度にのりをくはへ、此にもすこしく彼にもすこしく教ふ、この故に神、あだし唇と異なる舌とをもてこの民にかたりたまはん」(二十八章七——十一節)

しかし、イザヤのかうした警告も、一時は單なる杞憂であるかに見えた。アツシリヤ王サルゴンは、サマリヤを陥れて間もなく、北東方に於てエラムに破れ、又バビロンに於ては、メロダク・バラダンの起るありて、大いに獨立の氣勢を擧げ、アツシリヤを惱ますに至つた。この機に乗じてエジプト王『ソ』(別名シビ)はハマテ、ペリシテ、ダマスコ等を語らつて、アツシリヤに對する謀叛を計畫し、ユダ王アハズをも之に誘ひ入れやうとした。ここにイザヤは再び立つて、この政策に對する絶對の反對を表明したのであつた。彼は先づペリシテを戒告する。

「ペリシテの全地よ、なんぢをうちし杖(シャルマネセル王)折れたればとて喜ぶ勿れ、蛇の根

かな、酒におぼるるものよ、肥たる谷の首にある^し淵と^しする花のうるはしき飾はわざはひなるかな、みよ、主はひとりの力ある強剛者をもちたまへり（アツシリヤのこと）。それは花をまじへたる暴風のごとく、壊りそこなふ狂風のごとく、大水のあふれ漲るごとく、烈しくかれを地になげうつべし。酔るものなるエフライム人のほこりの冠は是にて踐にぢられん、肥たる谷のかしらにある淵と^しする花のうるはしきかざりは、夏こぬに熟したる初結の無花果のごとし、見るものこれをみて、取る手おそしと^し忖ゆるなり。（二十八章二——四節）

しかも、イスラエルを滅亡に導いたのと同じ誘因は、南方ユダにも嚴存してゐる。しかも彼等は迷信に囚はれ、死との契約、陰府とのちぎり（二十八章十五節——死者の靈との音信を意味するものであらう）に由つて救はるるのだと信じ、施政者、宗教家、相率ひて邪惡を行ひつつある。かかる輩に向つては、恰も小兒を教ふるが如く、幾度も幾度も反復して靈の途に關する初歩を教へ込まねばならぬ（誠に誠を加へ、度に度を加へである）。しかも、さうした重大なる教訓は『あだし唇と異なる否』（即ちアツシリヤ人——二十八章十一節）に由つて與へられるのである。

「然ど、かれらも酒によりて^よめき、濃酒によりて^よほひたり、祭司と豫言者とは濃酒に

かしサマリヤの地位が戰略上の好條件を具へたゐたことと、流石にイスラエル傳統の勇敢なる血を享けてゐた市民によつて護られたために、當時世界の脅威であつたアッシリヤ軍の武威を以てしても、之を陷るるに三年の日月を要したのであつた。シャルマネセルはこの包圍の陣中に歿し、その子にして稀代の英王なるサルゴンが遂にサマリヤ奪取の名譽を得たのは紀元前七二二年（又は七二一年）のことである。かくして光榮ある北方イスラエルの歴史は、此處に悲慘なる終末を告げ、アモス、ホセアによつて豫言された怖ろしき最後が來たのである。民はアッシリヤに捕へ去られて各地に散らされ、サマリヤへは他の民族が移し植えられて、後代に於けるサマリヤ人の發端を爲した。

鋭い政治的眼光を有してゐたイザヤは、かうした北方イスラエルの運命をも充分に豫見してゐた。そして、それはイスラエルが自負、自瞞に陥つた結果であることをも洞察してゐた。

『醉えるものなるエフライム人よ（北方イスラエルのこと）なんぢらの誘の冠はわざはひなる

つた。かくして彼はアッシリヤ勢力のユダ侵入を招いたのであつて、イザヤの警告したことは漸くその實現の可能性を明らかにし來つたのである。

北方イスラエルの首都サマリヤは、チグラテ・ピレセルの侵入に際しては、幸うじてその難を免かれたのであるが、アッシリヤ軍の撤退後間も無く、ペカ王は殺されホセアが之に代つた。ホセア王はアッシリヤに對して朝貢を續け、その好意を持續するに努めたが、しかも内心に於ては、機會あらばその桎梏を脱しやうと志してゐたのであつた。そしてその機會は遂に來た。チグラテ・ピレセルは七二七年に歿し、シャルマネセル五世がアッシリヤの王位に登つたが、同時に起つた東方の反亂鎮定の爲め、彼は暫くその眼を西方に轉ずるを得ない立場にあつた。然るに一方エジプト王にしてその名を『ソ』と稱するものは、この機に乗じてアッシリヤが西方に有する勢力を覆さんものと欲し、シリヤ地方の諸國を誘つて、その計に加はらしめたので、イスラエル王ホセアも遂にその渦中に陥り、アッシリヤに對する朝貢を停止した。その結果、シャルマネセルは自ら大軍を率ひて西征し來り、七二四年サマリヤの包圍を始めた。し

中心としてヤーエの聖旨を奉じつつある一團は、之を聽かざる一般國民と區別されるものとなつたのである。即ち靈的宗教が、その國民の政治生活に對して漸くその獨立性を發揮せんとする機運への第一歩が、此處に踏み出されたる譯である。

(へ) 北方イスラエルの滅亡

アハズ王とイザヤとの間にかうした會見が行はれたのは紀元前七三五年のこと、しかも、翌年には既にアツシリヤ王、チグラテ・ビレセルの軍は地中海岸に進出し來つたのであつて、七三二年に至つて、ダマスコ王レヂンは殺され、首都は荒され、民は他方へ移された。この報を聞いて大いに喜んだアハズ王は、直ちにダマスコに到り、その地に駐在せるチグラテ・ビレセルに敬意を表した。しかも彼は其處にアツシリヤの偶像禮拜を見たが、自らその祭壇の見取圖を作り、之をエルサレムに送り、ヤーエの神殿に、これと同じ祭壇を造築せしめた。かくして彼は後年マナセ王の時代に於ける極端なる異教禮拜の淵源を作つたのである。更に又彼はアツシリヤに對する朝貢上の必要よりして、神殿内に於ける諸種の金屬を剥ぎ取ることを餘儀なくされたのであ

『この民はゆるやかに流るるシロアの水(平靜と信仰)をすてたり、此によりて主はいきよひはなれど、くみなぎりわたる大河の水をかれらの上に堰入れ給はん、是はアツシリヤ王とそのまゝの境の境勢とにして……ユダに流れ入り溢れにぎりて、その頃にまで及ばん(八章六——八)』

と豫言し、今日ユダが取らんとする政策は、やがて、國の滅亡を將來するであらうとの警告を與へた。

しかしながら民はこの警世の言に聽かない、聽かないのみならず、寧ろこの運動にその中に陰謀と反逆とを藏するものであるとした(八章十二節)。時非なりと見たイザヤは、止むを得ずしてその力を已が周圍に集りたる弟子達の養成に向け、彼等の中に『證詞^{あかし}をつかね、律法を封じ』(八章十六)又、『ヤーエは救なり』との意を有するイザヤ自らの名及びその二子の名は、共にイスラエルに對する豫兆として、頑固なる民の前に置かるることとなつたのである。

此處に我等は、イスラエルの宗教に於ける新らしい分子の導入を認めることができ。從來、神がその對象とし給ひしものは、國民全體であつた。然るに今、イザヤを

る年齢——四、五歳——に達せざる中に、今ユダを脅しつつある二人の王の地、即ち、イスラエルとダマスコとは滅びてしまふであらうとの二つのことに注目すれば善いのである。即ち、イザヤは神ユダの民と偕に在り、之を護り給ふが故に、外交政策に由つて國難を免がれんとすることの、根本的な誤策であることを指摘したのである。かくしてイザヤは、先づ王に對して警告を與へたのであるが、この警告は更に民衆にも徹底せしめなくてはならぬ、そこで彼は大きな告示板に、一般人の了解し得る平明なる字體を以て、

マヘル、シャラル、ハシバズ（速かに、掠奪は、疾く、獲物は）

と記し、民の中に人望ある二人の證者によつて、之を國中に布告した。（八章一節以下）そしてその翌年更に一子の生るるや（『われ豫言者の妻にちかづきし時云々』の語あるに見れば、子の生れたるは翌年であると思はれる）之にマヘル、シャラル、ハシバズと命名し、同時に、この子が未だ、『ババ、ママ（我父、我母）』と言ひ得ざる中にかの兩國はアッシリヤの爲めに滅ぼさるるであらうと豫言し、猶、

すて、善を撰ぶことを知るさきになんぢが忌きらふ二人の王の地は捨てらるべし』(七章一四、十六節)

といふのである。この句は初代のクリスチヤンの間には、キリストに對する豫言、特にキリストの處女降誕に關する豫言なりとされ、マタイ傳の記者は、その立場よりこの句を使用してゐるのではあるが(マタイ傳一章二十三節)元來此處に使用されてゐるを、とめ(アルマー)といふ字は妙齡といふ意味を有するのであつて、これは處女であり得るのであるが、處女と限られた譯でない。且又、ここに與へられた豫兆は、アハズ王に對して與へられたものである故に、もし、假りにそれが七〇〇年後に於ける救主の降誕に關係あるとしても、そのこと以外、別に當時の問題に對する解決の鍵となるべきものであらねばならぬ。そして、學者の間には、このを、とめ、と生れる子とが果して何を意味するのであるかに就て、種々な、そして複雑な意見が發表されてゐるのであるが、我等は、この句の解決の鍵として(一)インマヌエル、乃ち『神我等と偕にあり』との意味を有する子が生れることと(二)その子が未だ善惡を辯ふ

の際に備ふべく、城内の水道を巡視しつつあつたアハズ王に逢ひ、同盟軍の威嚇を恐れずして、只ヤーエをのみ信すべきことを勧告した。

『なんぢ謹みて静かなれ、アラム(シリア)のレヂン及びレマリヤの子烈しく怒るとも二つの爐^{もろ}残りたる煙れる片柴のごとし、懼るるなかれ、心を弱くするなかれ……若なんぢら信ぜずば必ず立ことを得じ』(七章四、九節)

しかも既に『林の木風の風に揺かざる如くに』(七章二節)その心が動いてゐた王と民とは、かうした勧告に對して快く應ずる色を示さない。イザヤは王に挑戦して『然らば何にても豫兆^{しるし}となるべきものを求めよ。それに由つて、ヤーエの言の眞であることを示すであらう』と宣した。しかし、既にアッシリヤに使者を出してしまつたアハズは殊勝らしく『我これを求めじ、我はヤーエを試むることをせざるべし』と答ふるのみであつた。

(ホ) インマヌエルの豫兆

イザヤは止むなく、王の拒否を犯して彼に豫兆を與へることとなつた。

『視よ、をとめ孕みて子をうまん、その名をインマヌエルと稱ふべし、そはこの子いまだ思を

アツシリア王、チグラテ・ビレセル（別名ズル）はシリアを経て南下し、イスラエルの王メナヘムをして貢を納めしむるに至つた（列王紀略下十五章）。然るにその後再びアルメニヤに亂あり、チグラテ・ビレセルの手がその方面に對して多忙なるに乘じ、シリヤ王レヂンはイスラエル王ペカと結んで反アツシリヤ同盟を造つた。そしてユダがその同盟に加入することが己等に利益であることを知つたので、アハズ王を慫慂し、若し聽かずば軍を率ひて侵略すべしと脅かした。既にその治世の始めに於て、レヂンのために海港エラトを奪はれてゐたアハズは、之に由つて大いに恐れを爲し、直ちに使をチグラテ・ビレセルに送つてその援助を求め、之に貢を納むるとともに臣服を誓言した。（列王紀略下十六章）。

このことは、ヤーエを棄てて外交政策に走ることであり、やがてはアツシリヤの宗教をユダに侵入せしめる所以である。ユダの宗教に取つて又その獨立に取つて、之は誠に重大なる危機である。豫言者イザヤは遂に起つた。彼は己が子にして、既に表徴的な名を有するシャッル・ヤシニブ（殘餘は還らん）と云ふに、當時、エルサレム籠城

民の中に住みて、穢れたる唇の者』であるとの自覺を有したのであつたが、しかも神はイザヤを個人として聖め、之をその聖旨傳達の爲めに用ひ給ふべしとのことを教へられたのである。かやうにしてイザヤはこの幻に於て、國民的神觀より宇宙的神觀へ民族的神觀より個人的神觀への第一步を踏み出したものと言ひ得るのである。そして『我誰を遣さん、誰かわれらの爲めに往くべきや』(六章八)との神言を聞いたイザヤは『我ここに在り、我を遣はし給へと』答へて、豫言者としての首途を爲したのである。

彼はユダの罪を極力排撃した。それはイスラエルの聖者なる神の惡み給ふところであるからである。さうした事態を放置することは、やがてユダが民族的なる滅亡をすることとなるからである。

(二) アハズ王治下に於けるイザヤの活動

ヨタムはウジヤの死後二年餘にして崩じ、その子アハズが之を繼いだ。その間に於て、世界の大勢は著しい進展を見たのである。七三八年、既にアルメニヤを平定した

くべきかと、そのとき我いひけるは、われ此にあり、我を遣はし給へ」

(一) 彼は、ウジヤ王を失つたが、ここに彼の眞實なる王は天地の主なるヤーエであることを示されたのである。ウジヤ王を通してユダを護り給ふといふ神では無く、親ら榮光の王としてその民を支配し給ふ神であることを見たのである。

(二) それは『聖』なる神である。『聖』といふはその本來の意味に於て、單に神に屬するもの、人に屬するものと區別さるべきものとの謂であつた。然るに今イザヤはそれが道德的な内容を有する『聖』であることを示されたのである。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな』と同じ語が三度び繰り返へされてゐるのは、ヘブル語に於て最上級の形容詞を表はす方法であつて『最も聖』といふ意味を有する。イザヤは今道德性の最高顯現としての神を見たのである。

(三) かうした神の前に於て、前項に述べたやうな罪を犯してゐるユダの民は『穢れたる唇』の民、潔めらるべき必要のある民である。

(四) イザヤは、ホセアと同じやうに、民の罪を己の罪なりと感じ『穢れたる唇の

國運は進展してゐたのであるが、今やそのウジャ王は世に無いといふのである。

イザヤは憂鬱とならざるを得なかつた。そして、せめてもの慰を得やうとの欲望より、彼がその魂の休息所としてゐた神殿へ足を向けた。そしてその入口に立つて、其處に取り行はれる禮拜の様を見たとき、彼の潜在意識の中にあつた一切の問題は、此處に幻となつて彼に經驗され、それを通して彼は確乎としたる神よりの召命を受けたのであつた。その間の消息はイザヤ書第六章に詳記されてゐる。

『ウジャ王の死にたる年、われ高くあがれる御座にヤーエの座し給ふを見しに、その衣裾は殿にみちたり、セラビムその上にたつ、おの／＼六の翼あり、その二をもて面をおほひ、その二をもて足をおほひ、その二をもて飛翔り、互に呼びひけるは、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな萬軍のヤーエ、その榮光は全地にみつ、斯くよばはるものゝ聲によりて、國のもとを揺うごき、家のうちに煙みちたり、このとき我いへり、禍なるかな我ほろびなん、我はけがれたる唇の民の中に住みて穢れたる唇のものなるに、わが眼萬軍のヤーエにまします王を見まつればなりと。こゝにかのセラビムのひとり火箸をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にたづさへて我にとび來り、わが口に觸れていひけるは、視よこの火なんぢの唇にふれたれば、既になんぢの惡は除かれ汝の罪は清められたりと、我またヤーエの聲をきく、曰く、われ誰を遣はさん、誰か我等のために往

都、そして南北分裂以前に於ては、全へブル人の首都であつた、そのエルサレムに生れ、又育つたことは彼に取つての大なる誇プライドであつた。神殿も宮殿も、そしてその街々も悉く彼には懐かしいものであり、又誇りがましいものであつた。彼は四代の王に歴仕したやうであり、又王に對して直接勸告するの自由を有した點より見て、彼は恐らく王家を繞る貴族の一員であつたと思はれる。

されば、英王ウジャヤの存在はイザヤに取つて今一つの誇を加へるものであつた。この英王に由つて輝かしくされたエルサレムは、この英王によつてやがて四周の國々に冠たるであらう。さうした望が青年イザヤの胸中にあつた。然るにウジャヤ王は、その治世の中道に於て癩病に罹つたのである（列王紀略下十五章アザリヤとあるはウジャヤのことである）。癩病は罪の故を以てヤーエが之を撃ち給ふによるものであると信ぜられてゐた當時にあつて、これはイザヤ等の如き、神に忠實なるとともに眞實なる愛國者でありしユダヤ人に取つての大なる打撃であつた。神の怒を受けたと認められたウジャヤは退隱し、ヨタムがその攝政となり、疑惑は疑惑とし、打撃は打撃としてその儘

惡しきものを義となし、義人より其の義を奪ふ」(イザヤ五章二十一、二十三節)

かかる輩にあつては、最早や良心といふが如きも爛れ終つたものであつて、何の用にも立たない。善と惡との位地が顛倒するのである。

「禍ひなるかな、彼等は惡をよびて善とし、善をよびて惡とし、暗をもて光とし、光をもて暗とし、苦きをもて甘しとし、甘きをもて苦しとする者なり」(イザヤ五章二十節)

しかも凡てこれ等のことは、神に對する冷淡にその源を有し、又その結果として神に對する冒瀆心を醸成せしめる。『神の攝理といふものがあるならば、我々に早くその禍を下せばいいでは無いか』繁榮と奢侈との中にあつて、彼等はいかに廣言するのである。

『かれらは云ふ。その成んとする事をいそぎて速かになせ、我等これを見ん、イスラエルの聖者のさだむることを逼らせよ。我等これを知らんと』(イザヤ書五章十九節)

(ハ) イザヤの召命

かうした社會狀態を前にして、ヤーエの特別なる召命を受けし豫言者が即ちイザヤである。彼はアモス、ホセア等と異なり、生粹のエルサレムつ兒であつた。ユダの首

して全く地を拂ふに至らしめ、種々なる外國品の使用、思ひ切つたる新らしき身装、そして飲酒の弊風等、極東日本に於ける銀座街頭のモダン、ガールを、その儘古に返したる有様であつた。そして、その結果は、我等が今日見ると同一のものであつて男女關係の紊亂、貞操心の喪失となつて現はれたのである。

『シオンの女輩はおどり、項うなじをのばして歩き、眼にて媚をおくり徐々しづかとして歩みゆく、その足にはりん／＼と音あり……このゆえに主シオンの娘等の頭かしらをかぶるにし（毛斷ガールの極るところ？）ヤーエかれらの醜みにくきところ所をあらはし給はん（シヨート・スカートの極て？）その日、主かれらが足に飾れる美はしき釧をとり、環珞、半月飾、耳環、……指環、鼻環……金囊……鏡、細布の衣……などを取除き給はん……その日七人の女、一人の男にすがりていはん、我儕おのれの糲をくらひ、己の衣を着るべし、ただ我儕になんぢの名を稱ふことを許して、我等の恥を取り除けと（イザヤ書三章十六節——四章一節）禍ひなるかな、彼等は葡萄酒をのむに丈夫なり。濃酒こまじいを和するに勇者なり。（五章二十二節）

そして、かうした社會状態にあつての必然的從屬物たる司法の不正も、又その勢を逞しくしてゐた。

『禍なるかな、彼等は己をみて智しとし、自ら顧みて聰さとしとする者なり……彼等は賄賂によりて

(ロ) イザヤの當面したる社會問題

しかも、北方イスラエルに於けると同じやうに、かうした平和と繁榮との利潤を受けるものは只上流階級の人々のみであつて、下層の人々はいやが上にもその悲慘の度を加へ行くのであつた。かくして中流階級は次第にその存在を失ひ、社會惡は愈々その度を加へて、國民は解體への途を辿るの外無き有様であつた。

イスラエルに於けると同じやうに、資本家は次第にその勢力を振ひ來つて天然の資源を專有し、自作農は失はれて、地主は増加し、それがために、一方に於ては土地はその生産力を減じ、他方貧者はその住むべき家もなく、又、如何に勞働を希望するとも、資本家の許可なくしては田圃に鋤を入るることさへも許されぬ有様であつた。

『禍ひなるかな彼らは家に家を建てつたね田圃たはたに田圃をましくはへて、餘地をあまさず。已ひとり國のうちに住まんとす。萬軍のヤーエ我耳につけて宣はく、實に多くの家は荒れ廢れ、大にして美しき家は人の住むこと無きに至らん。十段の葡萄園僅かに一バテを實り、一ホメルの穀種は僅かに一エバを實るべし』(イザヤ書五章八—十節)

富みたる者の贅澤、特にその女達ちの虛榮は、ヘブル人傳統の思想たる質實の風を

ヤラバアム第二世治下に於けるイスラエルの繁榮に少しく後れて、南方ユダにも類かしい日が訪れて來た。ウジア王(七八二—七三九年)の長い平和の御代は、ユダの幸福を増進させないでは置かなかつた。ウジア王はペリシテを撃ち、又アラビア人及びエドム人を征服したのであつて、ユダの領地は南紅海の岸にまで及び、嘗てソロモンが造營した後エドムに奪はれたエラトの港も再びユダの占むるところとなつたのである。かくして外國との貿易は隆盛となり、異國の珍品はタルシシ(今のスペイン)の船舶によつて世界の各地から舶載されて來た。王自らの指令によつて、エルサレムの城壁には堅固にして美しい城樓が設備され、都の街巷には堅石及び象牙を以て造られたる華麗宏莊な文化住宅が建ち並び、その家々には文化生活に適はしい凡ゆる家具と裝飾とが具えられてゐた。轉じて田園地方に及べば、其處には王の主張によつて特に農耕の振興が策せられ、新たな耕地、果樹園の開発があり、灌漑の設備は整へられ、又農園の勞働者を保護する爲めの望樓が新設され、國中到るところ五穀豊かに、乳と密との流るる樂園と化してゐた。

王シャルマネセルのサマリヤ包圍となり、三年間の籠城を續けたる後、シャルマネセルの子サルゴン王のために、首都は全く破壊され、民は他へ移して散らされ、他邦よりの移住民と僅かに残れる下層の人々を以て、アッシリヤの一州たるサマリヤ地方が造り上げられたのであつた。かくして光榮あるイスラエルの歴史は此處に悲慘なる終局を告げ、南方ユダのみが残されることとなつた。そして、アモス及びホセアが闡明したる眞理は、この恐るべき實物教訓によつて愈々その重要性を加へつつ、我等への遺産として與へられたのである。

第三章 『聖』の豫言者イザヤ

ウジヤ王治下のユダ——イザヤの當面したる社會問題——イザヤの召命——アハズ王治下に於けるイザヤの活動——インマヌエルの豫兆——北方イスラエルの滅亡——ヒゼキヤ王と新埃及派の活躍——セナケリブの侵略とユダの宗教改革——セナケリブの再征とイザヤの晩年——

(イ) ウジヤ王治下のユダ

神の愛は單なる溺情主義センチメンタリズムではない。又神は放恣の心を以て世に對し給ふのでない。神の愛は主義と原則とを有する愛である。故にその愛を拒否した結果は、個人に取つても、國民に取つても只滅亡の外は無いのである。『人の蒔く所は、その刈る所となる』(ガラテヤ書六章七節)である。

『われ汝をめとりて永遠にいたらん。公義と公平と寵愛と憐憫とをもてなんぢを娶り、かはることなき眞實をもて汝をめとるべし、汝ヤーエを知らん』(二章十九、二十節)

と深き愛を示し給ふヤーエであるが、しかも彼に叛き行く時は

『かれらは風をまきて狂風はやちをかりとらん、種まぐところは生長おひたてる穀物なく、その穂はみのらざるべし、たとひ實るとも他邦人これを呑まん』(八章七節)

であり。

『わが民は智識なきによりて滅ぼさる』(四章六節)である。

不幸にしてアモス及びホセアの警告は、イスラエル人の聽くところとならず、イスラエル最後の王たるホセアの謬れる外交的政策は、遂に七二三年に於けるアッシリヤ

ゆきて妓女あなびめとともに居り、淫婦たはれめとともに献物をそなふればなり、悟らざる民は亡ぶべし」(四章十

三、四節)

ホセアは、己が體驗を省察する時、妻ゴメルが再び娼婦の群に入つたことに堪え難い憎惡を感じる。しかも、かうした娼婦の制度は、イスラエルがその神を拜する方法として採用してゐるところのものでは無いか。然らば、ヤーエは、人たるホセアが感ずる道德性さへも有し給はないのであらうか。決して然らずである。それは明らかに、イスラエルがヤーエの眞意を誤解してゐるのである。

『われは愛情をよろこびて犠牲いけにえをよろこばず、神を知るを悦ぶことは燔祭にまされり』(六章六節)

ヘセド(愛情)とは最も崇高にして堅實なる愛を意味する。コリント前書十三章に描かれたるが如き愛が即ちこの種の愛である。この愛が世に存在する時、それは一切の不正不義、殘忍壓迫を爆破してしまふ。これは義のやうに外より壞す力ではなくして、内より打破る力である。しかも、その愛は、神がその愛情の所有者で在すことを知るに由つて始めて世に行はれるのである。

うであるとすれば、神に對する反逆を、夫に對する妻の反逆なりと體驗し、さうした罪の原因が情性の強調、乃ち『淫行の靈』に達はさるることであると悟るに至つたホセアが、この偶像禮拜に對する反抗の第一聲を擧ぐるに至つた事は、誠に自然の事であると領づかれる。

(ホ) 宗教の腐敗が招來する國民性の破壊

偶像禮拜によつて、淫行の靈を植ゑつけられたイスラエルの人々に於ては、その一切の宗教行爲が、『淫行』そのものであつた。既にホセアの妻が一例を示してゐるやうに、娼婦達が『聖き女』として神殿に奉仕し、只祭祀の盛んなるを以てヤーエに對する勤行終れりとなして居たのである。かやうにして國民生活の根源たる宗教そのものが、姦淫の壇場となつてゐるのであれば、淫蕩の風が國內を風靡するであらうことは想像に難く無い。

『ここをもて、なんぢらの女子^{むすめ}は淫行をなし、なんぢらの兒の妻は姦淫をおこなふ。我なんぢらのむすめ淫行をなせども罰せず、なんぢらの兒の妻姦淫を行へども罪せじ、そは汝らも自ら離れ

像禮拜は特に美の方面、人に於ける情の方面を強調したるものである。故に偶像禮拜は、眞實の宗教たるを得ない。

イスラエルの豫言者達が、偶像禮拜に對して強い反對を示したのは、彼等が直覺的にその宗教的危險を知つてゐた爲であると思はれる。しかも成形的な偶像に對して明白なる反對の聲を擧げたのはホセアを以て矯矢とする。ホセア以前の豫言者達はバアル禮拜に反對したのではあるが、それはバアルが異教の神であつたからである。然るに一方、イスラエルの首都たるサマリヤに於てはその開國の祖たるヤラベアム一世（九三七—九一三年）以來、金の犢の像を以てヤーエを拜むことが行はれてゐた。しかもエリヤもエリシャも又アモスもそれに對して何等反抗の聲を擧げて居ないのである。（列王紀略には絶えずネバテの子ヤラベアムの罪として犢禮拜の攻撃が行はれてゐるが、しかし列王紀略はホセア以後の豫言者達の感化を受けた人々に由つて俘囚時代に記されたものである）。

ある人々の説に由れば、犢禮拜は一種の陽物禮拜であつたとされてゐる。もし、さ

「サマリヤよ、なんぢの轡は忌きらふべきものなり、わが怒、かれらにむかひて燃ゆ、何れの時にか罪なきにいたらん。この轡はイスラエルより出づ匠人たくみのつくれるものにして、神にあらず、サマリヤの轡はくだけて粉とならん」(八章五、六節)

宗教とは人の心が神の心と合致することである。人の心は之を智情意の三方面に見るを得るのであり、神の心は、その活動の方面よりして之を眞、善、美とするを得る。人の智が神の眞を把へ、人の情が神の美を、人の意志が神の善に合致するところに眞宗教があるのである。そしてこれ等は皆、中心なる人格に統一されなくてはならぬ。



故に圖に示したやうな三角形は、それが正三角形であることを必要とする。されば、例へば、理智一點張りの宗教といふが如きは、この正三角形的關係を打破するものであるが故に不可であり、單に倫理的方面のみを強調するものも同じく不可である。偶

エに歸ることをせず、又もとむることをせざるなり、エフライムは智慧なくして愚かなる鳩のごとし、彼等はエヂプトにむかひて呼求め、またアツシリヤに往く』(八章 一十一節)

(ニ) 淫行の靈と偶像禮拜

ヤーエに對するイスラエルの無理解は、その宗教觀念に於て如實に現はれてゐる。彼等は、その穀物、葡萄酒、橄欖油等が、その實ヤーエの賜であることを知らずして猶未だ地方神の觀念に囚はれ、バアルがさうした地の産物を與へるのであると誤信し遂にバアル禮拜を以てヤーエを拜むことをしてゐる。これは明らかにその正しき夫なるヤーエの愛に叛き『淫行』を行ふことでは無いか。

『彼が得る穀物と酒と油はわが與ふところ、彼がバアルのために用ゐたる金銀はわが彼に増あたへたところなるを彼は知らざるなり』(二章八節)

かやうにしてイスラエルに盛行したるものは偶像禮拜である。

『わが民、木にむかひて事をとふ、その杖かれらに事をしめす、是かれら淫行の靈にまよはされ、その神の下を離れて淫行を爲すなり。彼等は山々の嶺きにて犠牲を獻げ、岡の上にて香を焚き、橡樹、楊樹、栗樹の下にてこの事を行ふ』(四章十二、十三節)

「イスラエルの子等よヤーエの言を聴け、ヤーエこの地に住める者と争鬪あらそひたまふ、それは此地には誠實なく、愛情なく、神を知る事なければなり、」(四章一節)

人は自ら知らざるものを愛することはできない。イスラエルがヤーエを愛し得ざるは、ヤーエを眞實の意味に於て知らないからである。王位の争奪が激しい、それは彼等が眞實にヤーエの聖旨に従ふ王者の擁立を謀らないからである。

「かれら王をたてたり、然れども我によりて立しにあらす、かれら牧伯きみをたてたり、然れども我がしらざるところなり」(八章四節)

又、彼等は外交政策に由つて己が國の安全を圖らうとしてゐる。しかもこれは悉くヤーエに對する無智から出づるのである。ヤーエが如何なる神であるかを知り、ヤーエにのみ依頼たよむことをするならば必ず救はるべきであることを、彼等は無益なる外交政策に由つて立たんとしてゐるのである。

「もろくの王はみな仆る。かれらの中には我をよぶもの一人だになし、エフライムは異邦人にいりまじる。エフライムはかへさざる餅もちとなれり、かれは他邦人らにその力を呑まるとども之を知らず、白髮その身に雜り生れども之を悟らず……彼等はもろくの事あれどもその神ヤー

に癒されたるを知らず、われ人にもちゐる素、すなはち愛のつなをもて彼等をひけり」(十一章一—四節)

しかし、世には父子の愛よりも更にその靈的意義の高いものがある。それは夫妻の間に於ける愛である。父子間の愛は肉的關係に條件づけられる。しかし夫妻間の愛は自由なる人格の發現に由るものである。そして靈も肉體も全く相互的に捧げ合ひ得るものである點に於て、人格者の行ふ最も勝れたる自由撰取である。神はかくの如き崇高絶大なる愛をその本質とし給ふ。ホセアはその體驗によつてこのことを學んだのである。そして、愛はその叛かれたる苦しみによつて愈々その深度を加へる。否愛は苦しむまでその眞面目を發揮し得ないのである。さればホセアの見たる愛の神は、苦しみ給ふ神であつた。この點に於て、ホセアは既に十字架の有する重大なる意義の曙光を認め得たものだといひ得るのである。

然らば、何が故にイスラエル人は、罪を犯して神に叛いたのであらうか。ホセアに従へば、それは彼等が神に關する智識を缺いてゐるからである。

章六節) ロアンミ(我民に非ざる者)(一章九節)等が示してゐるやうに、ホセアの實子で無かつたもののやうである。乃ち、娼婦生活を送つた多くの女に見らるるやうにゴメルも一旦清潔なる家庭生活に入つた後に於て、舊來の放逸なる生活の誘惑を拒み難く、遂に再び墮落者の群に入つたもののやうである。

かやうにして、ホセアは、愛の裏切りが如何に悲痛なものであるかを體驗した。しかもそれに由つて、彼はゴメルに對する彼の愛が如何に深刻なるものであるかをも知つた。叛ける彼女に對して彼の愛は愈その熱烈を加へるのである。かくして彼は己が生涯の中に、神とその民イスラエルとの間に存する愛の關係を學び得たのである。

(ハ) 神に對する無智が罪の原因

アモスに於て『義』であつたヤーエは、ホセアに於ては『愛』として見られたのである。それは第一に父が子に對する者であつた。

『イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ。我わが子をエヂプトより呼いだしたり……われエフライム(イスラエルの別名)に歩むことを教へ、彼等をわが腕にのせて抱けり、然ど我等は我

と解釋してゐる。その理由を舉げれば

(一) 豫言者達が、異常なる行爲に出でることは、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル等の豫言者の例に見るも明らかなことである。神のことを忘れて罪に走りつつある民に對して、彼等の意表に出づる教訓を與へるためには、何等か煽情的な行動を必要としたのであり、又それ等の行動自體が一の表徴であつて、その實例教訓に由つてその教説を裏書きするものであつたのに見れば、ホセアの場合に於けるかうした例外的行爲も、寧ろ豫言者にはあり得べきこととして容認さるべきである。

(二) ゴメルは神殿に於ける娼婦であつた。かうした所謂『聖き女』はカナン人の感化を受けた自然禮拜の產物であつて、彼等娼婦に近づくことに由つて、人は神と交はるのであるといつた信仰が一般に行はれてゐた。故にホセアが、この種の女を娶つたことの中に、一種の宗教的意義があつたことを推想するは困難でない。

かくして、ホセアは身代金を以て、奴隸の境遇にあるゴメルを娶つたのであるが、ゴメルに生れた三兒の中、第一のものを除いては、その名ロルハマ(憐まれぬ者)(一

彼自身がその渦中にありしだけ、それは極めて深刻なる體驗であつたのである。しかも彼が豫言者として召され、神に關する眞理を語らんがためには、より悲慘にしてより痛切なる體驗が彼を待つてゐたのである。

(ロ) 慘憺たるホセアの家庭生活

ホセアの生涯に就て、ホセア書は二個の記載を持つてゐる。一は一章二章であつて何人か第三者が彼のことを記してゐるのであり、二は第三章であつて、ホセアの自叙傳である。この記事に由れば彼はヤーエよりの命を受けて『淫行の女』を娶つたといふのである。前代の聖書解釋者達は、このことが餘りにも無理なる命令と見らるゝとの理由に由り、ホセアはその妻ゴメルを、彼女が未だ純潔の處女であつた際に娶つたのではあるが、その後彼女が墮落して、彼の家庭を破壊したか、又はホセアは彼女を純潔のものと信じて結婚したのにも拘らず、後に至つて彼女が淫行の女であつたことを發見したのだと見てゐた。しかし、近代の聖書學者達は、矢張り、ホセアは神命に由つて、當時神殿を中心として存在してゐた娼婦の一人を身請し、之と結婚したので

サマリヤであつたと思はれるのであり、その點に於て、野の人であるのを常としてゐた豫言者の群に、始めて現はれた都會人である。それとともに彼は成書豫言者中にあるのは、北方イスラエルを生地とする唯一の豫言者である。

アモスは外國人たるユダの一市民として、イスラエルの罪を指摘した。彼にはその點に於て問題を正確に診斷し得る利益があつたといへる。しかしそれは例へば他國に傳道する宣教師の場合と同じいのであつて、罪より來る國の滅亡に對して、己の明を誇ることはあつても、それに對して悲痛を感ずることはさ迄深刻でなかつたかも知れない。

しかし、ホセアに取つては、それは己が愛する國に來らんとする災厄であり、己が同胞の犯せる罪である。特に、當時の思想に従へば、神に對立するものは個人ではなくして國民である。神が一人々々の罪に對して一人々々に取り扱ひ給ふといふは、エレミヤ以後に起つた思想である。さればホセアに取つては國民の犯した罪、そしてその醜と、その怖るべき結果とは、恰も己が犯せる罪と同様に感ぜられたのであつて、

保護を與へてゐた。然るに、ヤラバアム二世の死後に於ては、イスラエルの君主は相繼いで暗殺の犠牲となり、ヤラバアムの子ザカリヤが六ヶ月の王位を繼ぎ得たのを外にしては、イスラエル滅亡までに在位した六人の王者中、父の位を繼ぎ得たものはメナヘムの子ペカヒヤのみであり、他は悉く他より奪ひたる王位を他の爲めに奪はれたのである。そして各王の在位年限も皆短期であつて、次の如きものである。

ザカリヤ(六ヶ月間)、シャルム(一ヶ月)、メナヘム(七四五—七三六年)、ペカヒヤ(二ケ年)、ペカ(七三五—七三三年)、ホセア(九年)。

この間の興廢を物語る列王紀略下第十五章は『暗殺』の語をその鍵語としてゐる程に、血醒いものである。されば、さうした混亂の渦中に投せられた下層民の狀態が、如何に悲惨であつたかは想像するに難くない。アモスの時代に於ては法の惡用が問題であつた。しかも今や、惡用にも善用にも、法そのものが存在しなくなつたのである。この危機に際して神の召命を受けたのが豫言者ホセアであつた。彼の豫言者的活動は七四〇年より七三五年迄の間であつたと思はれる。彼の生地は北方イスラエルの首都

けなかつた爲めに、悲しい運命に遭遇した。そして彼が闡明した原則は、今もなほ神治しめすこの地上に行はるべきものである。人種の無差別、經濟的機會均等主義を除外して、如何ほどの敬虔振りと熱心振りとを示さうとて、そこには眞實の宗教はないイエスの宗教は勿論存在せない。

第二章 『愛』の豫言者ホセア

ホセアの直面したる問題——慘愴たるホセアの家庭生活——神に對する無智が罪の原因——淫行の靈と偶像禮拜——宗教の腐敗が招來する國民の破滅

(イ) ホセアの直面したる問題

アモスの熱烈な豫言と警告とがあつたのにも拘らず、イスラエルに於ける惡は愈々益々その度を加へた。ヤラベアム二世が未だ生存中であつた時は、國內に於ける不正邪惡が横行してゐても、尙強固な政府の存在といふことが、ある程度まで人民への

和』を望むものの要務であることを高調してゐる。社會運動者、眞實なる宗教家の職分にして、平和の爲めの努力を除外して全きを得るものはない。アモスはこの點に於ても純正なる神の人の先達であつた。已に説いた様な、國民的自負を持つたイスラエル人に對して、彼はヤーエの裁決が、何れの國とも同じ原則の上に立てられることを宣言し、イスラエルも又その『三つの罪、四つの罪』の爲めに、懲罰を受くべきことを告げた（二章六―八）。更に、イスラエルを亡ぼすべき強敵アツシリアさへ、ヤーエの起し給ふものであることを宣言するに至つて（六章十四）アモスの世界主義は、當時のイスラエル人にとつて革命的なものであつた。彼は更にいふ、『ヤーエ言たまふ。イスラエルの人々よ、我は汝らを視ることエテオビア人を視るがごとくするにあらずや。我はイスラエルをエヂプトの國より、ペリシテ人をカフトルより、シリア人をキルより導き來りしにあらずや』（九章七）と。神はキリスト教國を、キリスト教國なるが故に、特に庇護し給ふのでない。神の命じ給ふ正しい人生原則を遵奉する正義の國民に與みし給ふのである。アモスの言を聞いたイスラエル人は、この眞理に耳を傾

政治上の腐敗は、經濟上の不平等となつて現はれた。しかも當時の信條に従へば、富むことは神の祝福の徴であり、貧しいことは、神の怒りの現はれであるとせられてゐた。十八世紀から十九世紀にかけて、『成功』といふ神が、教育家や宗教家の間に尊崇されて、それがただけ民衆の膏血を絞つたものであつたにせよ、『富』を蓄積したものは、模範の人として、教訓の材料とされたのは、同じ思想の復興レバイバルであつた。眞實の宗教家であり、眞實の社會運動者であつたアモスは、近代の社會運動者と同じように、先づこの迷信に向つて打撃を試み、神の名による恐ろしい懲罰の宣言を富者に向つて發したのであつた。『視よ、日汝らの上に臨む。その日には人汝らを鈎にかけ、汝等の遺餘者を釣魚鈎にかけて曳き出ださん』と(四章三)。

(ル) 世界同胞主義の高調

エチ・ヂ・ウエルズは、かの『世界文化史大系』の序文に、世界の各國民が、誤まられたる歴史の教育によつて、各自の國を世界に於ける最優のものと信ずる結果として、いかに世界の擾亂を招來し來つたかを指摘し、世界同胞の思想を養成することが、『平

國の一たらしめたのを、恰も國力進歩の結果であるかの様に誇つてゐる或る國の施政者のように――。これに對するアモスの諷刺は辛辣である。『身を安くしてシオンに居る者思ひわづらはずしてサマリヤの山に居る者、諸の國にて勝れたる國の中なる聞え高くして、イスラエルの家に就き従はざるものは禍なるかな、汝等は災禍の日をもて尙遠しと爲し、強暴の座を近づく』(第六章――六)。そして、彼等の樂天主義にましてアモスを怒らしむるものは、その樂天主義から來た腐敗政治である。新たに開發せられねばならぬ資源も、無用な出征も、皆、施政者と結托した政商の利益の爲めにその利權を壟斷せられ、それがために、その國に取つては死活問題であるべき筈の、殖民問題も、海外發展も、酷たらしいまでの停滯を見てゐる、二十世紀のある國のやうに、施政者が皆その地位を私益の爲めに利用し、その利得によつて華美放埒の生活をしてゐたことであつた。同時に彼の怒りは呪の言となつて表はれる。曰く『この故に彼らは捕はれて、俘囚人の眞先に立ちて行かん、かの身を伸したるものの騒ぎの聲止むべし』(第六章七)。

ト教徒、ナポレオンの壓迫の下に、ヴンクトリア朝の文化を育んだ英國などを擧げてゐる。イスラエルは今一時の繁榮に酔つて、それがやがて襲來する嚴冬の前の小春日和であることを知らない。アッシリアは既に興隆して世界を席捲しようとしてゐる。イスラエルにもやがてその手は延びて來る。しかも施政者等はイスラエル永遠の強味であるべき民衆の權を蹂躪し、國體の原則であるべきデモクラシーを破壊してゐる。モーセ、エリヤが、王の前に立つたのと同じ勇氣と決心とを以て、アモスは權者の前に立つた。彼は纖細な描寫を用ひて、イスラエルの讐敵なるペリシテ及びエヂプトを陪審者として召喚し、イスラエルの惡を裁かせる。

『アシドドの一切の宮殿に傳へ、エヂプトの地の一切の殿に宣て言へ、汝等サマリヤの山々に集り、その中にある大なる紛亂を見、その中に行はるる虐遇を見よ、彼等は義しきを行ふことを知らず、虐げし物と奪ひたるものとを積蓄ふ』(三章九—十)。

かうした惡政は必ず國民の中堅を疲弊させ、亡國の因となるべきであるにも拘らず、彼等は淺薄な樂天主義を樂しんでゐる。歐洲の三強國の沒落が、彼をして世界の五大

行ふことを反省する力を失つたのである云々』

外國にある罪惡を指摘することは易い。しかし、同じ原則を自國に適用することは難かしい。アモスが、イスラエルに取つて『歡迎されざる異國人』であつた譯は、彼が、他國の罪を鳴らすと同じ主張の下に、イスラエルの罪と、それに伴ふ罰とを宣言したことにある。しかしアモスは單なる熱狂家、單なる批難者では無い。多くの切實な社會改革者と同じ様に、社會惡の除去は、制度の革新や、恐怖に訴へる威赫を以て爲し得るのでなく、民心の根本的な轉回にあることを知つてゐた。

『汝ら善を求めよ、惡を求めざれ、汝らが生きんために、汝らが云ふ如く萬軍の神ヤーエ汝らと偕に在さん。汝ら惡を惡み、善を愛し、門(判廷)にて公義を立てよ』(五章十四—十五)。それが彼の豫言の基調であり、彼が衷心の叫であつた。

(ヌ) 懲罰の宣言

家貧にして孝子出で、國艱にして忠臣出づ、ルナンは世界の歴史を通觀して、外界の壓迫が文化の發展に奇與した事實を發見し、その例として、迫害の中にあつたキリス

ふところとなるであらう。さうした恐ろしい宣言がアモスの口から矢繼早に放たれる（一章三、二章五）。これを聞いたイスラエル人は、多年の讐敵たる國々の罪と罰とを聞いて、この珍奇な豫言者のいふところに全く共鳴し了つたのに相違ない。しかもかうした不用意の間に、彼等は彼等自身に適用されるべき、社會原則に心からの承認を與へて居たのである。

（リ） 回心の慚慚

オベリン大學總長キング博士は、大戰後米國の青年男女間に現はれた道德心の頽廢に關して、左の意味のことをいはれた。

『彼らは非基督教國の不道德なことを教へられた。そして少さい時から、そのために奉仕をすることを學んだ。それは可い。そして又彼らは他國からの移民の間に行はるる惡事のことを告げられた。そして、彼等を善導することがアメリカ市民の大きな責任であることを教へられた。それも可い。しかし、その結果として彼等は、不道德、不品行とは、外國人の間にのみ存するものと考へる傾向を生じ、從つて自分達の

イスラエル無くしては、ヤーエは氏子を有しない無縁の神となつてしまふ。さうした思想が彼等の間には流れてゐた。アモスはかうした宗教思想の誤謬を指摘した最初の豫言者である。そしてヤーエは只にイスラエルの神であり給ふばかりで無く、全世界の主であり、ヤーエの民となる條件は、道德的正義にあることを高調したのであつて、彼はイスラエルに於ける、道德的唯一神教の創始者とせられてゐる。

彼の論法は、彼の主張を徹底させるために、巧みに按配されたものであることが認められる。アラム(ダマスコ)がギレアデの民を農耕の器具を以て拷問した慘虐、ペリシテ(ガザ)及びフェニシア(ツロ)が、俘囚を奴隸として、異國人にそれを渡した暴戾、エドム(エサウの末裔)がイスラエル人(ヤコブの末、兄弟の末)に對して行ふた戦争の非理、アンモンが土地侵略の野望を充たさうとてギレアデの妊婦を割いた不道、モアブが、その敵エドム王に墳墓を與ふるの武士的禮義を忘れて、その骸を焼いた不義、南方ユダが、先祖の堅い法度の道を離れてヤーエに背いた不道德の罪。是等の國が犯し來つた三つの罪四つの罪(數限り無い罪との意)は必ずヤーエの罰し給

危険を豫知したのは、荒野に於ける教養の賜であつた。彼が牧羊者と桑の樹造りとの兩職を有したことは、彼が時季に應じて職業を求め行く貧しい身分であつたことを示す。しかも彼は世界の大勢を熟知してゐたのである。それは、彼が荒野の生活に由つて獲た鋭い觀察眼の結果だといはなくてはならぬ。それとともに、都市の腐敗は、都市人の氣付かない程度に於て、強烈に彼に感ぜられたのである。豫言者の資格として重要な成素である『野の人』たる彼でありし故に、『政治上の指導者』として『ヤーエ宗教の擁護者』として、又『デモクラシーの主張者』として、彼は完全なる豫言者の資格を具へ得たのであつた。

(チ) アモスの對策

アモスが彼の豫言の對象としたイスラエルの民は、既に述べたやうに、ヤーエの撰民としての意識の極めて熾烈な人々であつた。他の國民には他の神々がある。しかしヤーエはその中にあつて『戦に強き』神である。そしてイスラエルは彼の氏子であつて見れば、イスラエルにヤーエの必要があると共にヤーエにもイスラエルの必要がある。

を以てする勞働、素樸なる田舎人、ケンタツキーの寂しい森、といったような、かうした教育が乃ち獨立性、創作性、指導性を誘發したのである。翻つて今日兒童のいくたりが、この種の教養を受けてゐるのであらうか。權威ある人となる爲めには、世才に長けた人々とか、目的のハッキリせぬ遊戲、又は、順序よく仕組まれた教科書、といった風な書物によらないで、偉大なる天然の無秩序や、それに親しむことによつて、兒童の精神に與へられる感化といった種類の教材が必要である。云々』

アモスは、職業的祭司又は豫言者の群が有したような、秩序正しい教育は受けなかつたが、シャープ氏の所謂『權威を附與する教育』に於ては、聊かも缺くるところがなかつたのである。

彼の生地デコアは、ベツレヘムの南六哩、エルサレムからは、十二哩を隔てたところであつて、永遠の靜寂を代表する死海の平原を見下すべき山阪の一邑である。彼はこの偉大なる天然の無秩序に日毎に親炙することによつて、眞理を見るの眼光を養はれた。イスラエルの人々が鼓腹擊壤しつつあつた時に、早くもその國に及び來るべき

に基づく。

アモスはこの種の人々と全くその行き方を異にしてゐた。『ヤーエ羊に従ふ所より我を取り、往て我民イスラエルに豫言せよと宣へり』（七章十五）と彼はいふ。彼は孜孜として彼の生業に従事してゐた時、神が彼をして強て豫言せしめ給ふたのである。止むに止まれぬ彼が内心の要求は、彼を驅つて萬事を擲つて彼の信する真理の言を發せしめたのである。『獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや、主ヤーエ語りたまふ、誰か豫言せざらんや』（三章八）とは、彼の飾らない内的經驗であつて、このことが彼をして眞實なる宗教家、權威ある社會運動者たるを得しめたのである。

（ト） 體驗より來れる教養

デイ・エル・シャープ氏は “Teaching for Authority”（權威への教育）と題する論文に於て、大要次のやうなことを云つてゐる。

『かのナザレ村の偉大なる少年は、其の教育を、大工場に、村の路に、又ガリラヤの山の中に於て得た。リンカーンも同じ種類の書物によつて學問をした、——彼の手

動せず、己れに振^レり當てられた役割を巧みに演ずるものをいふ。乃ち彼等の宗教的敬虔、道德的善行は、かくす^レべきものと教へられたところ、或は自己の地位環境、又は周囲の輿論が、かくあれと要望するものを、自己自身には何等の感激無くして行ふもの、それが偽善者と呼ばれた。己が責任問題として、斷乎たる行動を取つたアマチアは、王命によつてベテル駐在の大任を帯びてゐた彼として、彼が理解し得る其上最善の手段に出でたのである。彼に取つては職分が最初であり、使命が後であつた。彼は祭司となる目的を以て幾年かの教養を經、そしてその任に就いた時、そしてその任に就いたために、種々なる使命を果たすべく餘儀なくせられたのであつた。純正な社會原則に立つ宗教家、眞實な意味での豫言者の社會運動者は、かうした人々の間からは起つて來ない。大學で研究する材料の一つとしての貧民窟視察(何といふ非社會的な行爲だらう)そして今更ながらドン底生活に感激したり、『時勢』といふ強者に引きづられて、書物で學んだ社會事業家としての役割を貧民窟といふ舞臺で實演して見給ふ、やんごとなき方々の中から、正銘な社會運動者^{ゼニユイン}が出て來るのでないと我らが信ずるのもこの理由

方正であり、教養ある人達である。そして其職分、宗教的職務に忠實である。彼等は彼等が醫者で無いことを意識してゐる。そして若し彼等が醫者の職分に干渉して、時間を浪費するならば、それは自己の職分に忠實ならぬものであると信じてゐた。かるがゆへに彼等は旅人を放任したのである。サマリア人は外國人である。ユダヤ人なる傷者をいたはることは餘計なるお世話である。しかも彼は之を爲した。イエスは後者を賞揚して前者を批難し給ふたのである。職掌的宗教家の病は彼等が不誠實であるのに存せない。寧ろ彼等が、眞實なる宗教的職分を知るの明を蔽はるる點にある。我らは其例をアマジアに見、その反例をアモスに見出すことが出来る。

(へ) 王の任命者と神の任命者

ヒュボクリテエスは偽善者と譯されてゐるが、時としてそれは誤り易き語ミスリーディングであると思ふ。ヒュボクリテエスは必ずしも世間を繕ふ外面女菩薩、内心女夜叉の類をいふのではない。バリサイ人の多くがさうであつた様に、彼等は眞摯な道德の實行者である場合が多い。ヒュボクリテエスとは演ずる者との謂であつて、自己内心の要求によつて行

しかしこれほどアモスにとつて侮辱的な言はない。それは彼を目して、當時世に多くあつた職業的豫言者と同一なりとすることであつて、彼の堪へ得るところでない。『我は豫言者にあらず、また豫言者の子（豫言者の徒に屬するものの意）にもあらず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なり』（七章十四）といった彼の答は、怒を含んで發せられたものと思はれる。彼は義しきものの蒙る不當の虐げと、これが爲めにイスラエルが招來しようとしてゐる國民的危機とを見、敢然として立つたものであつて、彼は職業の故を以て初めて豫言するある種類の人々と同種に取扱はるべきものでないことを高調したのであつた。

この事件は、我らにかのサマリア人の比喻を思ひ起させる（ルカ傳十章二十五——三十七）。あの比喻に現はれる祭司共を他宗教なりとし、サマリア人をキリスト教なりとする解釋ほど、あの比喻に對して不忠實なものはない。いふまでも無く、あの比喻は『己の如く汝の隣を愛すべし』との教訓に對する説明として物語られたものである。強盜に逢つて、瀕死の状態にある旅人の傍らを祭司が通る、レビの人が通る。皆品行

ツカツカ壇上に進んで『之れは私の教區が、ツシユである。私は私の許可なくして營まれるこの宗教集會を解散する』といつて亂暴を働く條くだけりを彼一流の筆を以て描き、傳統に囚はれた職業的宗教家が、如何に眞實の宗教を理解し得ないかを、酷たらしい程に暴露してゐる。

アマジア對アモスの場合も之れに類したものであるが、アマジアが彼の追放宣告に『汝の食物を得よ』との句を入れたことは、アモスが社會運動者であつたことを裏書きしてゐるように思はれる。現代に於ける資本的國家が社會革命の運動者に與ふのと同じ様な待遇を、アモスが受けたらしい印象が、我らに與へらるるからである。外國人が己れの國の社會惡を指摘するとき、それが如何ばかり眞理に根ざしたものであつても、その國民は必ずそれに對して憤懣を示す。虐げらるる朝鮮人の爲めに外國宣教師が抗論をした時、日本人は餘計なお世話だといつた。アメリカが移住民に對して行つてゐる不人道を日本人が責めるとき、彼等は必ずそれは内政上のことだといふ。同じ心理をもつてアマジアは、『ユダに豫言して汝の食物を得よ』といつたのである。

い。彼が如き不屈なる侵犯者は、必ず責任ある當局の糺彈するところとならぬばならぬ。ベテルの祭司アマチアは遂に立つた（七章十）。彼は王に向つてアモスの罪を鳴らし、アモスの反逆を申告すると共に、親しくこの革命宣傳者に面し『先見者よ、汝往てユダの地に逃れ、彼處にて豫言して汝の食物を得よ、然れどベテルにては重ねて豫言すべからず、之は王の聖所、王の宮なればなり』と宣告した。

（ホ） 職業的宗教家と改革者

ラルフ・コーナーの名は、英語國民の間に普及してゐる割合に我國民の間には知られてゐない。彼の本名はゴルドンであつて、ウヰニペグ市最大の長老教會に屬する牧師である。彼が西部カナダの開拓者を題材とした小説は、幾多血氣の英青年をして、殖民者の間に働く教役者となるべき決心を起さしめたものである。彼の著 *For the Faithful*（外國人）の中に、彼は淋しい殖民村へ流れ來つた、旅の傳道者夫婦が、村の小學校を會場として、殖民者等を集め、美しい印象深い説教會を營んでゐる様を叙し、やがてその集會が最高調に達しようとする時、究然扉を排して入り來つた英國教會の聖職が、

ない。否、彼らの中には自ら曰はうと欲してゐたことに對して、忌憚の無い表現を見せ付けられ、強い共鳴を感じてゐたものが尠くはなかつたであらう。

ノンコンフオーミスト各教會の強味であり、又ウエストミンスター・チャペルの萃である、かのジョウエツト博士は、先年（一九二二年）丁抹コツペンハーゲンに開かれた萬國基督教徒大會に現はれた『平和を渴望する思潮』の感銘を受けて、次の様なことを曰ふてゐられる。『世界の各國民は心の底から平和を慕つてゐる。そして平和なき世より利益を受ける人々、現世の社會組織に於て、各國の政策を左右し得る人々の反平和的な行動に對して強い反感を持つてゐる。しかも彼らは黙してゐる。發言すべき機關と、機會と、そして機能とを有してゐないために沈黙を續けてゐる。彼等が沈黙の裡に叫んでゐるその希求に明らかな表現を與ふるものは、何であらうか。それはキリスト教會の教壇でなくてはならぬ。云々』

アモスはさうした意味の使命を果してゐたものと想像することが出来る。しかしながら、彼の革命的な宣言は、この神聖なる王家直屬の祭壇に近く發せらるべきものでな

豫言者の群から、偶像禮拜の批難を受けて『ヤラベアムの罪』といふ熟語までも作らるるに至つたベテルの社には、節會の會衆が雜踏してゐた。前條既に述べた様に、宗教的熱心に於ては缺くるところの無かつた國民であつただけ、その祭禮の嚴かさも、それに集まり來つた人々の眞面目さも、我らの想像に餘るものがあつたであらう。しかるにこの舉國一致の喜びの筵を、俄かに掻き亂す疾風の様に襲ひ來つたものがあつた。それがアモスである。その風采は貧しい野の牧者のそれであり、その言葉つきは紛れも無く彼が南方ユダヤの國の產であることを示してゐる。彼がこの装ひ美しい祭の日の群集に交つてゐることだけでも、快よからぬ存在であるのに、彼はその撲訥な鄙語を振り廻して、イスラエル人の罪を鳴らしてゐる。祭りの人の熱心を咽ける様に、神は獻げ物を好み給はないと叫ぶ。イスラエルはその社會的罪惡の爲めに間もなく亡國の憂き目を見るのだといふ。これが過激思想であり、危險思想であり、朝憲紊亂であるのでなくして何であらう。しかも彼の説くところは、聽く耳にこそ快よからぬものであつたけれども、その中に含まれた眞理は、群衆の心の深いところに觸れないではゐ

の大教會へ聘せられた。彼に對する條件の最も重要なものは、『ヴ井クトリア期以後の主義に基づく説教は一切しない』といふことであつた。キリスト教の有する社會原則が漸く識者の注意を惹き出したのはヴ井クトリア朝以後であつたからである。アモスは曰ふ『我は汝らの子等の中より豫言者を興し、汝らの少者の中よりナザレ人を興したり。イスラエルの人々よ然るにあらずや、ヤーエ之を言ふ。然るに汝らはナザレ人に酒を飲せ、豫言者に命じて豫言するなかと曰へり』(二章十一十二)、正義の聲はかうして次第に其存在を弱くして行く。そして賢いものは沈黙を守る、時期が悪い(五章十三)のである。乍併既に述べたやうに、イスラエルの危機は必ず眞實なる豫言者の奮起を見た。かばかりに荒み切つた社會を廓清する爲めに、神の召命を奉じて立つたのは、即ち我が正義の豫言者アモスであつたのである。

(二) アモスの活動

それは北王國に取つては重大な年中行事である祭の日のことであつた。北朝の開祖ヤラバアム一世が、金の犢の壇を築いて一には賢い宗教政策の壇場となり、他面には

やつた様なことをしたものは熄えない火に投げ入れられるものだといことを』といふ聲が絶えずする。懊惱の結果彼はジムの所有主へ密告の手紙を書くことを決心したが、しかし考へて見れば、ジムは彼に對して非常に親切であつた。そして彼の外に眞實の友は無いのだと言つた。そんなことを考へれば、ジムを助けるといふ事は、彼の神聖な義務だとも考へらるる。彼は遂に決心した。そして言つた『ウム、ヨシ、そんなら俺は地獄へ行かう』と。彼が書いた密告の書は、彼によつて卽座に引き裂かれたのである。

『我は汝らの節筵を惡みかつ蔑視しむ、又汝らの集會を悦ばじ。汝ら我に燔祭または素祭を獻ぐるとも、我これを受納じ、汝らの肥たる犢の感謝祭は我之を顧みじ、汝らの琴の音は我之を聴じとヤーエ言ひ給ふ』(第五章二十二) といつたアモスの宣告は、古へのイスラエル人のみに對する戒飭ではない。

かうした場合にも、健實な宗教家が起らないのではない。しかしながら彼らは直ちに社會の攻撃と誘惑とに會つて沈黙してしまふ。米國の一牧師は最近高給を以て一つ

た戦ひの跡を顧るとき、かうした宗教生活と社會道德との離別が、累々としてその途に横はつてゐるのを見出す。たとへば奴隸開放前のアメリカの如きがさうである。奴隸制度は必要にして且神聖なるものと見做され、教會に於ても日曜學校に於てもさう教へられた。黒人が雇主の下を逃げ出すことは、よしそれが彼の下から奪ひ去られた妻を救ふ爲めであつても、神に對する重大な惡だとせられ、そして若し白人にして彼を補助するやうなものがあつたら、それは罪惡中の罪惡だと教へられてゐた。その眞偽を疑ふ人は、マーク、ツウェーンの書いた、『ハックルベリー、フィン』を讀んで見るが可い。フインは黒人のジムをその所有主（何といふ言葉だ）の手から救ひ出し、筏に乗つて共にミスシビー河を下つて行く。二人は艱難を共にしてゐたのであるが、フインの心には黒人を救ひ出した罪の問題が絶えず爭鬭を續ける。自分は餘りいい躰を受かなかつたのだから、仕方が無いのだと自分で口實を作つて見るが、彼の心の中にあるものが承知しない。『日曜學校があつたでは無いか。お前はそこへ行けたのだ。そしてお前がそこへ行つたなら、其處でお前は教はつたのだらう。お前が黒人^{ニグロ}にして

キリストの主義を透して宗教のことを考へる癖のついた人々は、かうした殘虐な社會狀態の事を聞く時、それはキツト宗教の衰へた暗黒時代であつたのであらうと想像する。しかしながら、驚くべきことには、アモスが豫言した時、イスラエルの各靈地は參拜の人々を以て充たされてゐたのである。『汝らベテルに往きて罪を犯し、ギルガルに往きて益々おほく罪を犯せ、朝ごとに汝らの犠牲を携へゆけ、三日ごとに汝らの什一を携へゆけ、酔いれたる者を感謝祭に獻げ、願意よりする禮物を召てこれを告示せ、イスラエルの人々よ汝らは斯するを好むなり』(四章五)といつたアモスの嘲罵は、一面に於て彼らが如何ばかり宗教の事に熱心であり、又嚴格であつたかを示してゐる。しかしながら、彼らは彼らの宗教と社會生活とが、必らず相一致せねばならぬとは考へてゐなかつた。『質に取れる衣服を、壇の傍に敷てその上に偃し、罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む』(二章八)ことがヤーエの聖意に叶はないのだとは氣が附かないでゐた。

これは我らには理解し難いことの様に見へる。しかしながらキリスト教會が經來つ

ゐた。かうした制度の下にあつては、すべての裁判は特權階級に左袒するものであり、すべての律令は彼らの利權を擁護するために造らるるものとなつたのであつて、下層民は其正義を司法の府に争ふとき、常に敗者の地位にあることを餘儀なくされた。

國民中の有力者が排日思想に満たさるる時、最高の法廷も遂には非人道的判決を下さざるを得ない。それはデモクラシーの悲哀であつて、法律が人民の意志の發現である限り、これを如何んともすることはできぬ。

『汝ら公道（裁判）を蘭陳（害惡に充つるもの）に變じ、正義（法律）を地に擲つ者』（五章七）『門（裁判は城門で行はれた）にありて勸戒いましむる者を惡み、正直を曰ふものを忌嫌ふ』（五章十）『汝らは義者を虐げ、賄賂を取り、門において貧しき者を推枉ぐ』（五章十二）といふやうなアモスの怒罵は、當時司法の腐敗した有様を如實に描いてゐると思ふ。

（ハ）宗教の隆興とその危険性

されて了つて、彼らの商業に於ける不正は寧ろ當然と見らるるに至つてゐた。アモスは罵つていふ『汝らは曰ふ月朔ついたちは何時過ぎ去らんか、我ら穀物を賣んとす。安息日は何時過ぎ去んか、我ら麥倉を開かんとす、我らエバ楸を少く、シケル分銅を大きくし、偽の權衡をもて欺く事をなし、銀をもて賤しき者を買ひ、鞋一足をもて貧しき者を買ひ、かつ屑麥を賣り出さん』(八章五、六)と。不正楸は貧しい勞働者によつて使用せらるるのでない。之れは今も昔も變らない。富の蓄積に餘念なき資本家階級がその道德性の破産をした時、凡ゆる不正が行はれるのである。富めるものの神の國に入るは、何れの世に於ても容易ならざる仕事である。

壓迫と不正とに誅求ちうきうされてゐる下層民の唯一の望は、司直の府にあつた。渺なくとも其處にあるべき筈であつた。しかしながら、イスラエル傳統のデモクツシーは、その刀を逆にして民衆の不幸を招來するものとなつた。すべての事に於て專制を嫌つたイスラエルに於ては、裁判の實權も亦民衆の手に握られてあつて、判官は單なる顧問たるに過ぎなかつた。従つて勢力ある民衆の聲が、その判決を左右するを常として

關庫の職長は働きの人の中を何かの理屈をつけて訪問する。その時、彼らは各自の稼ぎ高に應じて、相當の高を職長に渡す。煙草代とか、御禮だとか、いろ／＼の名義を付けるのである。しかしながら若しこの納税が何かの事情で怠られる時、その勞働者は週日を出でないで射殺（^{フアイヤ}）される。勞働者に同盟（^{ユニオン}）が必要な筈だと痛感させられた譯であつた。

かやうに、虐遇者の痛苦に對する同感性が鈍つてゐる人達が、その私行に於ても高い動機に左右されないのは、寧ろあたりまへである。特にアモスが痛罵した特權者たちは、エヒウの幕下であつた軍閥の子孫であつたために、その道徳性の教養も、彼らが壓迫しつつあつた、義（^{イキ}）しき者の輩に比べて遙かに劣つたものがあつた。二章七節にある『父子ともに一人の女子に行て我聖名を汚す』といふ句は多分 Hoffman が訂正したように『人、その判官と、先約に従ひて事を行ふ』と譯するのを正しいとすべきであらうが、前項に説いたやうな酒池肉林の生活をこととしたこの輩に、舊い譯にある様な不道徳が行はれたことも想像するに難くない。否、彼らの良心は已に全く麻痺

者の頭に塵（勞働より來れる）のあらんことを喘ぎ求め』（二章七）たのはその爲めである。バシヤンに産する美しい牝牛のやうな、首都サマリアの貴婦人達が、その夫にむかつて『此處に持來たりて我らに飲ませよ』と要求することが『弱き者を虐げ、貧者を壓する』（四章一）のだと、アモスが叫んだのは、そのためである。彼らは實に『虐たげ取りし物と、奪ひたる物をその宮殿に積蓄ふ』（三章十）暴虐者であつた。

（ロ） 道徳の頹廢と司法の腐敗

アモスがかやうに暴戾を罵つた言に『汝らは貧しき者を踐つけ、麥の贈物くくりものを之より取る』といふのがある。贈物とは一種の善意語ユーフエミであつて、小作人が贈物との名義で地主に納める穀物をいつたのである。贈物は自由意志から出るべきであるが、贈物の尠ないものは地主の怒に觸れ、作地を取り上げられるのであつて見れば、慙じこころざしいに其額の決定が、贈る者の計量に任せてあるだけ、却つて殘酷な重税となつたのであつた。

筆者は數年前、北米のとある機關庫に、三ヶ月許りを一勞働者として働いて見た。そして其中に行はるる種々なる暴虐と不正とを實見した。月末の給料日になれば、機

む新式のものであり。化粧けいようの料しやうは、最も貴き膏あぶらである（六章四、五）。彼らが使用し切るを得ない大きな家は、住宅難に苦しんでゐる歸還兵を安住せしむるに足ることを知らないのでは無い。彼らの羔と、小牛とを成育せしむるならば、それらは數個の家族を養ふに足るものであることが分らないのでない。然しながら彼らにはヨセフ（十二兄弟の最年少者最も弱き同胞の意）の艱難を憂ふる心が無い（六章六）のである。

ある人々は奢侈の相對性を主張する。富豪が數十圓の料理を喰ふは奢侈でない場合があり、日給生活者が天井を奢るは贅澤であるといふのである。しかしながら金錢自身、生活資料の生産者でない限り、必要以上の物資を浪費することは、それが百萬長者によつてせらるるとしても、奢侈であることに變りはない。その浪費さるる物資は何人かの勤勞に由つて生産せられねばならぬのであり、長者が有する金錢は、彼をして物資を浪費する權利を得しむるに過ぎないからである。

イスラエルの特權階級が、その文化生活を恒久ならしむる爲めには、彼らが消費する物資の生産者たる勞働者を飽くまでも現位地に留めなくてはならぬ。彼らが『弱き

れの國に於ても、戦争によつて富むものは、戦勝を齎した軍人でも、之を應援した庶民でもなく、ある一派の政商である。アメリカが世界大戰に参加した時、アメリカの名士幾人かは『それはジュー・ビー・モルガンの金を擁護する爲めに戦ふことだ』といつた。そして相ついで投獄された。しかしながら、誰が彼らの言の偽りであることを證明し得るか。ある國の如きは、その富豪といはるべきものの殆んど總てが、戦争の爲めに然るを得た輩であるではないか。

イスラエルの特權階級は、最早や從來の簡素な生活に甘んずることが出来ない。新たに買ひ入れられた廣い土地には新しい文化にふさはしい鑿石の家（五章十一）が建てられ、象牙の家、大きな家（三章十五）が築かれる。そして冬には冬の家があり夏には夏の家がある。家具には新たに輸入されたるダマスコ錦の櫛（三章十二）象牙の牀がある。食卓にあるものは羔こひつじであり小牛である。（それらの味は成長せる羊、牛よりも美しいからである）。父祖傳來の琴はある。しかしながら、新しい音樂の隆興は新しい樂器と、之にふさはしい新しい踊（噪ぎ）を創り出さしめた。酒は大盃おほいさかづきにて吞

つた餘儀なさに、嘗ては（ナボテの場合の如く）王命にも猶肯んぜなかつた父祖傳來の土地を、有産階級の望みに任せて賣り放すもの相ついだ。

かうして自作農は次第に減じ行き、地主の所領は次第に膨大となつた。除隊をされた兵士は歸るべき故郷も、住む可き家も無い。金錢の價值は次第に増して、勤勞の報酬は次第に少額となつた。『義者は金の爲めに賣られ、貧しき者は鞋一足のために賣られた』（二章上）、嘗ては自主とデモクラシーとを誇つたイスラエルの、しかも護國の爲めに戰つた勇士が、今は自由のない奴隸として賣られて行つたのである。

歐洲大戰が終つた時、北アメリカで最も貧しかつたものは、教育家と宗教家であつた。コオネル大學では、教授の俸給が番人のそれに及ばないことが發見され、各地の牧師は、數ヶ月間、その家族に肉を與ふことが出来ない境遇に置かれてあつたことが見出された。その時ある實業家は『大戰中に金を儲け得なかつたものは餘程何うかした連中だ』といった。義しき者には不幸にして愛國心と公共心がある。それが爲めに、戰爭は彼をして金の爲めに賣らるるを餘儀なくせらるる境遇にまで突落す。いづ

『私は國際聯盟が採用したら、屹度、戦争を減少する助けとなると考へる一つの案を持つてゐる。それは聯盟の規約として、戦争の場合には其國民中、中年以上のものだけを戦場に送るといふことにするのである。乃ち四十五歳以下の者を兵役に就かしむる國は、聯盟全體によつて罰せられることとする。年を取つた者の戦争は餘り敏捷なものではあるまいが、何れの國も同様な條件下にあるのだから不公平は無い筈だ。世界大戦中、我等の爲めに死んで呉れた數十萬の若者どもは、彼等が屬する國の政策には聊かも携はつてゐなかつた者どもであり、開戦の決定には何の關^{あつ}かるところが無かつたのであるから、彼等がその生命を以て償ひをせねばならぬとは不合理であるとせねばならないからである。云々』

イスラエルが携はつた長い征戦の間、その生命を賭したものは中流以下の若者であり、その戦勝の成果を楽しむものは主として上流の特權階級であつた。

『子らは皆、戦^{いくさ}の場^ばに出で果てて、翁や一人山田守るらん』一二年は猶忍ぶことが出来る。十年に餘る外戦にその家長を出征せしめたイスラエルの家々は、働き手を失

治下にあつて、イスラエルの小春日イシラエルニツキ和と稱せらるる、一時的ではあつたが、かなりに實質的な中興を樂んでゐた。エヒウの革命は内政的にはヤーエ禮拜の再興であつて、民の輿望——豫言者達の感化を受けた——を擔つてゐたのであるが、その半面にはフェニシア（イゼベルの生地）とユダ（アハブの一女はユダの王妃となつてゐた）の後援を失ふこととなり、當時勃興しつゝあつた東方のアッシリア、北方のアラム兩國よりの壓迫に抗し得ず。遂に一屬國の地位に落さるるの悲運を見たが、アッシリア、アラム兩國に起つた内亂は、エヒウの孫ヨアシ（ヤラベアムの父）をして其の勢威を四方に張るの機會を得しめた。彼は東にギレアド及びモアブを恢復し、西にペリシテを撃つて、エジプトとの接壤を容易にした。戰勝が齎らした朝貢と、領土の擴張から來た國外貿易の振興は、イスラエルをして異常の富を蓄積させたとともに、異國文物の輸入によつてその富の使途をも多様ならしめた。

アーサア、バアトラムは其著『最暗黒の基督教國』に於て次の様なことを曰つてゐる。

第一章 『義』の豫言者アモス

(イ) アモスの時代

成書豫言者を研究するに當つて、その筆頭に上げらるべきものは、アモスであらねばならぬ。彼は倫理的宗教を説いた最初の豫言者であり、また世界的宗教を闡明した先驅者であるとせられてゐるのであり、社會運動者としても、彼獨特の唯一優秀な地歩を占めてゐる。

彼が直面した問題は、彼の先驅者たる、モーセ、エリヤのそれとは種類を異にしてゐた。エリヤの衣鉢を繼いだエリシャが、その指導の下にあつた豫言者の徒を驅使して、遂に、將軍エヒウの革命を成功せしめたことは、エリヤが抗爭的であつたパアル宗教に取つての死の鐘ゴッセルであり。かれが如き勢力を有してゐた異邦の宗教もアハブ王朝の没落とともに全く影を潜めたからである。

アモスが豫言した時は、北朝イスラエルはヤラベアム二世（前七八五—七四五年）の

なる影響を與へたのであり、イスラエル及びユダもそれより免かることはできなかつたのである。しかもアッシリアの進出は極めて徐々であつたために、バレスチナに於ける政治家にして、この世界的大帝國の出現が果して如何なる意趣を有するかを、確實に判定し得たものは極めて尠なかつた。

しかし、近隣の諸國相繼いでこの世界的勝利者に降り、その神アシウルを中心としたるアッシリアの力が、愈々ヘブル人の南北兩國に肉薄するに及んでは、ヘブル人がヤーエに對して有した信仰は漸く動搖し、ヤーエは果して異教の民に對して勝利を獲給ふべきやを疑ふに至り、ここに彼等は政治上及び宗教上に於ける重大なる危機に直面するに至つたのである。この時に際して、國際的政權の中心意義を把握してヘブルの王者達を指導し、ヤーエの有し給ふ眞實の使命を民の前に闡明し、その信仰を鼓舞指導したるものが彼等豫言者であつたのである。

第二篇 アッシリヤ時代に於ける豫言の進展

義の豫言者アモス、『愛』の豫言者ホセア、『聖』の豫言者イザヤ、『土』の豫言者ミカ、『國』の豫言者ナホム

紀元前八世紀の半頃より、イスラエルに取つても、ユダに取つても、極めて重大なるべき危機が來た。そして、既にいつたやうに、ヘブル民族に於ては、その國民的危機が、必ず豫言者の輩出を招來したのであるが、この危機に於てはそれが重大であつただけ、出現し來つた豫言者の數も多く、又その質も優良なものであつて、この時期に於ける豫言は萬花その妍を競ふの盛觀を呈し、従つてその宗教思想に於ても、發祥以來始めて見らるべき、甚大なる飛躍を遂げたのであつた。

この危機とは乃ち、アッシリヤの興起を以て始まつたものであつて、その中興の王たるチグラテ・ビレセルが、漸くその力を揮ひ始めたる紀元前七五〇年の頃より、五〇五年その大帝國が滅びるまで、アッシリヤの一進一退は、地中海東岸の諸國に重大

き何者かを必要としたのである。しかも彼等は同時代に於ける一般民と同じやうに、恍惚状態は『神の靈の臨む』によりて與へられるものであることを信じてゐたのである故に、恍惚状態こそは彼等に最も必要なるその確信を與ふるものとなつた譯である。このことは以下に於て説く各豫言者の研究によつて更に明白となるであらう。

る。催眠状態のものに對する暗示は、それがそれを受くる當事者が日常抱いてゐる觀念と同調的のもので無い限り、その効果を奏することができぬ。それと同じやうに、豫言者のメッセーヂは彼等が恍惚状態に於て神から與へられた暗示に基づくものでありとはいへ、それは彼等が平常思索し、意向しつゝあつたものと同調のものであることを必要としたのである。

彼等の意見、彼等の批判、彼等の警告、それは皆永い間彼等の心中に鬱積してゐたものであつたのである。只それ等は、凡て當時にあつては新奇且過激なことであり、民の反感を購ふべきことが明らかであつたために、平常の場合に於ては、彼等がそれを發表せんとする意向は充分強くなかつたのである。それとともに、彼等自身、その曰はんとするところが眞實に正當のものであり、且ヤーエの聖旨に適ふものであるとの確信を得るために、何か特殊なる證明を必要としたのであつた。それとともに、彼等は自らの述ぶる言葉が神より出づるものなりと主張する以上、それを發表する動機が彼等自身にあつてはならぬのであり、それが神よりの指示に由ることを確かにすべ

之は單に高調に達したる詩的狀態といふが如きを以てしては、充分説明し得ざることに屬するのである。

特に豫言者の言葉の初頭には『ヤーエかく曰ひ給ふ』といふ句があるが、この原語『コー・アマル・ヤーエ』は寧ろ『ヤーエかく曰ひ給へり』と譯すべきであつて、豫言者は過去に於て爲したる經驗を語つてゐるのである。乃ち恍惚狀態に於て彼等が聽いた神の言葉を覺醒後に於て民に語つてゐるのである。

更に又、かうした一種の異常的狀態があつたればこそ、例へばアモスやエレミヤの場合のやうに、彼等は反對者達の中にありながら、しかもその説を述べ得たのである。乃ち、彼等の異常狀態は、神の靈が彼等に憑り居るためであることを民が信じたために、民は彼等に危害を加ふことを躊躇したと思はれるのである。

かやうにして、豫言者達のメッセーヂが、恍惚狀態の下に於て述べられたといふことは、しかしながら、豫言者達がそのメッセーヂに就て、何等主觀的な立場を有しなかつたといふことにはならない。恍惚狀態は、多くの點に於て催眠狀態に類似してゐる。

その第一の理由は、既に述べたやうに、彼等も又ナビと呼ばれたのであり、狂熱的な豫言者と同様なる名辭を有することである。このことは、尠くともその外形に於て彼等が前代のナビイムに類似してゐたものであることを示してゐる。今日に於てこそ我等は歷史上に現はれた事實の背景に基づいて、如何にこれ等成書豫言者が眞實なる神託の宣傳者であつたかを知り得るのであるが、しかし、彼等を取り巻いてゐた同時代の人々には、彼等の教訓以外に何ものか彼等が神の使者であることを示すものが必要であつた筈である。何故ならば、既に記したやうに、神自らが欺き給ふべしと信ぜられし僞の豫言者が存在してゐたのであれば、何事か超人的な、平常以外の經驗を有するもので無い限り、それを豫言者として信することが困難であつたのは自然のことであり、従つて恍惚状態の如きが人々をして彼等を豫言者なりと信せしむる唯一の道であつたと思はれるのである。

特に多くの成書豫言者達が、その召命に際して、或は特殊なるメッセーヂを與へらるるに際して見た『幻』の如きは一種の恍惚状態といふを最も適當とするのであつて

との思想と、群を爲して、民の喜ぶ使命を傳ふる僞豫言者の存在とは、眞實なる豫言者達に不斷の惱を與へたのであり、その意味に於ても亦ミカヤの出現は豫言發達史の上に於ける重要な階段を成すものである。

第六章 成書豫言者の出現

かくして、第八世紀に至つて、成書豫言者 (Canonical Prophets) の出現を見た。人々が神託を求める對象は、従前のやうなナビイムの一群ではなくして、獨自の見解を持つた個人的豫言者であつた。そして彼等の口から出でた教訓は、文書となつて我等に傳へられてゐるのである。

十九世紀末葉頃迄の定説に由れば、これ等成文豫言者は、自らその教説を著はして世に出したるものであり、彼等は冷靜にして思索的な文明批評家であるとされてゐた。しかし輓近に於ける聖書學者一般の傾向は、彼等も亦、ナビイム達と同じやうに恍惚状態の中にそのメッセーヂを傳へたものであるとされるやうになつた。

「我ヤーエの其位に坐してゐたひて天の萬軍の共傍に右左に立つを見たるに、ヤーエ言ひ給ひけるは、誰かアハブを誘ひて、彼をしてギレアデのラモテに上りて斃れしめんかと……遂に一の靈進み出でてヤーエの前に立ち、我彼を誘はんと言ひければ、ヤーエ彼に何を以てするかと言ひたふに、我出て虚言を言ふ靈となりて其諸の豫言者の口にあらんと言へり、ヤーエ曰ひ給ひけるは汝は誘ひ亦之を成し遂ん、出て然なすべしと。」

これがためにミカヤと他の豫言者の間に争闘があつたが、彼の言が眞實であることは事實が之を證明したのであつて、アハブは遂にこの戰に於て斃れ、豫言者革命の日を早めたのである。

この記事よりして我等はこの時代に於てヤーエ自ら豫言者を欺き給ふことありとの思想と、後世『ヨブ記』の如きに於てサタンと呼ばれるに至つた、ヤーエの使者たる靈の存在に對する信仰とを見るのである。それとともに、ミカヤに關する記事は豫言者の發達史上に於ける一轉機を示すものであつて、豫言者が群としてその豫言を爲しつつあつた時に際し、一人立つて之に異を樹てたことに於て、彼は次代以下に於ける大豫言者達の先驅を爲したものと云ひ得るのである。ヤーエが豫言者を欺き給ふべし

エの恩恵が加はり得るとの思想が、その姿を現はしてゐることである。それはイスラエルの神はヤーエのみ、そしてヤーエはイスラエルのみ、の氏神なりとした思想が轉化して漸く廣汎なるものに變るべき準備時代に在ることを思はせる。しかもヤーエはイスラエルの土地に固定し居給ふのであつて、外國の地に於ては、ヤーエの國の土無くしてはヤーエを拜するを得ずとする思想が、未だその根を張つてゐたことを示す。その要求をしたのはシリヤ人ナアマンではあつたが、エリシャがそれに對して許可を與へたことは、彼も亦同一なる見解の把持者であつたことを示すのである。

(三) アハブはユダの王ヨシヤバテと聯合してシリヤと戰はんとすることがあつた。(列王紀略上第二十二章を看よ)しかしその出陣の可否に就て疑點があつたために、豫言者四百人を集めてヤーエの旨如何を聞いた。彼等はその代表たるセデキヤを通じて出陣の太いに可なるべきを答へた。しかし、ヨシヤバテはその豫言の眞實性に疑を抱き、別に豫言者なきかを問ふたので、遂に豫言者ミカヤが招かれた。彼は最初他の豫言者と同様の言をなしたが、更に追求されて遂にその確信を述べることとなつた。

於ける成書豫言者——その名を冠する書卷が、聖書中に含まれてある豫言者を、成書豫言者 (Canonical Prophets) と呼ぶ——の事業を了解する上に於て大切である。

(一) 北方イスラエルに於ては、その最初の王ヤラベアムの時より、ベテルその他聖地に犢の像あり、それを通してヤーエ禮拜が行はれてゐたのである。然るに、エリヤもエリシヤも、バアル禮拜に對して、甚だ強硬なる態度を持するにも拘らず、この偶像禮拜に對しては、何等攻撃の聲を擧げた跡がない。偶像を以てヤーエを禮拜することの罪に就ては、次代の豫言者に至つて、始めてその邪惡さが見出されたものであると思はれる。

(二) エリシヤの時、シリヤの將軍ナアマンが彼の下に來つて、その癩病を癒さるる條がある。(列王紀略下、第五章) 癒されたるナアマンは大いに喜んで『我今イスラエルのはかは全地に神なしと知る』と叫ぶとともに騾馬に二駄の上を持ち去り、それに由つて、シリヤに還つた後にも猶ヤーエを禮拜せんと志したといふのである。この記事は我等に二つのことを教へる。その一は、この時代に於て既に外國人にもヤー

實なる豫言者の典型を示すものであつて、律法がモーセに由りて代表さるる如く、豫言者なるものがエリヤに由つて代表さるるに至つたことは、まことに恰當のことであつたのである。

(ハ) エリシヤ

エリシヤはエリヤの跡を繼いだのであるが、彼はその師とは全く異つた性格の所有者であつて、建設的であり、又社交的であつた。彼は恐らく各地に『豫言者の徒』ともがらなる團體を作り上げ、之を教育することによつて、その目的を達せんと努めたのであつて、彼がその債主に苦しめらるる寡婦を救助した記事（列王記略下第四章を看よ）も、この種の『豫言者の徒』に關係してゐる。彼の運動は遂に偉大なる効果を奏したのであつて、將軍エヒウは、彼より膏注がれて遂にアハブ王家を覆し、ここに豫言者革命の成功を見たのであつた。

(ニ) 紀元前九世紀の宗教觀

エリヤ及びエリシヤの時代に於ける宗教思想發達の程度を知るとは、次の世紀に

くといふが如きことのあるべきでなく、又王がそれに對して手を空しくして居るといふが如きは、彼女が父の宮廷に於て養はれたる王權の思想と根本的に相容れざるものである。そこで彼女は詭計を以てナボテを陥れ、彼を以て死罪に當る罪ありとなし、以て王の野望を遂げしめた。凡そイスラエル傳統のデモクラシーに對する反逆にして之より甚だしいものは無い。遂にエリヤ立つて王及び王妃に直言し、その罪を糾弾したのであつた。(列王紀略上第十二章を看よ)

(四) エリヤは、かうしてイスラエルの上に推積された諸惡は、遂に政治上の革命を以てするに非れば廓清し得ざることを知つて居たのであつて、王家に對する彼の呪がそのことを明らかに物語つてゐる。しかし、彼の主義は全然破壊的のものであり何等建設的要素を有し無かつた故に、その事業の完成のためには、その弟子エリシャを俟たねばならなかつたのである。しかし、彼が、都市生活とその罪惡、農業及び商業と、それより來る奢侈に對して爲したる攻撃、王權とそれが專制權たらんとする傾向に對する反抗、そして野の生活より來るべき自由と簡易との主張の如きは、まことに謹

(二) 彼が豫言者としての職分は、いふまでもなくヤーエに對する熱心を獎勵し、イスラエルはヤーエにのみ依頼すべきことを強調するにあつた。そして、それは遂に有名なるカルメル山上の宗教戦となり、バアルの豫言者八百五十人は、遂にヤーエの支持者たるエリヤの爲めに慘憺たる敗北を與へられたのであつた。(列王紀略下第十八章を看よ)

(三) イゼベルの感化は、單に宗教上の方面に於てのみならず、社會的正義の上に於ても、重大なる危機をイスラエルの上に招來したのであつた。その著しい例が、即ちナボテの葡萄園の事件である。エズレル人ナボテの有する良き葡萄園はアハズ王の羨望するところとなり、王は相當の代價を以て之を購はんと申出でた。然るにイスラエルに於てはその家族の所有する土地は、乃ち神の與へ給ひしイスラエルの嗣業であつて、之を讓渡することは、只に物質上の問題だけでなく、宗教上に於ける節操の問題である。故にナボテは之を拒み、王も亦餘儀ないこととして手を引いた。しかし、王妃イゼベルに取つては、之は以ての外のことである。いやしくも臣民として、王に背

イスラエルには重大なる危機が襲來した。それは王妃イゼベルに由るバアル・メルカートの導入である。イゼベルはフェニシア王エテバアルの娘であり、アハブに嫁ぐとともに、フェニシア傳來の宗教なるバアル・メルカートの禮拜をも共に携へ來つた。アハブ王は内治外交の問題に没頭し、宗教のことは只その成行に任すといつた態度であつたために、王妃の宗教は宮廷を中心として國內到るところにその勢力を張ることとなつた。それがヤーエに對する忠誠に反するものであることは言ふ迄も無いが、それに加へて、このバアル・メルカートは、舊來カナンの地に存在したバアルと異なり、外來の勢力を代表するのであれば、その盛行はやがて國民精神の獨立をも威嚇するのである。

この危機に當つて出現したる豫言者は、乃ちテシベ人エリヤであつた。

(一) 彼は純然たる野の人であつて、頭髮長く延び、身には毛衣を纏つてゐた。彼は都市文化の代表たるフェニシアの勢力に對抗し、イスラエルの傳統たる野の人の精神を以て、民の腐敗を防壓せんが爲めに、神より召されて立つたのであつた。

し、それが他の諸國に行はれたことであれば、それはよし、賑やかな世評を起したのに相違無いとしても、左迄の大問題ではなかつたかも知れない。しかしイスラエルの人々に取つては、それは王が愈々その専制權を行使し始めたことである。若し、その儘に委せられるとすれば、ヘブルの傳統たるデモクラシーは、此處に死滅の運命を見ることとなる。この危機に際して出現したるものが、即ち豫言者ナタンであつて、彼在りしが爲めに、民の憂は強き聲となつて王を警告したのであつた。(サムエル後書十一章及び十二章を看よ)

(ロ) エリヤ

ダビデ王を繼いだソロモンに依つて、王政の弊害は遂にその極に達し、その子レハベアムの時に至つて遂に國は南北に分裂し、北方はイスラエル王國としてヤラベアムを戴き、南方ユダのみがダビデ系の王室に屬することとなつた。しかし、かくして成立したヤラベアム王朝も紀元前九世紀の初頭に於て亡滅し、將軍オムリに由つて立てられた新しい王朝が始まることとなつた。然るにその子アハブが立つに及んで、

外憂が安定するとともに内患が頭を擡げて來た。ダビデ王に由つてペリシテ人よりの惱みは取り除かれ、エルサレムに都を定むることあつて、ヘブルの民は鼓腹擊壤すべきであつたが、さうした歡喜の裏に、既に危機が醸成されてゐた。それはダビデ王の後宮が漸次に擴大されたことである。后宮に於ける妻妾の増加といふことは、必ずしも王の色好みたることを舉證しない。それは王の權力の増大を誇示すべき材料として使用さるゝことが多いのである。さればダビデ王の後宮増大は、王が漸くその王權に專制味を加へんとする意圖のあることを示すものであつた。

然るにヘブル人の間に於ける王者は、他の東洋諸國に於ける王者とはその性質を異にし、彼は恰も大統領の如きものであつて、民の推舉と承諾とに由つて、その地位を保ち、その權を振ふものであつたのである。そして、それあるが爲めにのみ、ヘブル人は王を立てたる後も、よくその傳統の精神たる、デモクラシーの主義を維持し得たのである。然るに今やダビデ王は、その制度の破壊を企てんとするが如き態度を示したのであるが、遂にこれは彼が將軍ウリアの妻を奪ふに至つてその頂點に達した。若

部族を糾合して、ペリシテ人の壓迫に對抗せしめ、又彼を王として任命することに由つて、イスラエルに眞實なる統一を與へたのであつた。この意味に於て、豫言者の一事業たる建國のことは、彼に由つて完成されたのであるとも言ひ得るのである。

しかも、彼が任命したりしサウルが、その地位漸く安固なるを加ふるとともに、次第に專制王たる性格を發揮し來るや、直ちに之を排してダビデを立てた事實は、彼が何處までもデモクラシーの擁護者であつたことを示すのである。

サムエルの事業はその立てたる『野の人』サウル及びダビデに由つて爲され、サムエル自らが又ナビーイムの群と或種の密接なる關係を有したであらうことは、彼がサウロに與へた豫言（サムエル前書第十章五節）に由るも之を推察し得る。この意味に於てサムエルも亦、豫言者の素質を完全に所有したりしものといふことが出来る。

第五章 『自由』の豫言者ナタン・エリヤ・エリシヤ

(イ) ナタン

イスラエル統一の業を爲し、以てこの危機を救つた。デボラも亦モーセの有した諸性格を具備したのであつて、豫言者の系統に入るべきものである。(士師記四章及び五章を看よ)

(ハ) サムエル

かくして、カナン人に對する問題を解決したイスラエルの前途には、更に重大なる危機が横はつてゐた。それはペリシテ人の壓迫である。ペリシテ人はその人種の上よりいへば、ギリシヤ人種に屬するものであるが、イスラエルのカナン侵入以前、既にクレテ島よりバレスチナ(バレスチナなる名稱そのものがペリシテ人の地をいふ意から出でたものである)の海岸地方へ移轉し、そこに根據を据ゑてゐた。彼等はその文化に於て、カナン人よりも更に進歩したる民族であり、鐵器の戰車武具等を有したのである。この民の壓迫の爲めに、デボラ以後イスラエルに起つた士師達は、幾多の辛酸を嘗めたのであつたが、遂にサムエル起るに及んで、ペリシテ人への重大なる一撃が與へらるることとなつた。即ちサムエルはキシの子サウルを起し、イスラエルの全

徳の分子を多量に含有してゐた。ヤーエ禮拜を忘れてバアルに赴くことはイスラエル人をして道德的に破産せしめることである。

之に加へて、イスラエル人を脅威したものは政治上及び文化上の危機であつた。イスラエル人は未だ石器文化の時代に止まつてゐるのに、カナン人は既に青銅時代の文化に達し、遙かに高度な都市生活を營んでゐた。彼等の諸都邑は、一の國家都市（city state）を形成し、各都邑には王があり、專制的にその民を統治してゐた。されば各都族が各々自治的な團結を爲して居り、そこに弱點を有するイスラエル人は、この強力なる民の間に介在して、或は併合せられるか、又はその領地より追ひ出さるかの運命に直面してゐたのである。しかも彼等に併合さることは、イスラエルの傳統たるデモクラシーを喪失することである。

この重大なる危機に際會して、神の召を蒙つたものが女豫言者デボラであつた。彼女は先づイスラエル人の全部族を糾合し、ヤーエに對する熱心に由つて團結すべきことを勧告するとともに、將軍バラクと提携して遂にカナン人の將シセラを破り、南北

故かかる差異あるかをカナン人に問へば、彼等の答は乃ち正しき農業の方法を取れとのことである。そして、正しき方法とは、いふまでもなく、その種播きに際してバアルに良き捧げものをするのである。イスラエル人は、乃ちその方法に倣ひ、豊穰なる收穫を得るに努力する。しかも彼等は己が神なるヤーエを捨てることは之を敢てし得ない。その結果として、彼等はバアルを禮拜する方法を以てヤーエを禮拜することとなる。しかもそれは實際に於てのヤーエ否定とならざるを得ない。

これと關聯して起り來る問題は道德上の危機であつた。曠野及び山地の民は、平地の民に比して純潔なる性情を有するを常とする。そして、このことは特に彼等の男女關係に於て著しい。臺灣に於ける生蠻はその善き一例であり、又アフリカに於ても、同一程度の文化に達したる蠻族にして、山地に住むものと低地に在るものとの間に、その性的純潔に異常の差異あることが認められる。曠野の民であつたイスラエルの神ヤーエは特にその道德性に於て純潔を要求する神であつた。然るにバアルは、その主たる職分が產出のことであり、又平地の神であることよりして、その祭祀の中に不道

たる部族とは、その中間に介在せるカナン人の諸都邑のために、その交通を遮斷されることとなつた譯である。

しかも、この侵入後に於けるイスラエル人は、種々なる困難に直面するを餘儀なくされた。四十年（それは一時代といふことを意味する）曠野に遊牧者の生活を送つたイスラエルは、祖先より承け繼いだ牧畜者たる性格を徹底的に發揮したのであるが、今新たに侵入したるカナンの地は農業文化を有する土地である。イスラエルは果して麥を作り、葡萄及び橄欖を育て得るであらうか、ここに彼等は生活上の一大危機に際會したのである。

しかも、この危機は宗教上の危機を孕んでゐた。カナン人の神はバアル（主）である。それは產生うぶなの神であつて、地の産物を榮えしむる神である。イスラエルの神ヤーエは山嶽の神であり、曠野の神である。果して農耕の地に於てその力を發揮し給ふであらうか。かうした疑問はやがて間もなく實際問題と化して来る。農業に經驗なきイスラエル人の畑は實らないのに、近隣なるカナン人は豊かな收穫を楽しんでゐる。何

獨立的精神は、益々イスラエルをして民主的なる民と化するに至らしめ、後代に於て起り來つた豫言者達の運動は、常に社會正義の擁護を、その重要な目的とするに至つたのであつた。かくして、イスラエルは世界に於ける民主思想の發祥地となつたのであり、後代に於ける社會運動が、多くその後裔たるユダヤ人に由つて爲さるるに至るべき起源を爲したのであつた。

この四點、乃ち野の人たること、ヤーエの熱心家たること、政治的指導者たること、社會正義の擁護者たることに於て、モーセは豫言者の資質を完全に具有したものであつて、申命記十八章十五節、三十四章十節が、彼を呼んで豫言者なりとするは、決して的外れたる言で無いのである。

(ロ) デボラ

第二の重大なる危機は、カナンへの侵入とともに發生した。カナンの侵略は一舉にして爲されたものではなく、徐々に行はれた浸潤であつたのであり、結局は北部なるガリラヤ地方（後代の）に侵入したる數部族と、南方ユダ（後代の）の山地に占據し

素質の所有者であつたことを示してゐる。

(三) 彼は政治上の指導者であつた。

イスラエルに於ける豫言者の特徴は、彼等が政治上の指導者であつた點に存する。モーセが與へたと聖書に記されある諸法令の多くは、彼自身制定したのでなく、后世に於て出来上つたものであることが、聖書學の進歩とともに明らかとなつて來たのであるが、さうした多數の法令が悉く彼の名にその權威を見出したといふ事實は、如何に彼が偉大なる政治的指導者であつたかを示してゐる。

(四) 彼は社會原則の支持者であつた。

イスラエルの全歴史を通じて流れる根本思想は、デモクラシーであつた。そして、その思想の根本的淵源を爲して居るものは、その國民史の初頭に於て經驗したるエジプトの壓迫である。そして、その壓迫に對する反抗の精神と解放の手段とを與へたものが乃ちモーセであつて、彼の指導下に爲されたエジプトよりの脱出は、乃ち古代に於て行はれた民族的一大罷業であつたのである。爾來曠野に於ける民族生活が與へる

特徴とした。モーセはエジプト王バロの宮殿に生育したのではあつたが、彼がその使命を與へられたのはミデアンの野に於ける可成りに長い生活を経て後のことであり、神より召されたのは羊を牧ひつゝあつた眞只中の出來事であつた。そして彼はエジプトの都市文化に反抗し、イスラエルの民をその奴隸的地位より救はんが爲めにその努力を捧げたのである。彼がバロに向つて繰り返した語が『イスラエルの神ヤーエかくいひ給ふ 我民を去らしめ彼等をして曠野に於て我を祭ることを得せしめよ』といふのであつたに見ても、彼の使命が野に存したことを窺ひ得るのである。

(二) 彼はヤーエに對する熱心家であつた。

既に記したやうにナビーイムの一特質は、ヤーエに對する熱心といふことであつた。しかも彼等が金科玉條としたであらうと思はれる『汝我の外に神ありとすべからず』なる誡律は、モーセに由つて與へられたものであり、しかもそれが與へられた舞臺は天震ひ地動くといつたやうな境地であつたとの傳説は、モーセがこの世ならぬ經驗の中に、この眞理の啓示を握み得たのであることを示すのであつて、彼が豫言者らしい

イスラエルが、その國民史の最初に於て經驗したる危機は、エジプトに於ける苦難であつた。そして、この危機に際して出現したる豫言者が、モーセであつたのである。モーセが豫言者なる名稱を與へられてゐるのは、後世豫言者が發達したる後に書かれたる文書に於てであつた。彼は自ら豫言者と稱したのでなく、又恐らく、當時の民もさうした名稱を以て彼を呼んだのでは無かつたと思はれる。しかし、モーセの性格と事業とを考察すれば、彼が『豫言者』と呼ばれたことが極めて恰當であり、彼は眞實の意味に於て、豫言者の父であつたことを見出すのである。

(一) 彼は野の人であつた。

イスラエルの宗教も、その社會組織も、これはその祖先達がその住居の地としてゐた『曠野』^{あれの}の產物であつた。そしてイスラエルの危機は常に、この曠野の文化が、耕地又は都市の文化と相争ふ時に起つたのであり、イスラエルに於ける改革とは『曠野』より承け繼がれたる精神の復興といふことであつたのである。随つてイスラエルの精神的指導者である豫言者達は、野の人であり、又は野の精神の強調者であることをその

である。異教の豫言者達も、その群盲たることに於てイスラエルの豫言者達と同一であつたが、只彼等の握みたる象が、眞實ならざる象でありしたために、彼等は誤れる途へ進んだ譯である。

(二) 第二の理由は、イスラエルの歴史が苦難の歴史であり、幾多の重大なる危機を通過したものである點に存する。まことに、イスラエルに於ては、危機にあらざれば重要な豫言者の出現なく、又、重大なる危機あれば、そこには必ず豫言者の出現を見たのである。かやうにして危機の產出物であつた彼等は、平和の時代に於けるもののやうに、その機能を遊戲的に使用するを得なかつたのである。それがために彼等は常に眞率の態度を持し、それがために彼等は他の國々の豫言者に見るが如き墮落を免れ得たのである。

第四章 『建國』の豫言者、モーセ・デボラ・サムエル・

然るにイスラエルに於てのみは、豫言は時とともに異常なる向上の力を以て進展し豫言者は國王の重大なる顧問であり、民衆の指導者であり、真理の究明者である有様となつた。この差異は果して何に基づくのであらうか。

(一) その第一は、いふまでもなく、イスラエルの神なるヤーエが、他の神々とはその本性を異にしてゐたことである。豫言といふは、一種の器官に過ぎない。器官はその用途によつて惡ともなり善ともなる。イスラエルの豫言は其源を善き神に有したりしが故に、それ自らも善きものとなつたのである。

勿論イスラエルとて、その當初よりヤーエの全豹を知つて居たので無いことは既に述べた通りである。まことに、イスラエルの歴史は『神への巡禮』であつて、彼等が最初神に就て知り得たものは極めて部分的のものであつたのに過ぎぬ。恰も群盲象をさぐるの比喩の如く、全體を知れる後に於ては滑稽なりと感ぜらるる神觀を有したのであつた。しかも重大なる事實は、彼等がその探りたる象を確く握つてゐたことである。故に彼等がその象たるを知ると知らざるとに論なく、彼等は行くべき所に導かれたの

の前に汝完き者たれ。汝が遂ひはらふ衆の國々の民は邪法師卜筮師などに聽くことをなせり。然れど汝の神ヤーエ然する事を許し給まはず。汝の神ヤーエ汝の中、汝の兄弟の中より我のごとき一箇の豫言者を汝のために興したまはん。汝ら之に聽くことをすべし。

とある。これによつて見ても、豫言者と云ふものと他の國民の間に於ける魔法使ひだとか筮者とか或は憑鬼する者とか云ふものとは、系統的にその種類を同じくしてゐるものであるといふことができる。見えざる世界のことを判斷し、又は人々の運命を豫言するといったやうな事を爲すものは、世界何れの國にも存したのであり、バビロン、アッシリヤ、エジプト、ギリシヤ、ペルシヤ、ローマ、印度、支那等、悉くこの種のものを有したのである。しかも人智の進むとともに、何れの國に於ても、それは進歩せる科學及び哲學等に壓せられ、この種のことを行ふものは迷信者、又は欺瞞者として蔑視されたのであつて、キケロの如きは、ローマの豫言者共は、途上その同輩に出合ひながらよくも噴飯せずにはゐられるものだといつて、彼等を攻撃してゐる程である。

に、時代といふが如き溶媒を轉じて、之を現代的のものとすれば、若し同一性質の條件が具はれば、現代に於ても同一のことが起り得るのである。その意味に於て、豫言者が現代人たる我等に與へ得る指導の量は極めて多いのである。従つて豫言者の時代的背景を知することは豫言者を研究する上に極めて緊喫のことであらねばならぬ。本書に於て特にその重點を豫言者の社會的及び思想的背景に置かうとしてゐるのも、全くこの理由に基づくのである。

第三章 異教の豫言者とイスラエルの豫言者

申命記十八章九節以下に

『汝の神ヤーエの汝に賜ふ地にいたるに及びて汝その國々の民の憎むべき行爲を倣ひ行ふなかれ。汝らのうちにその男子女子をして火の中を通らしむる者あるべからず、また卜筮する者邪法を行なふもの禁厭する者魔術を使ふ者法印を結ぶもの憑鬼する者巫覡の業をなす者死人に詢ふことをするものあるべからず。凡て是等の事を爲す者はヤーエこれを憎みたまふ。汝の神ヤーエが彼らを汝の前より遂ひはらひたまひしも是等の憎むべきことのありしに因てなり。汝の神ヤーエ

我信す』といふやうな推論的なものでなく、『ヤーエ斯く曰ひ給ふ』といった宣言的なものであつたのであり、それだけに又、力強い影響を他に與へ得るものであつたのである。

以上説き來つたところを以て既に明らかであるやうに、豫言者の有する職能の本質は、ある人々が考へるやうに（それはユダヤ教から承け繼がれたものではあるが）遠き將來に關する神の計畫を、一種の謎的な語を以て宣明するといふことではなく、寧ろ彼等は、彼等が住んでゐた時代の實際問題に對して、彼等が眞に信するところを述べ、以て警世の語を發したのであり、將來に關する發言も存したのには相違ないが、しかしそれは要するに第二次的のものであり、又、それとても當面の問題に關係して論ぜられたものであると見るのが正しい。

しかし、このことは彼等の敎説が、國を異にし、時代を異にしたる我等に何の關係も無いものであるといふ意では決して無い。彼等の述べたる眞理は永遠性を有するものであり、ただ、その眞理の背景を爲すものが、その時代の事象であつたのである故

る。そして、例へば天文學者は日蝕、又は慧星の出現を前知し、従つて、將來のことに關して前以て之を述ぶる乃ち豫言することを得るのであるがこれと同じやうに靈界の科學者なる豫言者も、起り來る社會事象の中に、常人の透察し得ざる宗教上及び道德上の意義を透察する。そして、それを闡明し、それに關して警告を發したのである。そして、さうした宗教上及び道德上の事實が必然的に招來すべき、將來の事について豫言したのである。ただ、それが物質的事象ではなく、靈的事象であるために、その將來に關する預告も絶對的なものでなくして、條件的なものであつた。乃ち罪の結果として惡しき運命が國民の上に来るのではあるが、しかし若し悔改めるならばそれを免れることができるといつた種類のものではあつたのである。

しかし、豫言者達が、さうした眞理の發見者となつたのは、決して自ら求めて然るのでは無かつた。『ヤーエの靈彼にのぞみ』といふ句が、いくたびも繰り返へされて居るのに由つても明らかであるやうに、彼等是一種のいはゆる『止むに止まれぬ』衝動、神よりの靈感に由つて、その事に従事したのである。従つて彼の傳ふる眞理も『故に

義の語から轉化したのであるともいはれてゐる。しかし聖書が記載された時代に於けるこの語の意義は出エジプト記第七章一節が明らかにしてゐる。モーセが神よりの命令を受け、イスラエル人をエジプトの苦役より救ひ出すべき責任を負はされ、しかも、自らは決してその任に堪ふるものにあらざることと言明した時、神の言として、『汝の兄弟アロンは汝の豫言者となるべし』とある。この豫言者なる語は即ちナビーイム（複數）の單數（ナビー）である。そして、その前後關係が明らかに示してゐるやうに、それは決して、後に起るべきことを前以て言ふといふ意味では無く、雄辯なるアロンが、訥辯なるモーセの爲めに、代言者たる役を演ずべしとの意である。故に豫言者がその職能としたのは、神に代つて言ふことであつたのである。天に口なし人を以て言はしむ。これが豫言者であつた。既にいつたやうに、英語のプロフェット（豫言者）の語原も同じく『言ひ出づること』にあつたのである。

故に、之を一言にしていへば、豫言者は、靈界に於ける科學者であつたのである。科學者は神の宇宙に於ける存在又は現象に就て、普通人の透觀し得ざるものを透觀す

神として奉じたといふことを意味するのではない。他の民族はモロクを拜し、ケモシを拜む、只イスラエルはヤーエ以外の神を拜してはならぬといふ、所謂一拜教の信仰を有したのである。

しかも、理智的な立場よりして他の宗教と己が宗教との比較を試み、その何れが正しいかを見極めて後、その向背を決するといった態度の人々に由らず、却つて遮二無二ヤーエ神を信じたこれ等の熱心家に由つて、遂に宇宙の絶対神が発見されたといふことは、まことに意義あることで無くてはならない。刀劔の眞贋を見定むる力を養はんが爲めには、眞贋兩種に目を觸るることをせず、常に正眞のものみに目を馴らせなくてはならぬ。さすれば、贋物を見たる時、直ちにその贋物なることが分明する、といはれてゐる。眞の神なるヤーエのみに執着したるナビーイムが、却つて眞實なる神の發見者たるを得たりし所以である。(神の啓示とは、ある人がいつたやうに、人が神に就て爲す發見を、神の側より言つたことである)

ナビーイムなる語の原意に就ては種々の説がある『湧き上る』『注ぎ出す』といった意

ム)の後裔であることが、知られるのである。

人類の教育者とまでに言はれる豫言者達が、かうした野卑な熱狂的なものから發達したものであると云ふことは、いささか當を得ぬものの様であるが、しかし、神の啓示は、よく原始的なるものを基礎とし、この上に築きこれを發達せしめ給ふものである、特にその狂熱的態度、恍惚狀態の故を以て、一般の民衆が、神より直接に作働を受けるものと信じて居たナビイムを助成し、之を以てその聖旨を世に行ふべき重要な器官となし給ふたのは、まことに理由あることだと思はれるのである。

ナビイムに於て特に著しい點は、彼等の神ヤーエ(聖書に『エホバ』とあるは後世の誤讀に出でたものであつて、その原名は『ヤーエ』であつたであらうといふことは現代學者一致の意見である。故に以下本書に於ては、イスラエル(ヘブル人の別名)の神の名は之を『ヤーエ』と呼ぶこととする)に對する執着であり、ヤーエに事へんとする熱心である。

しかし、かくいへばとて、それは決して彼等がヤーエを宇宙に於ける絶對なる唯一

るところであつたと思れる。又同じ記事に由つても明らかであるやうに、彼等は、熱狂家の一團であつたと思はれるのである。そして、彼等はその豫言をするに當つては一種の恍惚状態に入つたものであり、さうした恍惚状態に入るためには、音楽を用ひるとか、又は酒を飲むとか、或は何かを凝視するとかいつたやうな方法が用ひられたのである。かうしたことは、他の國にあるものとよく似て居るのである。希臘では、神がかりの女が何かいふのを祭司達が解釋して、神託として傳へるのであり、さうしたことから、英語のプロヘットの原語となる言葉ができたのである。その意味は『前以ていふ』といふよりは寧ろ『言ひ出づる』といふ方が強い。

ところが、サムエル前書九章九節には『昔イスラエルにおいては、人、神にとはんとて行くときは、いざ先見者にゆかんと云へり、其は今の豫言者は昔は、先見者と呼ばれたればなり』と書かれてある。サムエル書は俘囚時代に書かれたものであり、後代の進歩した豫言の感化を受けて出来上つたものである。しかも、それに由ると、イスラエルの豫言者なるものは、先見者を傳承せずして、却つて豫言者の徒（ナビーイ

でヘブル人の間には古來祭司がその宗教のことを司つてゐた。先見者は神の人であつて宗教家であるが祭司ではない。祭司は、ヤーエを拜する宮の番をする一種の官吏的宗教家であつた。従つて、祭司は神社に定住することを必要としたのであるが、先見者はその點に於て自由であつた。祭司も又民の請に由つて、ヤーエよりの神託を告げたのであるが、彼等は神託を判するためにエボデと稱する一種の神籤を用ひたのであつた。故に祭司が決定を與へ得るものは、黑白を明らかにするといつたやうに二者その一を撰ぶべき場合に於てのみであつた。之に反して、先見者は自由なる神との交通に依り、民に向つて種々の指導を與へ得たのである。

次に豫言者(ナビーイム)であるが、彼等のことも同じくサムエル前書の九章より十章に至る間に書かれてある、サウルがサムエルの所から歸る時、彼は豫言者の群に遇ひ、彼も又その一人となつたとの記事である。そして人々が『サウルも豫言者の中にあるや』と驚いたところを見れば、豫言者の徒といふは、人々が輕蔑的な態度を以て見る輩であり、名家の子息が、さうした輩の中にあるといふことは、彼等の意外とす

があるや。僕またサウルにこたへていひけるは視よ我が手に銀一シケルの四分の一あり我これを神の人に與へてわれらに路をしめさしめんと、昔イスラエルに於ては、人、神にとはんとてゆくときはいざ先見者に行かんと云へり。そは今の豫言者は昔は先見者とよばれたればなり。

とある記事は先見者の職能をよく表はしてゐる。かうした誘視の力は未開人の間に今猶見らるるのであつて酋長又はメデイシン、マンと云ふ様な者共は、實際第六感と云ふべきものを持つて居る。かつて英國が、アフリカ征伐をした時も、容易に之に勝つことが出来ない。さしものロバート將軍もこれには随分苦しんだのである。その譯は後に至つて解つたことであるが、彼等の仲間にこの千里眼が居て、敵の軍隊の編成を全部知つて居たためであつたと云ふ様なこともある。

又サムエルの例によつても解る様に、彼等は國家の重大事件と共に、人事の些細なことに至るまでも——サムエルの場合は、家の驢馬が見えなくなつたと云ふ様なこと——取扱ふものである。國に王を立てるの可否も先見者と相談すれば、驢馬の行衛も探して貰ふといふ譯であつて、先見者は民衆の顧問的宗教家であつたのである。ところ

第二章 豫言者の意義とその職能

聖書に現はれた最古の豫言者を調べれば大凡次の二種を見出すことができる。

一、先見者（ローエ）

二、豫言者（の徒）（ナビーイム）

先見者なるものは、古い昔から存在したと思はれるのであるが、聖書が明らかに示してゐるものは、サムエルを以て始まる。この先見者は、第一に神の人であつた。即ち彼は天と直接に交通する人であり、他の人々に先だつて物を見る人であつたのである。そして、所謂千里眼の所有者であり、その力を或る程度まで職業的に使用してゐたものであるらしい。サムエル前書九章六節以下に

しもべ
僕これにいひけるは、此邑に神の人あり尊き人にして、其の言ふところは皆必ず成る、我らかしこにいたらん、かれ我らがゆくべき路をわれらにしめすことあらん。サウル僕にいひけるは我らもしゆかば、何をその人におくらんか、器のパンは既に盡きて神の人におくるべきものあらず何

形となつて實現されたかと云ふことを記すものであり、その基本を爲す傳説も民話も、豫言者の感化の許に、成生されたものである。又、舊約の律法は、國民思想がその生活の上に爲したる表現であり、その思想は豫言者に由つて導かれたものである。舊約の中には又詩歌がある。然し、それは豫言者によつて與へられた靈感の發露である。智慧文學は豫言者の思想を實際的方面に於て表はしたものであり、豫言によつて發展した宗教を體制的に維持したものが、乃ちヘブル人の祭司である。そして、舊約宗教がこの世の塵に蔽はれて、その潑刺たる生命を失はうとするに至るとき、これに淨化作用を與へたもの又豫言者であつた。さればある人が、豫言を稱して舊約のハート（中心、心臟）であるといつてゐるのは至言であるとしてよい。

る。しかし、宗教が如何に國民生活に用ひらるべきものであるか、國際生活に活かして使はるべきものであるか、その國民全體が同宗教に屬する時、宗教の社會的適用は如何なるべきか、等の重要な事柄については、舊約が實際上の資料を以て偉大なる教訓を我等に示して呉れるのである。

かやうにして、舊約は、國民的に爲されたる宗教生活の人生的記録である。故に各種の様態に於て發露した宗教心の記録である。従つて我等は之を誦することに由つて我等の裡に燃え盛りつゝある神を求むる心とか、或は我等の拙なき才能と舌とを以てしては表現し得ざる宗教的熱情に、よき捌け口を與ふことが出来る。かくて我等は舊約の中より我等の生命を取り出すとともに、我等自らこの中に住むことによつて、舊約を我等自らの書と爲し得るのである。

かやうにして舊約聖書はレッスングがいつたやうに人類教育に於ける重大なる位置を占むるに至たのであるが、而も舊約宗教の中心をなし、その生命的源泉を爲してゐるものは、その豫言であつた。舊約の歴史は豫言によつて與へられた感化が如何なる

反映されてゐるからだ。

(二) 舊約の記事が寫眞的に正確でないからといつて、それは舊約の價值をおとさない、大切なのはその歴史的事實に對する解釋であるからだ。

(三) 我等に直接有用でない記事も、それは歴史的發展の跡を明らかにする必要のためのものであつてみれば、牡丹餅を入れる重箱が、牡丹餅のやうに喰べられるもので無いとしても、その重要性は失はない譯である。

(四) ある書が異端的のものであるとの評があつたといふやうなことも、それは却てその書がほととの人間的記録であつて、決して可い可減に拵らへ上げた教訓書でないといふことを示してゐる。

舊約は新約と同じやうに、人生そのものの產物であり、それであるが故に我等はそれが、歴史の中に働き給ふ神のインスピレーションの產物であることを信ずることができる。

新約は個人的なる宗教記録である。そして、その意味に於てそれは極めて大切であ

て實際的な民である。故に彼等が爲したる真理の發見は、經驗を通じて爲されたものであつた。そしてこの經驗の記録が即ち舊約なのである。アモス、ホゼア、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ヨナ書の記者、ヨブ記の記者等は、實に、神を經驗することに關する特能者である。舊約を學ぶことは、是等特能者の思想に觸れ、その指導を受けることである。後車たる我等の爲めに、善惡ともに眞實なる前車となつて呉れるものが彼等である。

しかし、かくいへばとて、舊約の各部が悉く非常に高い宗教性を持つてゐるといふのでは無い。あるものは殆んど無用と思はるるやうなものがあり、ある箇所は實際に於て不倫だと思はれる場所がある。又例へば『傳道の書』のやうに、人生には何等意味なしといつたやうな、如何にも反キリスト教的、否、反有神教的な思想のものも含まれてゐる。

しかし、そのことが尊いのである。

(一) 舊約の記事の中に矛盾があつたりするのは、時代々々によつて異なる思想が

想及び字句を使用したのである。故に舊約を理解せずしては、新約の理解は困難であるといはなければならない。

イエス自らにしても、又その弟子たるヨハネにしても、ペテロにしても、特に又パウロにしても、彼等がそのインスピレーションを見出し、又日毎の友としたりしものは舊約であつたことを想へば、舊約それ自身が偉大なるインスピレーションの源であることがうなづかれ得る筈である。更に又彼等は國民生活が産み出したる、ある意味に於ての最後の所産であつて見れば、その根源たるヘブル人の歴史は、我等にとつて尊貴なるものであらねばならぬ。しかも、そのヘブル人の外的行動及び内面的生活の記録が、乃ち舊約なのである。

このことは直ちに次のことを意味する。

ヘブル人は世界に於て一にして善なる神の發見者である。その古よりして、彼等はある人がいつたやうに『醉漢群の中に於ける唯一の素面者』の觀を呈してゐた。そして遂に唯一優秀なる眞理の發見者となつたのである。ユダヤ人はギリシア人と異なつ

(二) 或は又舊約は、考古學者のための資料を提供するに過ぎないと誤想したりした點に基づく。

しかし、舊約は舊約として異常なる價值があることを忘れてはならぬ。

新約はある意味に於て高等數學のやうなものである。普通數學に於ての結論を前提としてゐるのである。

だから、宗教のことを何も知らない人々とか、神が一にして善に在すものであるといふことを信じない人々には、新約は何のことか分らない。何故ならば、新約は、パリサイ人のやうな、堂々たる、そして熱心なる宗教家達に對する攻撃などに滿されてゐるからである。そして又新約に於ては律法の行ひといふことに對する論争が甚だしい。故に律法の行ひの無効であることを知らない人々は、實際、新約の味そのものが分らないのである。新約は舊約を豫想して書かれてゐる。否、もつと正確にいへば、新約の記者達は、自分達が經驗した、キリストに由れる劃期的にして革命的な生命を、如何にして表現せんかと迷ふ程であたので、彼等が知れる唯一の表現法たる舊約の思

付かないでゐた。氣付いたとしても大した重要性を其處に見出すといふことをしなかつた。従つて舊約の有する眞實の美、及びそれが纏まつた文書として與へる價值が理解されなかつたのである。

それとともに又、舊約にある歴史は、新約に於て完成されたるものの型であり、舊約の豫言は新約に於て實現されたるものの順序書プログラムであるといつた解釋が行はれてゐたために、新約を有するクリスチャンが、さうした既に使用を終つたプログラムを一々研究する必要などは無いと考へられるやうに至つたことなどが、ある方面に於ける舊約に對する興味を失はせたことも明らかである。

更に又他の方面に於ても、舊約に對する興味を失はしむべき原因があつた。それは近代に於ける高等批評の對象が主として舊約に向けられてゐることを、ほのかに聞き込んだ人々が、或は

(一) 既に舊約は、さうした解剖刀にかかつて殘骸として保存すべき價值すらないものと考へたり、

と眞情とに打たれて、しばしは出すべき言も無いやうな有様に見えた。そして聖會者達は口々に、そもそもこの驚くべきものは何處に於て發見されたる何書であるかと尋ねた。そこでフランクランは、これは聖書の中の一書である、かの無智の表現たる聖書の中にあるものであると答へて、滿場を驚かしたといふ話がある。

まことに舊約は一大文學である。しかも葬られた文學である。近代人の痼弊は偉大なる文學を等閑に附することにある。ホーナーが偉大だといふ。何人も異存が無い。しかし異存が無いだけで誰も之を深く讀まない。セーキスピアも同じことである。ゲーテもさうであらう。舊約も同じやうな運命に際會してゐる。しかも舊約をして、人々から忘れられるやうにならしめた素因は、他の大文學が有するよりも更に勝つて深刻なものがある。

その一は聖書、特に舊約が神學上の説明的聖句を授すための壇場とされたことである。それが爲めに舊約中の諸多の文句はその前後關係から全く分離されたる使用を受けたために、人々は舊約の各書が、一つの纏つた話、又は説教の集合であることに氣

第一篇 發生時代に於ける豫言の本質

第一章 舊約聖書の價值と豫言との關係

ベンヂヤミン・フランクリンがフランスへ行つた當時、フランスの上中流社會では、一般に聖書に反對し、これを無視するの風が盛んであり、聖書のことを語り、又は聖書の中から引用句を持ち來つたりすることは、無智か偏屈かの象徴だとされてゐた。そしてその反對に各種の東洋古文書を發見し、之を紹介批評し、又は之を玩味することは極めて重要なことであり、又興味あることとされてゐた。

フランクリンも又この種のクラブに屬してゐたが、そのクラブでは順代りに、何か東洋の古書を探し出して之を紹介することとなつてゐた。やがてフランクリン自らそのことをせねばならぬ順番となつて來た。彼は一人の女優を雇ひ入れ、之にルツ記を暗記させ置き、その會にのぞんで之を人々の前に暗誦せしめた。しかるに満場その美

於約
け舊
るに

豫
言
の
進
展

村
尾
昇
一
著

ハ	アシアオカス・エビファネーの迫害とユダヤの獨立	二六八
第二章	默示文學の本性とその價值	二六八
第三章	ダニエル書の内容とその使命	二七四
イ	ダニエル書に於ける英雄物語	二七四
ロ	ダニエル書に於ける異象	二八二
第四章	ヨエル書その他の默示文學	二九二
イ	ヨエル書の使命	二九二
ロ	ゼカリヤ書の添加	二九七
第五章	キリストに於ける豫言の完成	三〇一

ロ ゼカリヤの宗教的教説 二三四

第四章

「徳」の豫言者マラキ 二三六

イ マラキ書とその背景 二三六

ロ マラキ書の使命 二三九

第五章

オバデヤ及び第三イザヤ 二四二

イ 第三イザヤの宗教觀 二四二

ロ 第三イザヤの罪惡觀 二四五

ハ 第三イザヤとユダの將來 二四七

第六章

ヨナ書の眞性とその使命 二五一

イ 律法主義とヨナ書の眞性 二五一

ロ ヨナ書の使命 二五四

第五篇

ギリシヤ時代に於ける豫言の進展 二五七

第一章

ギリシヤ時代に於けるユダヤの運命 二五七

イ アレキサンダー大王の東方進出 二五七

ロ ギリシヤ化運動とユダヤ教との抗争 二六〇

ホ	ユダヤ恢復の希望	一九四
ヘ	理想王國の憲章	一九六
ト	豫言史上に於けるエゼキエルの位置	二〇一

第四篇

ペルシヤ時代に於ける豫言の進展

二〇六

第一章

「慰」の豫言者第二イザヤ

二〇六

イ バビロンの滅亡とペルシヤの興起

二〇六

ロ 慰の豫言者第二イザヤ

二〇九

ハ 世界的唯一神の信仰

二一三

ニ ヤーエとイスラエルとの特殊關係

二一四

ホ イスラエルの世界的使命

二一六

第二章

「殿」の豫言者ハガイ

二二二

イ ユダヤ人の歸還

二二二

ロ 豫言者ハガイとその教説

二二六

第三章

「幻」の豫言者ゼカリヤ

二三〇

イ ゼカリヤの愛國的活動

二三〇

第四章

イ	エレミヤの召命	一五七
ロ	申命記法の發布とエレミヤ	一六〇
ハ	エホヤキムの登位とエレミヤ	一六二
ニ	隱遁時代に於けるエレミヤ	一六四
ホ	エレミヤの疑惑	一六五
ヘ	俘囚に對するエレミヤの觀察	一六八
ト	ゼデキヤ王バビロンに叛く	一七一
チ	エレミヤの愛國心	一七二
リ	エレミヤの入獄とエルサレムの滅亡	一七五
ヌ	個人宗教と「心」の宗教	一七七
ル	エレミヤの晩年と彼の功績	一八一
	「法」の豫言者エゼキエル	一八三
イ	著者としての豫言者	一八三
ロ	エルサレム陷落以前に於けるエゼキエルの活動	一八六
ハ	エゼキエルに對する反對運動	一八九
ニ	第二俘囚以後に於けるエゼキエル	一九二

イ	ミカの生地と彼の問題	一三八
ロ	支配階級の罪	一三〇
ハ	富者と宗教家の罪	一三二
ニ	ミカの成功	一三三
第五章	「國」の豫言者ナホム	一三六

第三篇

バビロン時代

第一章	「呪」の豫言者ゼバニヤ	一四〇
イ	マナセ王と反宗教改革	一四〇
ロ	スクテヤ人の侵入	一四一
ハ	ゼバニヤ起つ	一四二
ニ	ゼバニヤの貢獻と申命記	一四六
第二章	「信」の豫言者ハバクク	一五〇
イ	ユダの衰滅期とバビロンの興起	一五〇
ロ	ハバククの問題とその解決	一五三
第三章	「心」の豫言者エレミヤ	一五七

第三章

イ	ホセアの直面したる問題	八一
ロ	慘憺たるホセアの家庭生活	八四
ハ	神に對する無智が罪の原因	八六
ニ	淫行の靈と偶像禮拜	八九
ホ	宗教の腐敗が招來する國民性の破壊	九二
	「聖」の豫言者イザヤ	九五
イ	ウジャ王治下のユダ	九五
ロ	イザヤの當面したる社會問題	九七
ハ	イザヤの召命	九九
ニ	アハズ王治下に於けるイザヤの活動	一〇四
ホ	インマヌエルの豫兆	一〇六
ヘ	北方イスラエルの滅亡	一〇九
ト	ヒゼキヤ王と親エデブト派の活躍	一一四
チ	セナケリブの侵略とユダの宗教改革	一二〇
リ	セナケリブの再征とイザヤの晩年	一二三
	「土」の豫言者ミカ	一二八

第四章

第六章 成書豫言者の出現……………

四三

第二篇

アツシリヤ時代に於ける豫言の進展……………

四八

第一章

「義」の豫言者アモス……………

五〇

イ アモスの時代……………

五〇

ロ 道德の頹廢と司法の腐敗……………

五六

ハ 宗教の隆興とその危険性……………

五九

ニ アモスの活動……………

六三

ホ 職業的宗教家と改革者……………

六六

ヘ 王の任命者と神の任命者……………

六九

ト 體驗より來れる教養……………

七一

チ アモスの對策……………

七三

リ 回心の懲恤……………

七五

ヌ 懲罰の宣言……………

七六

ル 世界同胞主義の高調……………

七九

第二章

「愛」の豫言者ホセア……………

八一

舊約に於ける豫言の進展 目次

第一篇	發生時代に於ける豫言の本質	三
第一章	舊約聖書の價值と豫言との關係	三
第二章	豫言の意義とその職能	一二
第三章	異敎の豫言者とイスラエル豫言者	二一
第四章	「建國」の豫言者、モーセ・デボラ・サムエル	二四
イ	モーセ	二四
ロ	デボラ	二八
ハ	サムエル	三二
第五章	「自由」の豫言者、ナタン・エリヤ・エリシャ	三三
イ	ナタン	三三
ロ	エリヤ	三五
ハ	エリシャ	三九
ニ	紀元前九世紀の宗教觀	三九

の解釋に關しては、全く勝手氣儘な説が横行し、信仰篤い人々が、却つてかうした輩の説に耳を傾けらるといふ有様を見ては、自分の如きものが飛び出して、兎に角、手ほどきだけでも日本語で書いて置くのは、全然無益であるまいと、自ら慰めてゐる次第である。

時を隔て、事情を異にして書いた草稿が、やがて本書を形成するやうになつた爲めに、文章上に不一致の點あるは、讀者の寛恕を乞ひたい。猶始めて豫言のことに注目する方々は第一編第一章の後、直ちに第二編第一章『義の豫言者アモス』を讀み、然る上他に及ばるることを希望する。

昭和三年四月

村 尾 昇 一

序

人類が有する精神的文献の中に於て、その生命的價值に於て何ものの追隨をも許さざる高位にある舊約聖書は、未だ我國人の間には充分理解されてゐない。特に舊約の中核をなすべき『豫言』のことに至つては、クリスチャンの間に於てすら、極めて少數の人が正しき解釋の恩恵に浴してゐるだけであつて、一般には神祕なる謎の國となつてゐる。

この間にあつて、舊約豫言を發達史的に物語り、そこに働く神自らの手を探り求め、又、更に進んで豫言書を内容的に研究し、その生命に觸れんとの希望を有せらるる方のために、簡單なる手引たんとするのが本書の目的である。

自分だけの望をいへば、かうしたものを書くのは、もつと後年のことにしたかつた。しかし、考へて見ると、日本語に依つて出されたこの種のもの、渡邊善太、松田明三郎兩氏のものと、宮澤六郎氏がニウドソンのそれを、近頃になつて翻譯されたのがあるだけであり、しかも、豫言史全體に亘つたものは一も無い。それとともに豫言者

立教大學教授 村尾昇一著

舊約に於ける

豫言の進展

東京 啓明社 刊行

THE DEVELOPEMENT OF
THE O. T. PROPHECY

Presented to
The Missionary Library of
Wycliffe Colledge
Toronto
By The Author
(Rev. M.S. Murao, B.A. -'20)



The Leonard Library

Wycliffe College

Toronto

Glacke

Shelf No. *B51.198 M97*

Register No. *19217*

June 20 19*52*

